

鹿兒島県史料

旧記雜録追録

五

例言

一本書は、東京大学史料編纂所蔵本「薩藩舊記雜録」を底本とし、そのうち追録卷九十五から卷百二十までを収めて、「鹿児島県史料 旧記雜録 追録 五」として継続刊行するものである。年代は延享四年五月から寶曆十三年十二月までの十七年間である。

一文書・記事を通じ、底本の順序に従い、通し番号を文首に付した。また卷末に文書・記事目録を掲げた。

一文書、または記事が数種の内容に分かれる場合には、小番号を付した。

一刊行に当って、文書の体裁を、おおよそ次のように統一した。

イ 文書の所在などを示す原注は、一字下げて首部に付した。

ロ 猶々書は、二字下げにし、その位置は底本どおりにした。

ハ 文書・記事には適宜に読点「、」および並列点「・」を付した。

ニ 附（付記）、但（但し書）は一字下げにし、改行した。

ホ 文書の年月日、差出、宛所の位置などは、底本の体裁にあわせて、ある程度の統一をした。

ヘ 書状は、底本の体裁に従うが、包紙の封じ目は「ノ」に統一し、包紙への注記は底本にならった。

ト 花押は（花押 N_{ax} ）と番号を付し、適宜人名を傍注するほか、卷末に花押集を掲げた。

一漢字は原則として底本の用字に従い、改める場合はなるべく正字を使用するが、底本の文意体裁をそこなわないものは一部当用漢字新字体を使用した。

一異・略・俗体文字は、大部分を普通の字に改めたが、次のような字は特にこれを残した。

尔(爾) 早(畢) 吳(異) 玠(珍) 弥(彌)

一特殊文字としては、次の字だけを残した。

ノ(しめ) ㇿ(より) ㇿ(まいる) く・く(くりかえし) ㇿ(候)

一変体仮名等は、普通の平仮名に改めたが、ニ、ホ、ホ、西、ロだけはそのまま残した。

一人名・地名および難解な語句などには、適宜傍注を付した。地名は旧薩藩領域外は国名のみ、また領域内は現在(昭和四十六年四月一日)の郡・市名で表わした。

但し、国・市の字はこれを省略した。

一原注には括弧を付さず、新たに注を付す場合には、()で囲んで原注と区別した。

一欠所部の原注、本マ、、欠、スリキレ等は、その部分を□で囲み、本マ、、欠、スリキレ等と傍注した。

一文意の通じない字、またはその箇所は□で囲み、(ママ)、(○○カ)と傍注を付した。

一挿入、付紙、押札等は、右肩に(挿入)、(付紙)等と傍注し、他とまぎらわしい場合には「」で囲んだ。

一朱書部分は(朱)と頭注し、その箇所を「」で囲んだ。

一行間の書き込みは、底本の体裁にあわせたが、書き込みの内容が、底本に齟齬しない場合は、その位置を示し、関連箇所の文末にまとめた。

一本文書の行間に朱書された返書は、年月日と差出・宛所の関係を示す「上」「下」の位置は底本の体裁どおりとした。

一 闕字・平出等は、原則として底本の体裁に従った。

一 漢文は、返り点・送り仮名等は不統一に用いられているが、なるべく底本通りとした。

一 当時一般に使用された用字のうち、次のようなものはそのまま用いた。

同性(同姓) 陳(陣) 蜜(密) 次使者(継) 諏方(諏訪) 麿(鹿兒) 舩(船) 相摸(相模)
訴詔(訴訟) 飛彈(飛驒) 大守(太守) 太輔(大輔) 諸司代(所司代)

舊記雜錄 追錄五 目次

題字 鹿兒島縣知事 金丸三郎

例言.....四

卷九五	延享	四年	五月	八月	(吉貴公・繼豐公・宗信公)	一
卷九六	延享	四年	九月	二月	(吉貴公・繼豐公・宗信公)	三二
卷九七	延享	五年	一月	一月	(繼豐公・宗信公)	七七
卷九八	寬延	元年	二月	二月	(繼豐公・宗信公)	一一三
卷九九	寬延	二年	七月	九月	(繼豐公・宗信公・重年公)	一六六
卷一〇〇	寬延	二年	九月	二月	(繼豐公・重年公)	二〇八
卷一〇一	寬延	三年	一月	六月	(繼豐公・重年公)	二三九
卷一〇二	寬延	三年	七月	同	(繼豐公・重年公)	二七九
卷一〇三	寬延	四年	七月	寶曆	(繼豐公・重年公)	三一
卷一〇四	寶曆	二年	一月	二月	(繼豐公・重年公)	三五二
卷一〇五	寶曆	三年	一月	七月	(繼豐公・重年公)	三九〇
卷一〇六	寶曆	三年	八月	二月	(繼豐公・重年公)	四一四
卷一〇七	寶曆	四年	一月	閏二月	(繼豐公・重年公)	四三八
卷一〇八	寶曆	四年	三月	二月	(繼豐公・重年公)	四七四
卷一〇九	寶曆	五年	一月	六月	(繼豐公・重年公)	五〇九

卷一一〇	寶曆	五年	七月	——	一〇月	(繼豊公・重年公)	五	四	六
卷一一一	寶曆	五年	一月	——	同	(繼豊公・重豪公)	五	九	〇
卷一一二	寶曆	六年	五月	——	同	(繼豊公・重豪公)	六	二	一
卷一一三	寶曆	八年	一月	——	——	(繼豊公・重豪公)	六	六	三
卷一一四	寶曆	九年	一月	——	同	(繼豊公・重豪公)	七	一	二
卷一一五	寶曆	一〇年	四月	——	——	(繼豊公・重豪公)	七	五	三
卷一一六	寶曆	一〇年	九月	——	同	(繼豊公・重豪公)	七	八	七
卷一一七	寶曆	一一年	一月	——	——	(重豪公)	八	三	一
卷一一八	寶曆	一一年	一月	——	同	(重豪公)	八	七	五
卷一一九	寶曆	一二年	五月	——	——	(重豪公)	九	一	九
卷一二〇	寶曆	一二年	二月	——	同	(重豪公)	九	六	二
花押集							一	〇	七
文書・記事目録							一	〇	一

繼豊公御譜中

正文在文庫

爲端午之祝儀、帷子單物到來歡覺候、委曲本多伯耆守可
述外也、

〔延享四年〕五月二日



松平大隅守殿

薩摩少將殿

爲端午之御祝儀、以使者御帷子單物被獻之外、遂披露外
之處一段之御仕合外、恐々謹言、

〔延享四年〕五月二日

松平薩摩守殿

松平右近將監
武元判

全上

爲端午之御祝儀、以使者御帷子單物被獻之外、遂披露外
之處一段之御仕合外、恐々謹言、

〔延享四年〕五月二日

松平右近將監
武元判

松平大隅守殿

繼豊公御譜中

正文在文庫

なをく御表よりも御禮御申上被成り得共、猶御申
上被成りとの御事、何もよろしく申あけまいらせ外、
めてたくかしく、

五月十二日付の御文下され外、

三御所様益御機嫌能成せられ、御めてたさ、扱は御同氏
(鳥津守)
薩摩守殿へ、今度 上使を以御家督已後はしめて御國元

への御いとま仰出され、白銀・御巻物御戴被成、御懇之
御錠にて、御腰物・御馬御拜領被成

大御所様 大納言様より御巻物御拜領なされ

公方様へハ家來の者 御目見仰付られ外御事御承知被
成、有かたき御事に思召外よし、右の御禮御申上被成り

宗信公御譜中

正文在文庫

爲端午之祝儀、帷子單物到來歡覺外、委曲本多伯耆守可
述外也、

〔延享四年〕五月二日



五月二日

通よろしく申上まいらせり、めてたくかしく、

〔延享四年〕^(宋)

松平

御返事
大隅守様
人々御中

高瀬

清崎

b

吉貴公御譜中

正文在文庫

返々時分からしたいにあつさになりまいらせり、

いよ／＼御機嫌よく被爲入りや、猶きかせられ度御

ほしめしり、何もよろしく御申上成へく、

菊姫様も御しうき仰上られり、よろしく御申上成へ

く、めてたくかしく、

端午の御祝義、をなし御事にいわる入らせられり、まづ

／＼その御地にて

總州様御機嫌よく被爲入、其ほか様方も御きけんよく御

にき／＼しく御いわるあそハしハんと、かす／＼御め

て度思しめしり、こゝ御ほとこても

大守様はしめさせられ御揃あそハし、御機嫌よく御にき

／＼しく御いわるあそハしり、さては此御もく録のこと

く、端午の御しうき御いわるあそハし進しられり御事御

さり、誠にいく久しく相かハラすとの御事迄におほしめ
しり、此よし宜御申上成へく、めてたくかしく、

延享四年^{本カキ}

ひし嶋(龜)

津(久)

嶋(久)

權左衛門さま

人々

荻原

岡田

藤え

b

8 宗信公御譜中

正文在文庫

御札令披閱候、四日市驛御止宿付、以書狀申達り謝禮之

趣、御念入儀存り、恐々謹言、

〔延享四年〕^(宋)

五月十日

尾張中納言

宗勝判

薩摩少將殿

御報

9 吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見り、

三御所様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤り、然者三月十

二日

竹姫君様被爲 入_レ節、菊事御懇之蒙 上意、從

三御所様拜領物被 仰付之、從右衛門督殿 (徳川宗武・田安家) (徳川宗尹) 一種家 刑部卿殿

萬次郎殿表被遺物有之、且又從 (徳川重好) (清水家)

公方様同氏薩摩守大隅守に表拜領物被 仰付、重疊難有

由得其意_レ、紙面之趣各一覽之事_レ、恐_ク謹言、

朱力半 延享四年 五月十二日 本多伯耆守 正珍判

松平上總入道

10 全上

御札令披見_レ、

三御所様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤_レ、然者三月十

二日

竹姫君様被爲 入_レ節、菊事御懇之蒙 上意、從

三御所様拜領物被 仰付之、從右衛門督殿 刑部卿殿 (清水重好)

萬次郎殿表被遺物有之、且又從

公方様同氏薩摩守大隅守に表拜領物被 仰付、重疊難有

由得其意_レ、紙面趣令承知_レ、恐_ク謹言、

朱力半 延享四年 五月十二日 西尾隠岐守 忠尚判

松平上總入道

11 全上

御札令披見_レ、

三御所様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤_レ、然者三月十

二日大奥に

竹姫君様被爲 入_レ節、菊事御懇之蒙 上意、從

三御所様拜領物被 仰付、其上右衛門督殿 刑部卿殿

萬次郎殿より表被遺物有之、且又從

公方様同氏薩摩守大隅守に拜領物被 仰付之、重疊難有

由得其意_レ、紙面趣令承知_レ、恐_ク謹言、

朱力半 延享四年 五月十二日 松平右近將監 武元判

松平上總入道

12 吉貴公御譜中

扣正文在右筆所

一筆致啓上候、

三御所様益御機嫌能被成御座、恐悦奉存_レ、然者同姓薩

摩守儀、今度以 上使家督以後初而國許に之御暇被 仰

出、白銀・御卷物頂戴之、其上

御前に被召出、御懇之 御訖、殊御腰物并御馬拜領、從
大御所様 大納言様表御卷物拜戴仕、於私重疊難有仕合

奉存^レ、右御禮爲可申上呈飛札^レ、御序之刻可然様御取
成所仰^レ、恐惶、

^{朱力キ}延享四年 五月十八日 ^(島津吉貞)御名

酒井雅樂頭様 ^(忠 恭)

^{朱力キ}公方様御方 堀田相摸守様 ^(正 亮)

本多伯耆守様 ^(正 珍) 人々

^{朱力キ}大御所様御方 西尾隱岐守様 ^(忠 尚) 人々

^{朱力キ}大納言様御方 松平右近將監様 ^(武 元) 人々

13 吉貴公御譜中
正文在文庫

御札令披見^レ、

三御所様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤^レ、將又今度

立坊相濟^レ段被承之、目出度被存由得其意^レ、依之被差

越使者候、紙面之趣各申談及 上聞^レ、恐々謹言、

^{朱力キ}延享四年 五月廿七日 本多伯耆守 正珍判

松平上總入道

14 全上

御札令披見^レ、

三御所様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤^レ、將又今度

立坊相濟^レ段被承、目出度被存由得其意^レ、依之被差越

使者^レ、紙面之趣及言上^レ、恐々謹言、

^{朱力キ}延享四年 五月廿七日 松平右近將監 武元判

松平上總入道

15 全上

御札令披見^レ、

三御所様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤^レ、將又今度

立坊相濟^レ段被承之、目出度被存由得其意^レ、依之被差

越使者^レ、紙面之趣及言上候、恐々謹言、

^{朱力キ}延享四年 五月廿七日 西尾隱岐守 忠尚判

松平上總入道

16

宗信公御譜中

正文在文庫

御札令披見^レ、

公方様益御機嫌能被成御座、去八日東叡山 御靈前
御參詣之儀被承之、恐悅旨尤り、紙面趣各申談及 上聞
候、恐々謹言、

〔延享四年〕五月廿九日 本多伯耆守 正珍判

松平薩摩守殿

17 吉貴公御譜中

正文在文庫

返々／＼五月中ハさて／＼うちつゝきあしきてんきに
て御さり、いよ／＼御機嫌よくいらせられりや、き
(か腕)
せられ度おほしめしり、
大守様もなを天氣相、御あつさの御さハリもあらせ
られすり、何もよろしく御申上成へくり、めてたく
かしく、

土用ニ入まいらせり、御あつさになりまいらせり、まっ
／＼その御地にて

總州様御機嫌よく被爲入りや、被爲聞たく思しめしり、
こゝ御ほと

大守様

姫君様御子様方も、いよ／＼御機嫌よくいらせられり、

扱は此御はこの内、御ちゝみハ御美しからすりへとも、

いつものことく進しられり御事ニ御座り、此よしよろし
く御申上被成まいらせ被成りて、よく／＼申せとの御事
ニ御座り、めてたくかしく、

〔延享四年〕

ひし嶋

嶋

隼 人さま

荻原

方

權左衛門さま

人々

岡た

藤え

18 吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見り、四月十六日二丸炎上之段被承之り、依之
御機嫌被相伺之り、弥御勇健御儀外聞可御心易り、紙面
之趣各申談及 上聞り、恐々謹言、

〔延享四年〕

六月十三日

酒井雅樂頭

忠知判

松平上總入道

19 全上

御札令披見り、四月十六日二丸炎上之段被承之り、依之

御機嫌被相伺之り、弥御勇健御儀之間可御心易り、紙面之趣及言上り、恐々謹言、

朱カキ
延享四年 六月十三日

西尾隱岐守 忠尚判

松平上總入道

20 全上

御札令披見り、四月十六日二丸炎上之處、早速鎮り段被承之、恐悦旨尤候、依之御機嫌被相伺り、益御安全御事之間可御心易り、紙面之趣及言上り、恐々謹言、

朱カキ
延享四年 六月十三日

松平右近將監 武元判

鳥津吉貴
松平上總入道

21 全上

なをく御表よりも御申上被成りへ共、なを御文の通何も宜申上まいらせり、めてたくかしく、

五月十五日附にて御ふみ下されり、去月十六日二之御丸出火の處ニ、早速鎮りりたん御めて度思しめしりよし、是により

大納言様御機嫌の御様躰御伺被成度との御事、いよく

御機嫌よくならせられり御事ニ御さり、御ふみの趣よろしく申あげまいらせり、めてたくかしく、

朱カキ
延享四年

お

豊をか

梅その

松しま

山の井

うら尾

たきつ

さえた

まつ平

かつさ入道様

人、御中
御返事

22

吉貴公御譜中

太守宗信襲封後、延享四年丁卯四月十六日 上使執政本多伯耆守正珍來ニ於江都芝邸一、始賜ニ歸國之告一、仍

大樹家重公賜ニ紗綾三十卷・白銀百枚一、是依ニ先躰一也、

同日以ニ 上使執政西尾隱岐守忠尚一

大御所縮緬二十卷賜之、同月十八日 去十六日二之城 朱カキ 上使執

政松平右近將監武元來ニ於芝邸一

家治公紗綾二十卷賜之矣、同月十九日宗信登レ營於ニ

黒書院ニ拜謁

正文在文庫

御札令披見外、

三御所様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、將又今度同
氏薩摩守儀家督以後初の御暇、白銀・卷物頂戴之、其上
御腰物并御馬被下之、從

大御所様 大納言様及拜領物有之、重疊難有由得其意外、
紙面之趣各申談及 上聞外、恐々謹言、

朱力キ

延享四年

六月十八日

酒井雅樂頭

忠知判

松平上總入道

家重公、見謝賜告之事、時蒙懇篤之 台命、拜領

御腰物信一腰及龍蹄一匹而退去矣、同月二十三日發芝

邸、一門島津備中貴儔、家老島津左衛門久甫、用人伊地

知千左衛門季伴・義岡左平太久中等從、駕也、經東海之

驛、五月十一日著伏見、同十五日到大坂、同月十

九日出大坂、同月二十三日到播州坂越、駕船六月

十二日著豐前大里、過九州路、同月二十五日到著

薩府廳城、是故吉貴呈上簡牘於

三御所之執政被謝之、投奉書載于左、

全上

御札令披見外、

三御所様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、將又今度同
氏薩摩守儀家督以後初の御暇、白銀・卷物頂戴之、其上
御腰物并御馬被下之、從

大御所様 大納言様及拜領物有之、重疊難有由得其意外、
紙面之趣及言上外、恐々謹言、

朱力キ

延享四年

六月十八日

西尾隱岐守

忠尚判

松平上總入道

全上

御札令披見外、

三御所様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、將亦今度同
氏薩摩守家督以後初の御暇、御腰物被下之、其上品々頂
戴之、從

大御所様 大納言様及拜領物有之、重疊難有由得其意外、
紙面之趣令承知外、恐々謹言、

朱力キ

延享四年

六月十八日

松平右近將監

武元判

松平上總入道

全上

御札令披見_レ、就酷暑之節

三御所様御機嫌被相伺之_レ、益御安全御儀_レ間可御心易_レ、隨_レ齎節一箱被獻之_レ、各申談遂披露_レ處一段之御仕合_レ、恐_レ謹言、

_レ、隨_レ齎節一箱被獻之_レ、遂披露_レ處一段之御仕合_レ、恐_レ謹言、

朱力_キ
延享四年 六月十八日

松平右近將監
武元判

松平上總入道

朱力_キ
延享四年 六月十八日

酒井雅樂頭

忠知判

繼豐公御譜中

正文在文庫

今朝齎節一箱被獻之_レ、遂披露_レ處一段之御仕合_レ、恐

_レ謹言、

〔朱〕
「延享四年」 六月十八日

忠知判

全上

御札令披見_レ、就酷暑之節

三御所様御機嫌被相伺之_レ、益御安全御儀_レ間可御心易_レ、隨_レ齎節一箱被獻之_レ、遂披露_レ處一段之御仕合_レ、恐_レ謹言、

松平大隅守殿

忠知

〔朱〕
「在右裏」
酒井雅樂頭

西尾隱岐守

忠尚判

朱力_キ
延享四年 六月十八日

松平上總入道

全上

今朝齎節一箱被獻之_レ、遂披露_レ處一段之御仕合_レ、恐_レ謹言、

〔朱〕
「延享四年」 六月十八日

武元判

全上

御札令披見_レ、就酷暑之節

三御所様御機嫌被相伺之_レ、益御勇健御儀_レ間可御心易

松平大隅守殿

〔在右裏〕

武元

松平右近將監

全上

今朝饗節一箱被獻之、遂披露、
處一段之御仕合、恐
謹言、

〔延享四年〕

六月十八日

忠尚判

松平大隅守殿

〔在右裏〕

西尾隱岐守

忠尚

32

宗信公御譜中

正文在文庫

御札令披見、就酷暑之節

三御所様御機嫌以使者被相伺之、益御安全御儀、間可
御心易、隨、琉球布一箱・砂糖漬天門冬一器・赤貝塩
辛一器・琉球泡盛酒二壺被獻之、遂披露、
處一段之御
仕合、恐、謹言、

〔延享四年〕

六月十八日

松平右近將監

武元判

33

松平薩摩守殿

全上

御札令披見、就酷暑之節

三御所様御機嫌以使者被相伺之候、益御安全御儀、間可
御心易、隨、琉球布一箱并砂糖漬天門冬一器・赤貝塩
辛一器・泡盛酒二壺被獻之、各申談遂披露、
處一段之
御仕合、恐、謹言、

〔延享四年〕

六月十八日

酒井雅樂頭

忠知判

松平薩摩守殿

34

全上

御札令披見、就酷暑之節

三御所様御機嫌以使者被相伺之、益御安全御儀、間可
御心易、隨、琉球布一箱并砂糖漬天門冬一器・赤貝塩
辛一器・泡盛酒二壺被獻之、遂披露、
處一段之御仕合
、恐、謹言、

〔延享四年〕

六月十八日

西尾隱岐守

忠尚判

松平薩摩守殿

正文在文庫

返く御表よりも御申上被成りへ共、なを御ふみの
通りよろしく申上まいらせり、めてたくかしく、

五月十三日附にて御ふみ下されり、

三御所様益御安全にならせられり御事、御めて度思しめ
しりよし、土用中猶以て

大納言様御機嫌よくならせられり、御ふみの趣宜申あけ
まいらせり、めてたくかしく、

^{朱カキ}
延享四年

豊をか

梅その

松しま

まつ平
かつさ入道様

山の人、御中
の井
浦
尾

濃津

小枝

全上

なをく何もよろしく申上まいらせり、めてたくか
しく、

五月十三日付にて御文下されり、まつく

三御所様御機嫌能御座なされり御事、御目出度思召被成
りよし、土用中なをまた御機嫌伺ひ御申上被成り御文の
やう、何もよろしく申上まいらせり、御表よりも御申上
被成りへ共、なをまた御申上被成りよし、めてたくか
しく、

^{朱カキ}
延享四年

松平

上總入道様

御返事

人、御中

高瀬

清崎

37 全上

御札令披見り、

公方様益御機嫌能被成御座、四月廿日東叡山 御露前

御参詣之儀被承之、恐悦旨尤り、紙面趣各申談及 上聞

候、恐く謹言、

^{朱カキ}
延享四年

六月十九日

酒井雅樂頭

忠知判

松平上總入道

38 吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

三御所様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、然者四月廿二日御曲輪之内出火之處、早速鎮外段被承之、珍重由得其意候、紙面之趣各申談及、上聞外、恐々謹言、

朱力キ
延享四年

六月廿一日

松平上總入道

酒井雅樂頭

忠知判

其意候、紙面之趣及言上外、恐々謹言、

朱力キ
延享四年

六月廿一日

西尾隱岐守

忠尚判

松平上總入道

41

繼豊公御譜中

正文在文庫

端午之御内書可相渡外間、明日五半時

御城江家來可被差出外、以上、

(朱)
「延享四年」

六月廿四日

本多伯耆守

松平大隅守殿

39

全上

御札令披見外、

三御所様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、然者四月廿二日御曲輪之内出火之處、早速鎮外段被承之、珍重由得其意外、紙面之趣及言上外、恐々謹言、

朱力キ
延享四年

六月廿一日

松平上總入道

松平右近將監

武元判

42

宗信公御譜中

正文在文庫

端午之

御内書可相渡外間、明日五半時

御城江可罷出外、以上、

六月廿四日

(本多伯耆守)
本 伯耆

松平薩摩守殿

留守居

40

全上

御札令披見外、

三御所様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、然者四月廿二日御曲輪之内出火之處、早速鎮外段被承之、珍重由得

寫正文在文庫

唯今迄養子又假養子願被差出候節、近續之内相應之者無之之間、此者相願ひと申儀無之ひ、向後右之趣被相認可被差出ひ、且又近續之内弟・甥・從弟杯有之ひ得共、譯有之、其者不相願ひ者、先より斷申聞候と歟、或病身と歟、或存寄有之不相願と歟、其譯別紙書付差出候様ニ可被致ひ、

右之趣寄々可被相達ひ、

〔延享四年〕六月

寫正文在文庫

覺

御書付寫一通

但御假養子之儀ニ付ひ

御先手

倉橋内匠助様(久)

右より御達被成儀有之之間、今日四時迄之内、私共之間壹人御宅に可罷出旨、昨日御切紙到來仕ひニ付、私罷出

外處、酒井雅樂頭様を内匠助様に被成御渡ひ御書付之趣を以、寫壹通被成御渡ひ、依之雅樂頭様に御銘々より急度御答之儀ニ者不及ひ由、内匠助様を承知仕ひ、尤雅樂頭様御方に者、内匠助様より御在府御在國之御留守居御宅に被招呼、御達被成ひ段を以御答有之答ニ被仰聞ひ、

右之通今日私相動ひ首尾申上ひ、以上、

〔延享四年〕

六月廿九日

佐久間源太夫(盛)

内膳様(顯姓)

正文在文庫

端午之奉書可相渡之間、明日四時 西丸に家來可被差出外、以上、

〔延享四年〕

七月三日

松平右近將監

松平大隅守殿

正文在文庫

端午之奉書可相渡之間、明日四時 西丸に可罷出外、以上、

〔延享四年〕^(朱) 七月三日

松 右近

松平薩摩守殿
留守居

47 吉貴公御譜中

正文在文庫

御札合披見外、

公方様益御機嫌能被成御座、五月八日東叡山 御靈前

御參詣之儀被承之、恐悦旨尤外、紙面趣各申談及 上聞
外、恐々謹言、

^{朱少半} 延享四年 七月六日

堀田相摸守

正亮判

松平上總入道

48 緜豊公御譜中

正文在文庫

爲生見玉之御祝儀、黄金十兩被獻之候、遂披露外處一段
之御仕合外、恐々謹言、

〔延享四年〕^(朱) 七月六日

正亮判

49 全上

松平大隅守殿

正亮

^(朱) 〔右右裏〕
堀田相摸守

爲生見玉之御祝儀、黄金十兩被獻之候、遂披露外處一段
之御仕合外、恐々謹言、

〔延享四年〕^(朱) 七月六日

武元判

松平大隅守殿

武元

松平右近將監

50 宗信公御譜中

正文在文庫

爲生見玉之御祝儀、黄金十兩被獻之外、遂披露外處一段
之御仕合外、恐々謹言、

〔延享四年〕^(朱) 七月六日

本多伯耆守

正珍判

堀田相摸守

正亮判

酒井雅樂頭

忠知判

全上

爲生見玉之御祝儀、黄金十兩被獻之外、遂披露外處一段之御仕合候、恐々謹言、

〔延享四年〕 七月六日

松平薩摩守殿

松平右近將監 武元判

松平薩摩守殿

宗信公御譜中

扣正文在家老座

嶋津又四郎殿當拾四歳被爲成付、當年中 御目見之御願被差出度由、且又被復源姓度由之御書付、當四月 御發駕前但馬守殿より被得差圖外、右御願此節相濟外ハ、御至來年若五節旬月次御登

城をも被相願、是又御願之通相濟外ハ、先規之通被爵を及可被 仰付儀外、然處先年被復源姓度との御願被差出度由、御内々比志嶋隼人殿迄被相達趣有之付得共、其節若先見合可然由、願書不被差出筋、但馬守殿被申出外、右通先年置其許被仰出外次第者、内膳覺罷居外付、爰元段々見合外得共不相見得外付、當四月被差出外書付

〔延享四年〕 八月三日

嶋津左衛門殿

〔下〕樺山主計殿

先年之次第書寫被差出度由、但馬守殿御方に申達置外處、此節別紙之通隼人殿に書通之寫等被書出外付、猶又帳留又次渡等之書付可有之と相糺外得共、不相見得、爰元、御目見御願之儀被相同、且又被復源姓外御願之事共、先年之次第隼人殿に御聞達、何分ニ表被申談、被相同 御意之趣被申越度外、先年若御願之廉無之外付、爲被扣置筋と相見得外得者、此節 御目見御願、且亦來年中共、但馬守殿思召之通敘爵をも被仰付外ハ、時節宜筈之間申談、被相同 御意之趣被申越外ハ、但馬守殿に可申達外、右被復源姓外儀、爰元ニ由 公義に御願如何被仰出事外哉、此段未御聞合等も無之由、近比但馬守殿御直ニ表被仰聞外、此段若爲御存申越候、但馬守殿被差出外書付貳通、隼人殿に之書通寫壹册、御記録奉行しらへ壹通相添此段申越外、以上、

〔延享四年〕 八月三日

伊勢兵部

〔上〕 顯娃内膳

〔延享四年〕 八月三日

〔上〕 顯娃内膳

(の3)

右ニ相付別冊

嶋津右平(久郷)太殿
北條(時成)織部殿
鎌田太郎(政直)右衛門殿

同氏又四郎儀拾四歳ニ罷成り付る、當年中 御目見之儀奉願度存り、此段如何可有御座哉奉願り、以上、

〔延享四年〕
四月

嶋津但馬守(忠雅)

(の4)

覺

同氏又四郎儀拾四歳ニ罷成り付る者、別紙申上り通當年中 御目見之儀可奉願哉と存り、左り願之通於被仰出り者、至來年五節句月次登

城之儀をも可奉願哉と存り、是亦願相濟りハ、如先規來者ニ者紋爵をも可被仰付哉と奉察り、然處先年私復源姓申度段奉願趣御座り處、先見合りる御願をも可申上旨、其節被 仰出り趣承知仕り、然者、右之通來年中ニ表又四郎被爵於被 仰付り者、其混より復源姓り様仕度奉願候、尤此段至其節可奉願儀御座り得共
太守様御留守共罷成り付る、前廣奉願事り間、御多用之砌ニ者御座り得共、右之趣を以何とそ願相叶り様何分ニ

表可然様御執成可被下り、頼入存り、以上、

〔延享四年〕
四月

嶋津左衛門殿
穎娃内膳殿
伊勢兵部殿

(の5)

追啓、今度其御方様御系圖之内御糺之儀被 仰出り付る、私系圖之儀表差出申答ニりハ、總州様御賢慮表被成御座り間、差出り節、前以御伺可申上之旨、先達り穎娃左京殿より委細被仰越り付る、其節貴様に表其段得御意り、未江府より何分共不申來り、然處此間一万田次右衛門其表に差越候ニ付る、樺山典膳より系圖之儀貴様に相伺り付る被仰越り者、私家之儀者、此間藤原氏り得共、此節源氏ニ御願申上、可然旨御内々 御意御座り由、外ニ何

そ御賢慮者無御座候由、委細之趣致承知、誠被爲入御念御事奉存り、此段江戸より到來次第右之御願可申上と存り、其節宜様頼入存り、右之段旁如此御座り、恐惶謹言、

〔元文五年〕
十一月九日

嶋津但馬守(忠雅)

比志嶋隼人様

人々御中

(の6)

追申上外、今度其御方様御系圖之内御糺之儀被 仰出
外付る、但馬守系圖及差出申筈御座外ハ、

總州様御賢慮及被成御座外間、差出被申外節、前以御伺
被申上外様こと左京殿より被仰越外付る、右御請之儀先
達外被申上外、依之右系圖之儀付る者、萬端宜御差圖被
成被下外様こと御頼被申上外處、此節一万田次右衛門其
御地に差上外節、但馬守家此間者藤原氏外得共、此節源
氏之御願被申上、可然由御内々 御意被遊外由、次右衛
門に被仰含外由承知仕、但馬守に申聞外處、早速被達
貴聞御意之趣被仰聞、誠被爲入御念辱次第奉存外、右御
禮之儀及此節以書中被申上外、猶又江戸より申來次第右
御願可被申上外、以上、

〔元文五年〕

十一月九日

樺山典膳

比 隼人様

(の7)

一筆令啓達外、甚寒外得共、但馬守様弥御勇健可被成御
座と称重御儀奉存外、於此御方

總州様御安康被遊御座外、然者御姓之儀付る、但馬守様
兼る御願被思召旨及外、依之御自分迄得御意外、御元祖
從右馬頭様、但馬守様迄御頂戴有之外口 宣、藤原と有

之外哉、此段承度外間、委細御返答可被申聞外、恐々謹
言、

〔元文五年〕

十二月二日

比志嶋隼人

樺山典膳殿

(の8)

尊札拜見仕外、甚寒之節御座外得共、

總州様益御安泰被成御座之旨、乍恐目出度御儀奉存外、
然者但馬守性之儀、兼る願之旨及御座外付る、元祖右馬

頭より但馬守迄致頂戴外口 宣、藤原と有之外哉被聞召

度之旨被仰下之、得其意奉存外、元祖右馬頭以久頂戴之

口 宣者、以前も相見得不申外、二代目右馬頭忠興より

以來、當但馬守迄代々頂戴之口 宣者御座外、何れ及藤

原と有之外、右御尋付る委細被仰下外趣、御紙上を以則

但馬守に申聞外處、誠被入御念御事別る辱被存外、此等

之段宜申上外様こと被申付外間、如此御座外趣宜預御心

得外、誠恐謹言、

〔元文五年〕

十二月四日

樺山典膳

比 隼人様

尊報御與力衆中

(09)

一筆致啓達_レ、雖甚寒之節_レ

總州樣益御機嫌能可被成御座、玆重御儀奉存_レ、次賞樣
御堅固可爲御勤目出度存_レ、然_レ先頃以書中得御意_レ
今度系圖御糺之儀_レ、未江府より何分之到來無御座_レ、

隨_レ拙者姓之儀付_レ、頃日樺山典膳方に御尋之趣以御飛
札被仰越之、誠被入御念辱存_レ、其節典膳より委曲御答
申上_レ付_レ不能詳候、右付_レ者、兼_レ願之趣得御意置_レ
通、何とそ不苦儀御座_レハ、源氏御免被下_レ樣ニ奉願
度存_レ、此段願之筋何樣ニ有之可然哉、兎角以使者可奉
願儀と存_レ、此等之趣先爲御内談如此御座_レ、何れ之筋
ニ表思召之程御差圖被成可被下_レ、頼入存_レ、恐惶謹言、

(宋)
「元文五年」

十二月六日

嶋津(忠雅)但馬守

比志嶋隼人樣

人、御中

(010)

貴札拜見仕_レ、甚寒御座_レ得共弥御堅勝被成御座、玆重
御儀奉存_レ、

總州樣御安康被成御座_レ、然_レ者御性(姓)之儀ニ付、此間樺山
典膳方迄申越趣有之、被聞召達被仰下御紙上被爲入御念
御儀奉存_レ、右付_レ者、此節源氏御願被成度被思召_レ付、

以御使者可被仰上哉之旨承知仕_レ、於此方表當分御記錄

方に糺方被仰付置_レ間、御願被仰上時節之儀_レ、從是御
案内可申上_レ條、先御差扣被成度奉存_レ、此段申上_レ、
恐惶、

(宋)
「元文五年」

十二月九日

比志嶋隼人

嶋津但馬守樣

(011)

一筆啓上仕_レ、餘寒強御座_レ得共弥御堅勝被成御座、玆
重御儀奉存_レ、先頃被仰下_レ御性(姓)、源氏ニ御願時節之儀、
於此御方御記錄方に糺被仰付置_レ間、追_レ御知可申上旨
申上置_レ、此節御記錄方より別紙之通申出_レ、然_レ者御性
を被改_レ儀_レ者

救命ニ無_レ之_レ得_レ者、不罷成筈御座_レ、當時何そ右躰之
御願可被仰上廉_レ不相見得_レ者、先樣(島津久惣)萬壽丸樣御初官
之節、右御性御改之儀被御願出

敕許之上口 宣之表より相直_レ樣被成度御座_レ、尤右之
段御願之節_レ、御聞合之上御願可有御座儀奉存_レ、且又
先達_レ願娃左京より申上置_レ通

公義より御尋之譯表候節_レ、此御方に被仰出_レ上、何分
之譯被仰上筈申上置_レ付、御尋之節_レ其通可被仰上儀ニ

(の12)

外得共、若御家之姓其御方様に無御沙汰、御嫡家之譯を以、林大學頭様御方より直ニ此御方に御尋有之ハ、別紙之通御答可致旨江戸詰御家老中に申遣置り、最前右之一卷私迄御内意被仰下、右御性御改ニ付ル者、屹立御願被仰上儀ニ有テ無御座外間、御家督方御家老共よりハ不申上外、右次第御座外故、以御使者御願被仰上不及事ニ御座外、別紙壹通後年相係儀御座外故、爲御見合差上置外、恐惶、

〔元文五年〕

十二月廿五日

比志嶋隼人

嶋津但馬守様

舊臘廿五日之御札令拜見外、餘寒強外得共弥御堅固御勤之由珍重存外、然者先達而得御意外拙者性源氏願時節之儀、其御方御記録方に札被仰付置外間、追而可被仰知之旨被仰聞置外、依之御記録方も御別紙之通被申出外由、然者性を相改り儀、救命ニ有無之外得者不相成筈ニ御座外、當時右躰之願可申上廉者不相見得り者、萬壽丸初官之節右姓改之儀奉願、敕許之上口宣之表より相直外様可致旨、尤右之段奉願外節者承合外上御願可申上儀と被思召り、且亦先達之頼娃(左廂)左京殿より承外通、私姓之

(の13)

儀ニ付 公義より御尋之譯表外節者 其御方に申上、何分之譯申上筈被仰聞置り付る、御尋之節者其通可致と存罷在外、若此方に無御沙汰御嫡家之譯を以林大學頭殿より直 其御方に被相尋事も外ハ、御別紙之通御答可被成旨、江戸詰御家老中に被仰遣置之旨、御紙面之趣得其意、逐一御尤之至存外、最前右之一卷貴様は得御内意、吃と立御願申上儀ニ有無御座外故、御家督方御家老中ハ御申聞無之外、右之通外間以使者御願等申上外ハ不及事御座外由、尤別紙壹通後年ニ相懸儀御座外故、爲見合被遣被下令拜見、段々被人御念御事辱次第御座外、誠御事多中御世詰ニ被成被下外段不淺存外、先様時節を以願出外節者、猶又可得御内意事外間宜頼入存外、恐惶謹言、

〔元文六年〕

正月朔日

嶋津但馬守

比志嶋隼人様

御報

覺寫

嶋津但馬守殿より源姓被用度旨、先年以來被爲願趣有之外、右付る者段々被相札り得共、何分ニ有不相知外、然者今度

公義御用ニ付、林大學頭様方諸御大名様に御尋之趣も有之_レ得_レ者、但馬守殿に表同前ニ有之_レ筈_レ、若彼方に御尋有之_レ者、此御方様に可被得御差圖旨兼而被仰達置_レ、左_レへ_レ者、姓之儀御片付被召置、其趣私共より直ニ江戸詰之同役に致問合置_レハ、可然旨 御意之段奉承知_レ、依之私共吟味仕_レ越_レ上_レ申上_レ、

一 御家之儀 御元祖忠久公御事

右大將賴朝卿之長庶子ニ_レ、元來源姓ニ_レ被成御座_レハ、於攝州住吉御誕生之節 近衛基通公御恩顧有之、承久三年 基通公之御契子ニ_レ御成、藤原之姓被相冒

御代々、家久公迄被用來_レ處、光久公御代寛永八年

四月朔日初_レ之御敘任之御口 宣 宣旨ニ源姓と被書記、此時より源姓ニ爲被復儀御座_レ、寛永八年迄ハ

家久公御存生爲被遊御事御座_レ得_レ者、如何様御存念も爲有之_レ筈ニ御座_レ、此儀者諸書付等ニ_レ者相見得不申_レ得共、御父子様御相談ニ_レ、右通源姓被復_レ半と乍憚

相考申_レ、然_レ者 家久公ニ及御晚年ニ_レ者、源姓ニ爲被復_レ筈とは亦乍憚相考申_レ趣、先比申上置_レ事、

一 但馬守殿先祖右馬頭以久入道宗恕事者、御家十五代太貴貴久公之御二弟右馬頭忠將之嫡子ニ_レ、垂水を領

し、御家臣ニ_レあり處、嶋津中務太輔豐久、於關ヶ原戰死之後、佐土原城公領と罷成_レ付、他領ニ相成_レり_レ者如何と被思召 (爲津義久) 龍伯公 (爲津家久) 忠恒公より段々御願有之、慶長六年宗恕事佐土原之城番被仰付被遣置、左_レり同八年蒙御免、

家康公ニ 御目見、佐土原城三萬石拜領ニ_レあり、宗恕嫡子守右衛門彰久事者、先達_レ被相果_レ付故、垂水を嫡孫又四郎忠仍ニ 後相模久信と申候、此家玄蕃殿相統ニ而候、 相讓_レり、宗恕事者御家臣を最拔 將軍家御昵近之城主と被罷成、新ニ家被相立_レ、同十五年宗恕卒去_レり_レ故、從

將軍家、遺領を嫡孫忠仍ニ可被下と有之_レ得共、故有之及辭退_レ付、宗恕三男右馬頭忠興ニ拜領ニ_レ、當但馬守殿迄相續ニ_レ御座_レ、然_レ者宗恕事一躰分身ニ_レ兩家ニ相立、但馬守殿家者御昵近ニ被罷成、新ニ家相立候付、譯及相替_レ付故、御家之御二男家と申外無御座_レ、姓之儀者不相替藤原姓被用來_レ事、

一 寛永十九年此御方様御献上之御系圖扣ニ_レ者、自清和天皇系出、源姓藤原姓之題號不被書記_レ、世間流布之譜大名寛永上り系圖之寫ニ 此御方様系圖ニ_レ者源姓嶋津氏と題號相記書記申_レ、但馬守殿家之儀表 此御方様御

系圖之内に被書記付、別立る系圖獻上者無之筈と相考申外、然者 此御方様之儀

光久公御代寛永八年より源姓被復り、宗惣并右馬頭忠興代源姓不被復り共、右通 御本家源姓爲被復御事ニ外得者、但馬守殿家之儀表同前ニ可有之儀ニ御座外、其故者、姓を賜り外儀者

帝王敕命之外絶る不罷成儀御座外、御家之儀元來源姓ニ御座外處、本姓を被差置、他姓不被相冒筈外得共、近衛家之御恩願深ク付、假ニ藤原姓被相用外と相見得申外、

御代々様ニ表本姓ニ被復度思召表爲有之筈外得共、何之涯も無之、其篇ニ 家久公迄他姓を被相冒外半、然處關ヶ原亂後 御當家之御治世罷成、御恩表深キ御事外故、此時節と思召

光久公御代源姓ニ爲被復ニ可有御座儀と奉存外、此儀を以表、但馬守殿家之儀も林家より表 此御方御同前ニ源姓と被書記ニ可有御座儀と相考申外事、

右之次第御座外得者、但馬守殿事源姓被用外筋ニ被仰達外る表、何そ差支申儀者御座有間敷哉と奉存外、尤但馬守殿家此已前諸所御靈屋・石燈爐等之銘ニ、

藤原姓と被書記置、其外ニ表藤原姓被書記爲相誤儀も有之、干一何方より御尋も外ハ、元來源姓ニ外故、本家同前ニ源姓ニ復外と被相答、勿論林家より源と書來外ハ、其篇ニ被差置、且又干一今度林家より藤原姓と被書出外者、於本家者 家久公御晩年ニ 御父子様御相談ニ寛永八年以來源姓被復外、但馬守殿家之儀表、其時節より本家同前ニ源姓ニ被復筈外得共、不案内ニ無沙汰ニ召置外故、頃日存當り本家に申斷外處、嫡子萬壽殿初る敍任之時より源姓ニ復外る可然旨被申付外趣、林家に可被仰斷儀御座外、左外ハ、何そ差支申儀者御座有間敷儀と乍憚私共吟味仕外、何分ニ表御詮儀次第奉存外、以上、

御記録方稽古

〔元文五年〕^(朱) 申十二月四日 日高甚兵衛^(爲市)

吉田用右衛門^(前地)

安藤佐平次^(後原)

御記録奉行

川上平右衛門^(久藤)

右ニ付相付引札

本文之通吟味仕外處、

御口 宣之儀彼方江被相尋り得者、右馬頭以久敘任之御口 宣無之外、右馬頭忠興以來當但馬守殿迄、

代々敘任之御口 宣ニ、藤原姓相見得申外由、此節申來外、右ニ付、得と吟味仕外ニ、以久代 此御方

様御願付、佐土原城拜領り得共、此時代迄者敘任無之外而後、下司相用ヒ爲申事外故、以久事敘任之沙汰ニ不及被罷居り故御口 宣有之間敷と相考申外、

忠興事八元和四年十二月敘任ニ而、寛永八年以前之事外故、御家御同前藤原姓被用筈ニ御座外、但馬守

久雄事者寛永以後慶安元年十二月叙任ニ而外得者、此時節御家御同前ニ源姓ニ被復筈ニ外、然共不案内

ニ而無沙汰被差置、引續當但馬守殿迄藤原姓被用外と相見得申外、 此御方様之儀も、御口 宣を本ニ

被成り而源姓ニ被復り、然處本文之通但馬守殿事、御家御同前ニ源姓被用り様、此節被仰達り得者、御

口 宣之表ニ致相違外、此儀如何可有御座哉と今更相考申外、左外へ者先當分之通ニ而被差置、但馬守

殿子息萬壽殿敘任之節、御口 宣ニ源姓被書出外筋

ニ御願有之、其時より源姓ニ被復り様ニ可被仰付儀ニ御座外、尤今度林家方問條有之外時者、本文之通可被仰付儀と私共吟味仕外、以上、

御記録方稽古

〔朱〕「元文五年」 申十二月十七日 日高甚兵衛

吉田用右衛門

安藤佐平次

御記録奉行

川上平右衛門

〔朱〕
〔以上數通元文五年ナレトモ此年照覽ノ爲書載有之、御譜中之儀載置也〕

54 継豊公御譜中

延享四年七月二十三日、以ニ 上使金田主殿〔字卷〕賜ニ御鷹所

攫之雲雀於繼豊ニ、有病故島津但馬守忠雅代ニ繼豊ニ、到ニ

執政各第一禮謝焉、

55 宗信公御譜中

正文在文庫

爲八朔之御祝儀、以使者御太刀一腰・御馬代黄金十兩被獻之外、遂披露外處一段之御仕合外、恐々謹言、

〔朱〕
「延享四年」
八月四日

本多伯耆守
正珍判

堀田相摸守
正亮判

酒井雅樂頭
忠知判

松平薩摩守殿

56 爲八朔之御祝儀、以使者御太刀一腰・御馬代黄金十兩被

獻之、遂披露外處一段之御仕合、恐々謹言、

〔朱〕
「延享四年」
八月四日

松平右近將監
武元判

松平薩摩守殿

57 吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

三御所様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤、將又今度於
〔朱〕
〔義〕
義丸事、松平兵部大輔養子被 仰出外段被承之、目出度

被存由得其意、紙面趣各申談及 上聞、恐々謹言、

〔朱〕
「延享四年」
八月十三日

本多伯耆守
正珍判

松平上總入道

58 全上

御札令披見外、

三御所様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤、將又今度於
義丸事、松平兵部大輔養子被 仰出外段被承之、目出度
被存由得其意、紙面之趣及言上、恐々謹言、

〔朱〕
「延享四年」
八月十三日

西尾隱岐守
忠尚判

松平上總入道

59 吉貴公御譜中

正文在文庫

返々々本殿にも今度はしめて御着被成、かすくめ
て度御悦思しめし、隅州・菊姫様もいかほとか
御悦おほしめし、御あつきの御時分なかくの御
道中あそはし外へ共、御くたひれも御座不被成、一
入めて度御悦おほしめし、菊姫様もをなし御事
外、よろしく仰上られ度さ、何もくよろしく御申
上成へく、めてかしく、

重陽の御祝義御めてたさをなし御事、いわる入らせら
れ、まつくその御地にて

總州様御機嫌よく被爲入

大守様も御きけんよく、そのほか様方御機嫌よく御にき

くしく御いわるゝあそハしりハんと、かすく御めて度
思しめしり、こゝ御ほとこても、御揃あそハし御機嫌よ
く御にきくしく御いわる被成り、扱は此御もくろくの
通重陽の御しうき御いわるゝあそハしりて進しられり、誠
に幾久しく萬々年もとの御事までこおほしめしり、此よ
しよろしく御ひろう御申上被成へくり、めてたくかしく、

朱力子
延享四年 八月三日 右

ひち嶋(鶴居) 隼人さま 荻原
しまつ(久遊) 仲さま 岡田
人、 むめ

60 宗信公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

三御所様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤り、將又今度於義
丸事、松平兵部大輔養子被 仰出り段被承之、目出度被
存由得其意外、紙面之趣各申談及 上聞候、恐々謹言、

(本)
「延享四年」 八月十三日 本多伯耆守 正珍判

松平薩摩守殿

61 全上
御札令披見外、

三御所様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤り、將又今度於
義丸事、松平兵部大輔養子被 仰出り段被承之、目出度
被存由得其意外、紙面趣及言上り、恐々謹言、

(朱)
「延享四年」 八月十三日 西尾隱岐守 忠尚判

松平薩摩守殿

62 宗信公御譜中

正文在文庫

國許到着御禮之使者嶋津全(久美)、明十五日五時 御城江可差
出外、且又自分之御禮表可申上り條可存其趣外、以上、

(本)
「延享四年」 八月十四日 本多伯耆守

松平薩摩守殿 留守居

63 全上

御札令披見外、

三御所様益御機嫌能被成御座、目出度被存由得其意外、
然者六月十七日御曲輪之内出火之處、早速鎮候段被承之、
恐悦旨尤候、紙面之趣各申談及 上聞外、恐々謹言、

〔延享四年〕 八月十五日

本多伯耆守 正珍判

松平薩摩守殿

64

全上

御札令披見外、

三御所様益御機嫌能被成御座、目出度被存由得其意外、
然者六月十七日御曲輪之内出火之處、早速鎮候段被承之、
恐悦旨尤外、紙面之趣及言上外、恐々謹言、

〔延享四年〕 八月十五日

松平右近將監 武元判

松平薩摩守殿

65

全上

御札令披見外、

三御所様益御機嫌能被成御座、目出度被存由得其意外、
然者六月十七日御曲輪之内出火之處、早速鎮候段被承之、
恐悦旨尤外、紙面之趣及言上外、恐々謹言、

66

〔延享四年〕 八月十五日 西尾隠岐守 忠尚判

松平薩摩守殿

宗信公御譜中

正文在文庫

なをく御表よりも御申上被成りへ共、なを御文の
やう何もよろしく申上まいらせり、めてたくかしく、
七月十六日付にて御文下されり、まつく

三御所様御機嫌よく御座なされり御事、御めて度思召被
成りよし、扱ハ去月十七日の夜御曲輪の内出火の所、早
速鎮、御めて度思召りよし、夫ニ付御申上被成り御文の
やう、何もよろしく申上まいらせり、めてたくかしく、

〔延享四年〕

あ

松平

薩摩守様

御返事

人々御中

高瀬

清崎

67

宗信公御譜中

正文在文庫

なをく御表より御申上被成りへとも、なを御ふみ
の通よろしく申上まいらせり、めてたくかしく、

七月十六日附にて御文下されり、

三御所様益御機嫌よくならせられ、御めてたく思しめし
りよし、扱は去月十七日の夜御曲輪之内出火の處に、早
速鎮りまいらせり御事、御めて度思しめしりよし、此段
大納言様へ御申上被成り御文の趣、よろしく申上まいら
せり、めてたくかしく、

〔延享四年〕

お

豊をか

梅その

松しま

山の井

うら尾

たきつ

さえた

松平

御返事
さつまの守様
人々御中

吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見り、

三御所様益御機嫌能被成御座、目出度被存由得其意り、
然者六月十七日御曲輪之内出火之處、早速鎮候段被承之、

恐悦旨尤り、紙面之趣各申談及 上聞り、恐々謹言、

朱カキ

延享四年

八月十五日

本多伯耆守

正珍判

松平上總入道

全上

御札令披見り、

三御所様益御機嫌能被成御座、目出度被存由得其意り、
然者六月十七日御曲輪之内出火之處、早速鎮り段被承之、
恐悦旨尤候、紙面之趣及言上り、恐々謹言、

朱カキ

延享四年

八月十五日

西尾隠岐守

忠尚判

松平上總入道

全上

御札令披見り、

三御所様益御機嫌能被成御座、目出度被存由得其意り、
然者六月十七日御曲輪之内出火之處、早速鎮り段被承之、
恐悦旨尤り、紙面之趣及言上り、恐々謹言、

朱カキ

延享四年

八月十五日

松平右近將監

武元判

松平上總入道

正文在比志島要人範章

神當流馬術從

吉貴公先年御自分_に御傳受、御書物不殘拜領被仰付 御

書附被下置之處、

宗信公神當流馬術就御鍛練、御相傳可被遊儀_に、依之御

自分方_に老寫令所持、本書老被致返上度旨御直被申上、

此節本書寫共被差出備 御覽、寫老被返下候條可被箇藏

_に、拙者致御取次_に付、爲後證依 仰如件、

延享四年卯八月十五日

鳴津仲

久道判

比志嶋隼人殿

寫正文在文庫

寫

御記錄奉行_に

右寶永二年酉十一月

總州様より神當流馬術比志島隼人殿_に御相傳被遊、書物

不殘拜領 御直之御書付を衣被下置_に、然處

太守様神當流御鍛練被遊_に付_るハ、御相傳可被遊儀_に付

間不殘寫置、本書老返上仕度之段被申出、此節寫相濟、

拜領之書物并寫被差出、拙者より備 御覽、本書老 御

前_に被差置、寫被相返可致格護置_に、左_に右之件拙者

より證書可相渡旨 御意_に、最初拜領之節柴崎十郎右衛

門様より御傳授之御免狀老、佐多豐前殿首尾_に御記錄

方_に相納_に由、三原仲右衛門より隼人殿_に相渡置_に添書

_に相見得_に、隼人殿_に拜領之件御記錄方_に書留等有_に付

ハ、此節返上之次第紛無之様可記置_に、

右可申渡_に、

朱力年
延享四年 八月

(鳥津久道)
仲

右老伊地知新太夫方御記錄奉行御用_に付、御記錄方添役

吉田用右衛門(清總)礪屋鋪_に罷出_に處、島津仲殿方新太夫御

取次を以、右横切御書付壹通御渡被成、用右衛門拜見之

上書寫_に様_に被仰渡、早速書寫、御本書老則新太夫_に

直_に差出之置_に、

延享四年卯八月十六日

正文在文庫

御札令披見り、

三御所様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤り、將又今度御暇、其上御腰物・御馬被下并白銀・巻物頂戴之、從

大御所様 大納言様及拜領物有之、重疊難有由得其意り、國元に到着付る、爲御禮嶋津李被差越之り、紙面之趣及言上候、恐々謹言、

〔卷〕
「延享四年」八月十六日

西尾隱岐守
忠尚判

松平薩摩守殿

75 宗信公御譜中

正文在文庫

返々よろしく申上まいらせへくり、めてたくかし、

六月廿五日附にて御ふみ被下り、まつく

三御所様御機嫌よく成らせられ、御めてたく思召被成り

よし、扱は 御手まへ様御家督はしめて 上使を以御暇

仰出され、白銀・紗綾御拜領被成、そのうへ

御前にて御懇の 御説、ことに御晒物并ニ御馬御拜領

大御所様

大納言様よりも御巻物御拜戴被成、重疊難有思召被成り

よし、今日御國もとへ御着被成りに付、御表へ御使御さ

し出し被成りとの御事にて、御内證よりも御禮御申上被成り御文の趣、よろしく申あげまいらせられり、めてたくかし、

〔卷〕
「延享四年」

豊岡

梅その

松しま

山の井

うら尾

たきつ

さえた

松平

薩摩守様

御返事

人々御中

76 全上

今日御國元へ御着被成りニ付、御表へ御使御差上被成りとの御事、是により

大納言様へ御内證よりも御禮御申上被成りとの御

事、御文の趣よろしく申上まいらせり、なをくめ

てたくかし、

六月廿五日付にて御ふみ下されり、

三御所様ますく御機嫌よく被爲成、御めて度思しめし

外由、扱は御手前様御事、御家督初て

上使を以御暇 仰出され、白銀・紗綾御頂戴被成、其う

へ 御前へ召させられ、御懇の 御詫、殊ニ御腰物并御

馬御拜領、

大御所様 大納言様よりも御巻物御はいれう被成、重く

難有き御事思しめし外由、めてたくかしく、

〔延享四年〕

豊をか

梅その

松しま

山の井

うら尾

たきつ

さえた

お

77

全上

なをく何もよろしく申上まいらせり、めてたくか

しく、

六月廿五日付にて御文下されり、まつく

三御所様御機嫌よく御座なされり御事、御目出度思召被

成りよし、扱は御手前様御家督初る 上使にて御暇 仰

出され、白銀・紗綾拜領被成、そのうへ御懇の 御詫、

殊に御腰物・御馬拜領被成

大御所様 大納言様よりも御巻物拜領被成、重くかた

しけなく思召被成りよし、今日御國元へ御ちやく被成り

ニ付、御表へ御つかひにて御禮仰上られりへ共、なを又

御文のやう何もよろしく申上まいらせり、めてたくか

しく、

〔延享四年〕

松平

薩摩守様

御返事
人、御中

高瀬

清崎

お

78

宗信公御譜中

正文在文庫

以上

薩摩國鹿兒嶋城下東口番所通、長方外北東之間土居三ヶ

所崩り付る、修補之事繪圖朱引之趣得其意り、願之通如

元可被申付候、恐々謹言、

延享四年卯八月廿一日

本多伯耆守

正珍判

宗信公御譜中

正文在文庫

松平薩摩守殿

堀田相摸守

正亮判

酒井雅樂頭

忠知判

國許到着御禮之使者嶋津(久保)李明日四時 御城に可差出外、
以上、

〔延享四年〕 八月廿四日

本 伯耆

松平薩摩守殿

留守居

右明日九時我等宅に可差出外、以上、

〔延享四年〕 八月廿四日

松 右近

松平薩摩守殿

留守居

嶋津 小

正文在文庫

御札令披見外、

三御所様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、將又今度家督以後初の御暇、白銀・卷物頂戴之、其上御腰物・御馬被下之、從

大御所様 大納言様及拜領物有之、重疊難有由得其意外、國許到着付る、爲御禮、以嶋津全如目錄被獻之外、遂披露外處入念外段御喜色之御事外、恐々謹言、

〔延享四年〕 八月廿五日

本多伯耆守 正珍判

堀田相摸守 正亮判

酒井雅樂頭 忠知判

松平薩摩守殿

御札令披見外、

三御所様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、將又今度家督以後初の御暇、白銀・卷物頂戴之、其上御腰物・御馬被下之、從

宗信公御書中

寫正文在文庫

寫

大御所様 大納言様及拜領物有之、重疊難有由得其意、

國元に到着付る爲御禮、以嶋津全如目錄被獻之、遂披露

外處入念、段御喜色之御事、恐々謹言、

〔延亨四年〕
八月廿五日

松平右近將監
武元判

松平薩摩守殿

〔延亨四年〕八月

〔島津久通〕
左衛門

寺社奉行

御記録奉行

高野山蓮金院住職維寶被致病死、維寶遺書を以東室院

亨順房に寺法無滞相濟不得共、蓮金院之儀由緒有之事

故、此御方に猶又右後住相伺旨、高野山役僧并東室

院より申越、達 貴聞外處、先住遺言之通亨順房に後住

被仰付外付、右之段拙者より以書狀役僧并亨順房に申越、

大坂御留守居より表猶申越させ外、已前後住之儀相達

次第不相並外付、後年住替等之節、此節之通御家老中

方書狀差越外様被仰付候條、帳面可記置外、

右可申渡外、

(表紙)

吉 貴 公

繼 豐 公

宗 信 公

延享四年 自九月
至十二月

追 舊 記 雜 錄 卷九十六

84 宗信公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

三御所様御機嫌被相伺之外、益御勇健御儀外間可御心易
外、随而干鱸殘魚一箱被獻之外、各申談遂披露外處一段
之御仕合外、恐々謹言、

〔朱〕 延享四年 九月六日

松平薩摩守殿

酒井雅樂頭 忠知判

85 全上

御札令披見外、

三御所様御機嫌被相伺之外、益御安全御儀外間可御心易
外、随而干鱸殘魚一箱被獻之外、遂披露外處一段之御仕
合外、恐々謹言、

〔朱〕 延享四年 九月六日

松平薩摩守殿

秋元但馬守 涼朝判

86 全上

御札令披見外、

三御所様御機嫌被相伺之外、益御安全御儀外間可御心易
外、紙面之趣及言上候、恐々謹言、

〔朱〕 延享四年 九月六日

松平薩摩守殿

西尾隱岐守 忠尚判

87 繼豊公御譜中

正文在文庫

爲重陽之祝儀、小袖一重到來歡覺候、委曲酒井雅樂頭可
述外也、

〔朱〕 延享四年 九月七日

家重公 印

全上

松平大隅守殿

爲重陽之御祝儀、以使者御小袖一重被獻之外、遂披露外處一段之御仕合外、恐々謹言、

〔延享四年〕

九月七日

松平右近將監

武元判

松平大隅守殿

宗信公御譜中

正文在文庫

爲重陽之祝儀、小袖一重到來歡覺候、委曲酒井雅樂頭可述外也、

九月七日



薩摩少將殿

全上

爲重陽之御祝儀、以使者御小袖一重被獻之外、遂披露外之處一段之御仕合外、恐々謹言、

〔延享四年〕

九月七日

松平右近將監

武元判

宗信公御譜中

松平薩摩守殿

延享四年九月十一日

大樹家重公以佳肴尺下及執政宿次奉書・酒井雅樂頭忠知驛路之證印江府而賜之、於忠知之第一授與之於家臣相良彌一兵衛長主江府留、守屋役、是因先規、賀去載宗信襲封之後始賜告還國而見尋問安否故也、使家臣森喜右衛門有充新番・諸留安右衛門安當同其外上野喜平太・八木源右衛門輕率六人警衛中之上、即日發江都芝邸、不舎晝夜經歷東海・山陽・西海之三道、同十月六日到三鷹府城、宗信乃拜戴之、即日齎宗信報謝執政之書翰及所與驛路之證印上、而使家臣橫山新右衛門安當新番・高崎惣四郎直富上同、輕率六人馳江都矣、茲日爲恩賀之謝使令島津大藏久丘以三若年者、役格一勤之登鷹城、含宗信之命赴江都上、安當・直富等經西海・山陽・東海之三驛、先入丘同十一月四日著江都、故如先規留守居教導而候執政用松平右近將監武元之第一、呈上宗信之報翰、且復納忠知之驛路之證印一勤使者矣、久丘亦經九州之驛路、到豐之前州小倉、駕船著大坂港、歷東海之

驛、同月十日到著江都芝邸、同十三日候松平武元之

第一、呈上宗信之連署、勤使价、且候執政秋元但馬守

涼朝・西尾隱岐守忠尚各位之第一、呈上格書、勤使价、

同十五日應執政之奉書、久丘登營、捧宗信之獻物二

種雙樽、於白書院奉拜謁

家重公、奉禮謝恩賚之達薩府、井上遠江守正教奏

達之、久丘亦親自獻上御太刀一腰・御馬代白銀一枚・

紗綾二卷、奉拜謁

台顏、鳥居伊賀守忠胤奏達之、即退營直登西

城、奏者衆松平主殿頭忠刻出席于檜之間、捧宗信之

獻物一種雙樽、奉申謝恩賜、久丘亦獻上御太刀一

腰・御馬代白銀一枚退去、同十八日應徵久丘登營、

松平武元出席于檜之間、賜宗信之奉書手自見授與

久丘、且紗綾三卷拜戴之、奏者小出伊勢守英智執達

之、同日登西城、秋元涼朝賜宗信之奉書見授與

久丘、同二十日西尾忠尚之第而賜宗信之奉書以用人

見授與久丘矣、使价事畢、而十二月二十七日久丘發

芝邸、歷東海之驛到大坂、駕船延享五年二月十

一日還薩府而復命、

92 全上

正文在文庫

一筆令啓達、

三御所樣益御機嫌能被成御座、可御心易、將亦家

督以後歸國無吳在之、爲御尋御有一種被下、

依之如此、恐、謹言、

〔延享四年〕

九月十一日

松平右近將監

武元判

本多伯耆守

正珍判

堀田相摸守

正亮判

酒井雅樂頭

忠知判

松平薩摩守殿

93

全上

寫正文在文庫

此狀箱并箱壹、從江戶至薩州鹿兒嶋、松平薩摩守所相

届返札可來、於江戶月番之老中、急度可持參者也、

卯九月十一日

〔酒井忠知〕
雅樂印

右宿中

正文在文庫

御札令披見外、

三御所様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、將又同氏大隅守儀、七月廿三日以上使御鷹之雲雀拜領之、難有由得其意外、依之爲御禮被差越使者外、紙面之趣各一覽之事外、恐々謹言、

〔卷〕
「延享四年」九月廿五日

松平薩摩守殿

酒井雅樂頭
忠知判

御札令披見外、

三御所様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、將又先頃從公方様、以上使同氏大隅守御鷹之雲雀拜領之、難有由得其意外、依之爲御禮被差越使者外、紙面之趣令承知外、恐々謹言、

〔卷〕
「延享四年」九月廿五日

松平薩摩守殿

秋元但馬守
涼朝判

御札令披見外、

三御所様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、將又同氏大隅守儀、七月廿三日從公方様以上使御鷹之雲雀拜領之、難有由得其意外、依之爲御禮被差越使者外、紙面之趣令承知外、恐々謹言、

〔卷〕
「延享四年」九月廿五日

松平薩摩守殿

西尾隱岐守
忠尚判

正文在文庫

御札令披見外、弥御無吳之由珍重外、將又今度初御暇其元到着付以使札相達外、爲謝禮太刀・馬代并目錄之通饋給、入御念外段欣然之至存外、恐々謹言、

十月朔日

松平薩摩守殿

尾張中納言
宗勝判

嚮是

今上皇帝御諱遷仁

櫻町院第一皇子 御母 女院御所二條故關白吉忠公女、

延享四年五月二日御受禪、同九月二十一日御即位、其儀

則見行于禁内、是故宗信呈上使翰於江都之執政、

奉賀之、因賜奉書、載于左方、

99 正文在文庫

今度就

御即位、爲御祝儀以使者目錄之通被獻之外、各申談遂披

露外處一段之御仕合外、恐々謹言、

〔延享四年〕

十月二日

本多伯耆守

正珍判

松平薩摩守殿

100 全上

今度就

御即位、爲御祝儀以使者目錄之通被獻之外、遂披露外處

一段之御仕合外、恐々謹言、

〔延享四年〕

十月二日

秋元但馬守

涼朝判

松平薩摩守殿

101 全上

今度就

御即位、爲御祝儀以使者目錄之通被獻之外、遂披露外處

一段之御仕合外、恐々謹言、

〔延享四年〕

十月二日

西尾隱岐守

忠尚判

松平薩摩守殿

102 宗信公御譜中

老君吉貴、學神當流馭馬術於柴崎十郎右衛門正勝、遂

總傳其術、是歲總傳之於宗信、且正勝所傳之馬術書

七卷、折本一册囑于宗信焉、嚮是宗信自幼因比志島

隼人範房門人範房仕老君于大磯館故不傳習神當流馬術、究

其奧術熟功成也、及延享二年宗信期下于薩府、省觀

老君于大磯館之日上、而馭馬備老君之覽、老君太褒

稱之、範房侍側驚嘆之、往昔老君總傳範房書本悉

賜範房、至于是回上之於老君、然範房受老君之總

傳、故如本書總無遺漏書寫之、再賜範房、因範

房深筒藏之、

103 全上

全上

正文在小納戸役所

一 御卷物七ツ

一 御折本一册

右者從

(宗信)
總州様 太守様(宗信)

に神當流馬乘方御相傳被成り付、柴崎

十郎右衛門殿より御相傳之馬書右之通被進り間、御小

納戸方に致格護置、御用之節者可差上り、此旨後年無

紛様可記置候、

延享四年卯十月八日

(島津久直)
左衛門

御小納戸役

全上

正文在琉球國國司

芳札令披見り、如來意、我等儀家督以後初る御暇被 仰

出令歸國り付、爲祝儀被差越今歸仁王子、太刀・馬代白

銀百兩并目錄之通贈給之、入念儀令祝着り、恐惶不宣、

(宗)
「延享四年」十月九日

少將宗信御判 (花押 No.1)

謹上 中山王

正文在琉球國國司

芳翰令披見り、我等儀、去冬被任少將り爲嘉儀、被差渡

今歸仁王子、殊太刀・馬代黄金十兩并如目錄贈給、入念

儀過當之至り、恐惶不宣、

(宗)
「延享四年」

十月九日 少將宗信御判

謹上 中山王

全上

芳翰令披見り、去歲中將殿御願之通首尾能御隱居、我等

に家督無相違被 仰出り、爲祝儀、今般被差渡今歸仁王

子、殊太刀一腰・馬一疋并別錄之表贈給之、入念儀欣然

之至り、恐惶不宣、

(宗)
「延享四年」

十月九日 少將宗信御判

謹上 中山王

全上

爲年首之嘉儀被差渡使簡、殊別錄之通贈給之、入念候之

段令祝着り、猶期後喜之時り、恐惶不宣、

(宗)
「延享四年」

十月九日 少將宗信御判

宗信公御譜中

謹上 中山王

祖父吉貴自今歲九月上旬不安寢食、因宗信日雖省之、老病日漸、禱爾藥療遂無効驗、十月十日未刻即于世于大磯館正寢、享年七十三、諡淨國院殿號鑑阿天清道熙大居士、同十二日遺體斂棺而至同十六日殯正寢、是故戌刻假棺出大磯館遷入淨光明寺、一門大家・家老・若年寄・大目附其外諸有司諸士等咸附從之矣、淨光明寺足下法阿上人廓心唱穩座之偈行道回向不斷念佛開闢、同二十五日自假外棺移本棺安之於客殿、則展法筵、起龕鎖龕奠茶奠湯各唱法語、大衆讀經畢、而申刻宗信代于繼豐燒香繼豐致仕之後因病稱一進一留于東都芝部一故及レ之手自奉獻祭文日二代稱、祭文也、乃授與讀師、如法誦之、戌刻靈棺下客殿出葬場營禮式、自發心門宗信著葬服、捧持神主一三匝葬場、坐三床上發心門與祀樂門之際、御代太刀者、本田新次郎益親持之而侍、傍時島津備中貴儔代而奉捧神主二匝、於是安靈棺於厨屋、奠茶奠湯如法唱法語、導師上人廓心唱下炬文畢、而諸宗門首及沙門等群聚而勤諷經、既葬禮終而靈棺出涅槃門、奉

瘞淨光精舍之山上、厥后營靈塔安靈牌、委錄于吉貴之譜中、

繼豐公御譜中

正文在文庫

重陽之

御內書可相渡外間、明日五半時

御城口家來可被差出外、

以上、

〔延享四年〕

十月廿日

酒井雅樂頭

松平大隅守殿

宗信公御譜中

正文在文庫

重陽之

御內書可相渡外間、明日五半時

御城口可罷出外、以上、

〔延享四年〕

十月廿日

酒井忠知

松平薩摩守殿

留守居

寺地目錄

鹿兒嶋西田村

寺地(マ)十八間(マ)貳反四畦拾五步(マ)

西田寺

大豆三表壹斗五升九合

高ニして壹石貳斗五升九合三夕七才

右寺地諸給地高百姓居屋敷ニの外處ニ、彌勒院隱居淨妙

院ノ西田寺造立之願申上、飯野長善寺末寺當分廢寺之妙

泉庵、寺地致所望、御返地差上度旨依願ニ御免ニの、延

享四年卯五月郡奉行淺江源五左衛門卒相究差出外帳面之

通、爲寺地被下之旨、同九月廿一日御家老衆任御引付令

支配外間、向後守法式勤行無緩疎可相勤者也、

延享四年丁卯十月廿三日

小林中(政)太兵衛印(英)

川田與(國)右衛門印(憲)

吉貴在國頃日舊病大漸、事達ニ

家重公

家治公

吉宗公之 台聽、三執政宿次奉書就中副堀田相摸守正

亮驛路之證印、於正亮之第、賜之於宗信、十月二十八

日家臣川田次右衛門國中新伊地知作四郎季長上衛護奉

書發東都芝邸、經三歷東海・山陽・西海之三驛、十一

月二十二日到著薩府城、宗信謹拜三戴之、則日齋報

三執政書翰及所副與驛路之證印上、而使兒玉四郎兵衛

實行新長谷場運八純庸上西海・山陽・東海之三驛、

十二月十六日著東都上、直候執政用本多伯耆守正珍之

第、呈上宗信之報翰、且復納正亮驛路之證印一矣、嚮

是十一月二十三日使喜入十郎右衛門譽香馬發中廳府上、

十二月二十六日著東都芝邸、於茲假爲物頭格、勤

使价於執政各位之第及若年寄之第、呈上宗信之格書連

署、奉禮謝賜奉書之忝上、

正文在文庫

同氏上總入道病氣之段及 上聞外處、無油斷可致養生旨

御意候、依之如此外、恐謹言、

〔卷延享四年〕

十月廿六日

松平右近將監

武元判

本多伯耆守

正珍判

堀田相摸守

正亮判

酒井雅樂頭

忠知判

松平薩摩守殿

114

全上

同氏上總入道病氣之段及言上^レ外處、無油斷可致養生旨

御意^レ、依之如斯^レ、恐^レ謹言、

〔案〕
「延享四年」

十月廿六日

松平薩摩守殿

秋元但馬守

涼朝判

115

全上

同氏上總入道病氣之段及言上^レ外處、無油斷可致養生旨

御意^レ、依之如此^レ、恐^レ謹言、

〔案〕
「延享四年」

十月廿六日

松平薩摩守殿

西尾隱岐守

忠尚判

117

宗信公御譜中

正文在文庫

御札令披見^レ、

三御所様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤^レ、將又今度秋

元但馬守連判之列被^レ 仰付之、

大納言様江被爲附候段被承之、玆重由得其意^レ、紙面之

趣各申談及 上聞^レ、恐^レ謹言、

〔案〕
「延享四年」

十月廿八日

松平薩摩守殿

堀田相摸守

正亮判

118

全上

御札令披見^レ、

三御所様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤^レ、將亦今度秋

元但馬守連判之列被^レ 仰付、

大納言様江被爲附候段被承之、玆重由得其意^レ、紙面之趣

116

全上

寫正文在文庫

大納言樣口及言上外、恐々謹言、

〔延享四年〕 十月廿八日

堀田相摸守 正亮判

松平薩摩守殿

119 全上

御札令披見外、

三御所樣益御機嫌能被成御座、恐悅旨尤外、將又今度秋元但馬守連判之列被 仰付、

大納言樣口被爲附外段被承之、珎重由得其意外、紙面之趣及言上外、恐々謹言、

〔延享四年〕 十月廿八日

西尾隱岐守 忠尚判

松平薩摩守殿

120 宗信公御譜中

吉貴之訃達

家重公之 台聽、同年十一月五日 上使小堀和泉守政

峯來吊東都芝邸、

家重公賜香燭銀五十枚於宗信、且自

吉宗公

121

全上

正文在文庫

家治公亦蒙懇篤之 尊意矣、因爲謝恩使頭頭肝付彈

正兼昌、同十二月四日登府城、奉宗信之命、直取陸

路到豐之前州小倉、而駕船同月二十八日著攝之大坂

港、翌二十九日出大坂、溯流同五年正月元日到城州

伏見、則日出伏見、經歷東海之驛、同月九日著東

都芝邸、同十六日兼昌候

三御所之執政・若年寄各位之第、呈上書翰及格書連署

等勤使价、是奉申謝以上使賜香燭、懇篤之

忝上、同十九日應徵兼昌候執政用番酒井雅樂頭忠之及西尾

隱岐守忠尚之第、所賜宗信之奉書見授與兼昌、同

二十日候執政秋元但馬守涼朝之第、所賜宗信之奉書

見附與之、使价事畢、二月八日兼昌發芝邸、歷東

海之驛、同二十八日著伏見、三月十二日到大坂、四

月五日駕船渡揖西海、同十八日著船于薩西内久見崎、

同二十一日歸慶府復命、

同氏上總入道卒去之段及 上聞外處、可爲愁傷と被 思

召候、此由可相達旨依 御意如此候、恐々謹言、

〔朱〕
「延享四年」
十一月五日

松平右近將監
武元判

本多伯耆守
正珍判

堀田相摸守
正亮判

酒井雅樂頭
忠知判

松平薩摩守殿

122 全上

同氏上總入道卒去之段及言上外處、可爲愁傷と被 思召

外、此由可相達旨依 御誼如此外、恐く謹言、

〔朱〕
「延享四年」
十一月五日

秋元但馬守
涼朝判

松平薩摩守殿

123 全上

同氏上總入道卒去之段及言上外處、可爲愁傷と被 思召

外、此由可相達旨依 御誼如此外、恐く謹言、

〔朱〕
「延享四年」
十一月五日

西尾隱岐守
忠尚判

松平薩摩守殿

124 宗信公御詔中

正文在文庫

御札令披閱外、御手前家督初の歸國爲 御尋、以宿次奉
書拜領物有之由玆重外、仍御念入外段欣然之至存外、恐
く謹言、

〔朱〕
「延享四年」
十一月十日

尾張中納言
宗勝判

薩摩少將殿

御報

125 全上

御札令披見外、

三御所様御機嫌被相同之外、益御安全御儀外間可御心易
外、隨ち小熬海鼠一箱被獻之外、遂披露外處一段之御仕
合外、恐く謹言、

〔朱〕
「延享四年」
十一月十二日

秋元但馬守
涼朝判

松平薩摩守殿

126 全上

御札令披見外、

三御所様御機嫌被相同之外、益御勇健之御儀外間可御心

易外、隨而小熬海鼠一箱被獻之外、各申談遂披露外處一段之御仕合外、恐々謹言、

留守居

〔宋〕
「延享四年」十一月十二日

松平右近將監
武元判

松平薩摩守殿

127
全上

御札令披見外、

三御所樣御機嫌被相伺之外、益御安全御儀外間可御心易外、紙面之趣及言上外、恐々謹言、

〔宋〕
「延享四年」十一月十二日

西尾陸岐守
忠尚判

松平薩摩守殿

128
宗信公御譜中

正文在文庫

以宿次

御尋御禮之使者嶋津大藏〔久丘〕、明十五日五時 御城江可差出外、且亦自分之御禮表可申上外間可存其趣外、以上、

〔宋〕
「延享四年」十一月十四日

松平武元
右近

松平薩摩守殿

129
全上

御札令披見外、

三御所樣益御機嫌能被成御座、恐悅旨尤外、將亦家督以後歸國無吳在之外哉、御尋之趣以宿次奉書相達、御着拜領難有由得其意外、依之爲御禮以嶋津大藏御樽着被獻之外、遂披露外處

御前江被召出之、入念外段御喜色之御事外、恐々謹言、

〔宋〕
「延享四年」十一月十八日

松平右近將監
武元判

本多伯耆守
正珍判

堀田相摸守
正亮判

酒井雅樂頭
忠知判

松平薩摩守殿

130
全上

御札令披見外、

三御所樣益御機嫌能被成御座、恐悅旨尤外、將又家督以

後歸國無吳在之^レ外哉、從

公方様御尋之趣以宿次奉書相達、御肴拜領難有由得其意^レ外、依之爲御禮以鳴津大藏御樽肴被獻之^レ外、遂披露^レ處一段之御仕合^レ外、恐^レ謹言、

〔卷〕
〔延享四年〕 十一月十八日

松平薩摩守殿

秋元但馬守
涼朝判

131 全上

御札令披見^レ外、

三御所様益御機嫌能被成御座、恐悅旨尤^レ外、將又家督以後歸國無吳在之^レ外哉、御尋之趣以宿次奉書相達、從公方様御肴拜領、難有由得其意^レ外、依之爲御禮鳴津大藏被差越^レ外、紙面之趣及言上^レ外、恐^レ謹言、

〔卷〕
〔延享四年〕 十一月十九日

松平薩摩守殿

西尾隱岐守
忠尚判

132 〔卷〕
〔雜抄中〕

高持成願御格式之事

一家内之子孫取込拜借等有之^レ外ハ、高直御免被成間敷

外旨、延享四卯十一月被相定^レ外事、

133 宗信公御譜中

正文在文庫

なを^レ御文之通何もよろしく申あけまいらせ^レ外、
めてたくかしく、

十月十六日附^レて御文下され^レ外、

三御所様益御機嫌よく御座被成らせられ^レ御事、御目出度おほしめし^レ外由、扱は御手前様御事、御家督以後はしめて御歸國被成^レ外^レ付、御尋遊し宿次御奉書^レて

公方様より御肴一種拜領被成、まことに^レ御懇の御事、有かたくおほしめし^レ外由、右の御禮御表へ御使御申上^レケ被成^レ外^レ付、なを御禮御申上被成^レ外御文之様、何もよろしく申あけまいらせ^レ外、めてたくかしく、

〔卷〕
〔延享四年〕

松平

薩摩守様

御返事
人々御中

高瀬
清崎

134 宗信公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座、十月十四日増上寺 御靈屋
御參詣之儀被承之、恐悦旨尤外、紙面之趣各申談及 上
聞外、恐々謹言、

〔宋〕「延享四年」 十二月十二日

松平薩摩守殿

本多伯耆守 正珍判

135 宗信公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

三御所様益御機嫌能被成御座、今度 御即位首尾好被遂
行外段被承之、目出度被存由得其意外、依之被差越使者
外、紙面趣各申談及 上聞候、恐々謹言、

〔宋〕「延享四年」 十二月十六日

松平薩摩守殿

本多伯耆守 正珍判

136 全上

御札令披見外、

三御所様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、將又今度

御即位首尾好被遂行外之段被承之、目出度被存由得其意

外、依之被差越使者外、紙面之趣及言上外、恐々謹言、
〔宋〕「延享四年」 十二月十六日 秋元但馬守 涼朝判

〔宋〕「延享四年」 十二月十六日 松平薩摩守殿

137 全上

御札令披見外、

三御所様益御機嫌能被成御座、今度 御即位首尾好被遂
行外段被承之、目出度被存由得其意外、依之被差越使者
外、紙面之趣及言上外、恐々謹言、

〔宋〕「延享四年」 十二月十六日 西尾隱岐守 忠尚判

松平薩摩守殿

138 全上

御札令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座、十月廿四日東叡山
〔家重生母〕深徳院様御靈前
御參詣之儀被承之、恐悦旨尤外、紙面之趣各申談及 上
聞外、恐々謹言、

〔采〕
「延享四年」
十二月十六日

本多伯耆守
正珍判

松平薩摩守殿

139
宗信公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、就寒中

三御所様御機嫌以使者被相伺之外、益御安全御儀外間可
御心易外、隨ち琉球紬十端并鏝節一箱被獻之外、各申談
遂披露外處一段之御仕合外、恐々謹言、

〔采〕
「延享四年」
十二月十九日

本多伯耆守
正珍判

松平薩摩守殿

140
全上

御札令披見外、就寒中

三御所様御機嫌以使者被相伺之外、益御安全御事外間可
御心易外、隨ち琉球紬十端并鏝節一箱被獻之外、遂披露
外處一段之御仕合外、恐々謹言、

〔采〕
「延享四年」
十二月十九日

秋元但馬守
涼朝判

松平薩摩守殿

141
全上

御札令披見外、就寒中

三御所様御機嫌以使者被相伺之候、益御安全之御儀外間
可御心易外、隨ち琉球紬十端并鏝節一箱被獻之外、遂披
露外處一段之御仕合外、恐々謹言、

〔采〕
「延享四年」
十二月十九日

西尾隱岐守
忠尚判

松平薩摩守殿

142
宗信公御譜中

正文在文庫

芳翰令披見外、今般家督初る歸國爲 御尋、以奉書御肴拜
領之由珍重外、依之入御念外段欣然之至存外、恐々謹言、

〔采〕
「延享四年」
十二月廿一日

紀伊大納言
宗直判

松平薩摩守殿

御返報

143
宗信公御譜中

正文在文庫

返々何も々よろしく申あけまいらせ外、めてた
くかしく、

十一月廿二日附て御文下されり、上總入道殿御病氣の事言上におよひり所こ、ゆたなく御養生様こと 上意の趣宿次御奉書にて有かたく 思召り由、御禮として御表へ使御あけなされりこより、御内證よりも右の御禮御申上なされりとの御ふみのやう、よろしく申上まいらせられり、めてたくかしく、

〔宋〕
「本ノマ、」

まつ平

薩摩守様

御返事

人々御中

高頼

清崎

b

144

継豊公御譜中

正文在文庫

今朝鯛一箱被獻之り、遂披露り處一段之御仕合り、恐々謹言、

〔宋〕
「延享四年」

十二月廿三日

正珍判

松平大隅守殿

〔宋〕
「存右裏」

本多伯耆守

正珍

145

全上

今朝鯛一箱被獻之り、遂披露り處一段之御仕合り、恐々謹言、

〔宋〕
「延享四年」

十二月廿三日

涼朝判

松平大隅守殿

〔宋〕
「存右裏」

秋元但馬守

涼朝

146

全上

今朝鯛一箱被獻之り、遂披露り處一段之御仕合り、恐々謹言、

〔宋〕
「延享四年」

十二月廿三日

忠尚判

松平大隅守殿

〔宋〕
「存右裏」

西尾隱岐守

忠尚

147

宗信公御譜中

先是老君繼豊於江都、以讓狀及錄目、
〔本〕
讓與當家累世相傳之家系文獻寶器等於宗信一矣、然其品悉藏于薩府

寶庫、因今茲十二月二十三日宗信在國從先躡、備家系文獻寶器數品於鹿城對面所、而拜覽之、則記錄官町田仲右衛門俊雄持諸品摘要書、進席詳演說之、以達于聞也、

○同年十二月二十三日

大樹家重公以下貴鷹所搏擊鶴一隻及執政宿次奉書、本多伯耆守正珍驛路之證印上正珍之第而賜之於宗信、故見授與家臣野村大右衛門盛胤留等、是宗信襲封之後始賜告歸國因先規也、故使家臣川上正右衛門親芳新、財部甚兵衛盛容同、肥後與右衛門、鎌田甚七輕卒六人警衛之上、即夜發東都芝邸、不令晝夜、經歷東海・山陽・西海之三道、是延享五年正月二十一日到著魔府城、宗信乃拜戴之、即日齋宗信所報謝執政之連署及所與驛路之證印上、而使家臣野村與兵衛高運魁馬、稅所小右衛門篤見新、輕卒六人馳東都上矣、茲日爲恩賚之謝使、令番頭北鄉權八久綿登府城、奉宗信之命直經西海・山陽・東海之三驛赴東都上、高運・篤見等先久綿、二月二十八日著東都、直候執政用堀田相授守正亮之第、呈上宗信之報翰、且復上正珍驛路之證印勤使者矣、久綿亦三月二十四日

到著東都芝邸、同月晦日久綿候執政用本多正珍・秋元但馬守涼朝之第、呈上格書、勤使价、四月朔日因執政之奉書、久綿登營捧宗信之獻物二種雙樽、白書院而奉拜調

家重公

家治公勤謝使、是奉禮謝恩賜之達薩府上故也、小堀和泉守政峯奏達之、久綿亦親自獻上御太刀一腰・御馬代白銀一枚・紗綾二卷、奏者柴稻葉丹後守正甫教導即退去矣、且登西城、於檜之間就奏者衆永井伊賀守直行捧宗信之獻物一種雙樽、久綿亦親自獻上御太刀一腰・御馬代白銀一枚奉申謝拜調台顏而退去、同五日久綿應執政之奉書登營、本多正珍出席于檜之間、賜宗信奉書手自見授與久綿、且紗綾三卷拜戴之、奏者番永井直行執達之、謹奉申謝之退去矣、茲日於秋元涼朝之第賜宗信奉書涼朝手自見授與久綿、且西尾隱岐守忠尚之第而賜宗信奉書以用人見授與之於久綿、同月十二日使者事畢、而久綿發芝邸、六月八日歸薩府復命、

全上

正文在文庫

一筆令啓達_レ、

三御所様益御機嫌能被成御座_レ間可御心易_レ、將又御鷹之鶴拜領_レ條以宿次差越_レ、恐_レ謹言、

〔宋〕
「延享四年」

十二月廿三日

松平右近將監
武元判

本多伯耆守
正珍判

堀田相摸守
正亮判

酒井雅樂頭
忠知判

松平薩摩守殿

全上

寫正文在家老座

此狀箱并鶴一、從江戸至薩州鹿兒嶋、松平薩摩守所_レ相届、返札可來_レ間、於江戸月番之老中_レ急度可持參者也、

〔宋〕
「延享四年」

十二月廿三日

伯耆印

右宿中

全上

正文在文庫

御札令披見_レ、

三御所様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤_レ、隨_レ蜜柑二箱・炙鮎一箱被獻_レ之_レ、各申談遂披露_レ處一段之御仕合_レ、恐_レ謹言、

〔宋〕
「延享四年」

十二月廿三日

本多伯耆守
正珍判

松平薩摩守殿

全上

正文在文庫

御札令披見_レ、

三御所様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤_レ、隨_レ蜜柑二箱・炙鮎一箱被獻_レ之_レ、遂披露_レ之_レ處一段之御仕合_レ、恐_レ謹言、

〔宋〕
「延享四年」

十二月廿三日

秋元但馬守
涼朝判

松平薩摩守殿

宗信公御譜中

正文在文庫

爲歲暮之祝儀、小袖一重到来歡覺ハ、委曲堀田相摸守可
述ハ也、

十二月廿七日



薩摩少將殿

153 全上

爲歲暮之御祝儀、以使者御小袖一重被獻ハ之外、遂披露ハ
處一段之御仕合ハ、恐ク謹言、

(朱)
「延享四年」
十二月廿七日

松平薩摩守殿

秋元但馬守
涼朝判

154 全上

御札令披見ハ、同氏上總入道病氣之節、爲 御尋
三御所様 御意之趣奉書相達、難有由得其意ハ、依之爲
御禮被差越使者ハ、紙面之通各申談及 上聞ハ、恐ク謹
言、

(朱)
「延享四年」
十二月廿七日

松平薩摩守殿

本多伯耆守
正珍判

155 全上

御札令披見ハ、同氏上總入道病氣之節、爲 御尋 御意
之趣以奉書相達難有由得其意ハ、依之爲御禮被差越使者
外、紙面之通及言上ハ、恐ク謹言、

(朱)
「延享四年」
十二月廿七日

松平薩摩守殿

西尾隱岐守
忠尚判

156 全上

御札令披見ハ、同氏上總入道病氣之節、爲 御尋
御意之趣奉書相達、難有由得其意ハ、依之爲御禮被差越
使者ハ、紙面之趣及言上ハ、恐ク謹言、

(朱)
「延享四年」
十二月廿八日

松平薩摩守殿

秋元但馬守
涼朝判

157

宗信公御譜中
正文在文庫

何もよろしく申上まいらせハ、かしく、
十一月晦日付にて御文下されハ、御同氏上總入道殿御死
去被成ハたん

高聞におよび、去五日

上使小堀和泉守(政繁)にて

上意、其うへ御香てん

三御所様も御同氏大隅守殿へ 御懇の 上意忝御事と思

召被成りよし、右の御禮として御表へ御使御さし上被成

り得共、猶又御内證よりも御禮御申上被成

大納言様へも御禮御申上被成り、御文の趣よろしく申あ

けまいらせり、かしく、

〔宋〕「延享四年」

6

とよ岡

梅その

まつ嶋

浦尾

たきつ

さえた

まつ平

御返事

薩摩守様

人々御中

宗信公御譜中

正文在文庫

十一月晦日付にて御ふみ下されり、御同氏上總入道殿御

死去のたん

高聞に及び

三御所様より 上意のおもむき御奉書被遣、有かたく覺

しめしり由、右之御禮として御表へ御使御さし上被成り

との御事、是により御内證よりも御禮御申上被成度よし、

御ふみの通りよろしく申上まいらせり、かしく、

〔宋〕「延享四年」

6

松たいら

薩摩守様

御返事

人々御中

高瀬

清崎

継豊公御譜中

同年十二月二十三日以、上使山口勘兵衛、賜御鷹所

撃之鶴於繼豊、在病故島津加賀守忠雅代繼豊、到執

政各館、禮謝焉、

全上

正文在文庫

爲歳暮之祝儀、小袖一重到來歡覺候、委曲堀田相摸守可

述外也、

〔宋〕「延享四年」十二月廿七日



爲歲暮之御祝儀、以使者御小袖一重被獻之外、遂披露外處一段之御仕合、恐々謹言、

〔采〕
「延享四年」 十二月廿七日 秋元但馬守 涼朝判

松平大隅守殿

仰出寫

近年士之風儀惡敷、耽利欲外者共有之由相聞得、甚以不可然外、末々之者共迄も、邪成心底無之様可相嗜外、

延享四年

卯十二月

別紙之通被仰出外條、不致忘却可相守外、此旨與中支配中諸外城に可被申渡旨、地頭・領主・與頭・支配頭に可申渡外、

延享四年十二月

(高津久甫) 左衛門
(桃山久初) 主計
(島津久經) 右平太

(郷原久雄) 轉
(鎌田政昌) 典膳

吉貴自今茲延享四年丁卯九月上旬不_レ安_二寢食_一、老病日漸、(病)禱爾藥療遂無_レ驗、以_二十月十日_一未_レ刻即_二世于大礪館_一寢所間、享_レ年七十三、益_二淨國院殿_一、號_二鑑阿天清道照大居士_一、淨光明寺足下法阿上、人卿心奉_二血_一、同月十二日_レ刻遺體斂_レ棺而_二至_二同月十六日_一殮_二正寢_一矣、

嚮_レ是吉貴於_二東都芝邸_一致仕之時嘗有_二遺命_一、是故十

六日_レ刻_{戊亥}假棺出_二大礪館_一遷_二入淨光明寺_一、安_二內陣正面_一

卿心叫_二穩座之儀_一且_二四菩薩_一、官殿朝之儀行道向不斷念佛開闢、貴族・大家・家老・若年寄・

大目附以下_レ諸有司・諸士等咸附_二從_一之矣、翌十七日卿

心奉_レ獻_二茶湯於棺前_一、大衆讀_二誦三禮讚事無量壽經_一、

中夜之讚佛心願念佛回向、白_レ是朝暮誦經念佛勤修、

○同月二十四日_レ刻_{申中}遺髮納_二錫壺_一、出_二大礪館_一入_二淨光明寺_一、近神役一風服役二員、一具外城_レ送之_一、

○同月二十五日自_二外假棺_一移_二本棺_一安_二之於客殿_一、則展_二法筵_一、起_二齋者專念寺和尚了典、鎖齋者西福寺和尚祖林、奠茶者專修寺和尚實雄、奠湯者常念寺和尚龍雲各

唱_二法語_一、維那者福泉寺洪泉勤_レ之、大衆讀經畢、而_中刻

宗信代_三于繼豐_二燒香_一時繼豐致仕之後因_二病_一留_二手自奉_レ獻_三

祭文_一曰_二代_レ繼豐_一、乃授_二與讀師_一、龍雲如_レ法誦_レ之、漱后

島津兵庫久門代_二繼豐_一勤_二燒香_一矣、

○同日_中刻靈棺下_二客殿_一出_二葬場_一、_二禮式_一、葬馬一匹_中遺命

次_一、左梶原善助景白、右梶原清左衛門景珍_中牽_レ之、

燈爐者木藤次右衛門範常・木藤彦七成政・木藤休五郎

成興_中成興_一因_二若年_一不_レ及_二種髮_一葬衣_一、_二族_一、_二木藤_一七右衛門貞古、幘

者中村與太夫種曉・中村勘右衛門友郷・中村孫右衛門

住與_中申良_一・中村東之坊宥保、香爐者_中香合_一長野筑右衛門

祐精_中指宿_一、茶碗_中茶入茶筌_一之長野市左衛門祐貞_中指宿_一、湯碗者

堀入長野六右衛門祐春_中指宿_一、長野助七祐貞_中財部_一、燭臺者長

野四郎右衛門祐次_中出水_一、下炬松明者長野次兵衛祐次_中谷山_一、

茶湯提子長野善右衛門祐知各爲_レ役勤_レ之、以上薙髮葬

衣也、遺髮者伊地知新太夫季年_中近習_一、池田仙右衛門純苗

近習_中薙髮_一葬衣奉_レ護_二守_一之矣、自_二發心門_一宗信_中被者_一捧_レ持

神主_一、一_二匠葬場_一坐_二床上_一發心門與_二兄弟_一葬門_一之際、御代太

刀者本田新次郎做親持_レ之侍_レ傍、時島津備中貴備_中衣_一代_二

宗信_一奉_レ捧_二持_一之_二二匠_一矣、棺之前轅新納四郎久明、後

轅北郷權八久綿早_レ之也_中然久_一奉_レ者在_二于東都_一一_二轅_一二_二轅_一一_二轅_一者_中轅_一

病_レ不_レ能_レ勤_レ之_中久_一、島津周防忠紀・島津三次郎・島津玄

蕃貴澄・島津圖書久亮_中各_一執_レ紳、太刀者本田次郎右衛

門親與持_レ之_中葬衣_一、田村幸太夫之方持_二腰刀_一在_レ左、中野

駒右衛門利以持_二脇刀_一在_レ右_中以_レ故_一獲_レ勤_レ之_中役_一

左衛門實行_中種髮_一捧_二天蓋_一、是皆依_二舊式_一所_レ關_レ之_中諸_一役也、

淨光明寺廓心_中十_一此外貴族・家老・若年寄・大目附・側

詰用人・近習諸有司等咸從矣、於是安_二靈棺_一於_二厨屋_一、

奠茶者松尾寺和尚快雄、奠湯者本立寺和尚法忍唱_二法

語_一、維那者茶執司慈善、導師者上人廓心唱_二下炬文_一、

此時曹洞・天台・眞言・時衆宗・濟家・黄葉・法華・

淨土・律宗僧侶・本山當山之山伏諸宗群聚而勤_二飄經_一、

且薩隅日三州之諸士、自_二琉球國_一在_二勤_一于薩府_一之者亦

拜_二伏葬場牆外_一、既葬禮終而出_二涅磐門_一一_二塚_一松峯山上_一

矣、

○掩土之後、遺髮一壺如_レ元假安_二內陣靈牌之右_一、

○自_二同年十一月六日_一至_二同十日_一、修_二中陰之梵儀_一於淨光

明寺_一、弔祭如_レ法、仍一族大家從_二先躡_一各配_レ日奉_レ

獻_二祭文_一、詳_二于左_一、

164 寫正文在文庫

寫

新納四郎

北郷權八

右考

御正統様御葬送之節、御棺守前考佐多家、後考北郷家、先々被相勤來付、

淨國院様御棺守空殿・筑後被相勤善付得共、空殿當分在旅、家内ニ名代可相勤人無之、庶流ニも寄合以上之人無之、筑後儀考、不快ニ付難相勤旨被申出付、依之空殿名代四郎、筑後名代權八被仰付付、空殿・筑後差支付譯を以名代被仰付、家筋ニ相掛儀無之段兩人被申渡置付、右之趣至後年紛敷無之様可記置旨、御記錄奉行被可申渡付、

朱力半
延享四年 十月

(嶺山久初)
主計

165

起齋

專念寺了典

清淨湛然絶點塵無端露出本來人要知彌勤同齋旨紅葉花

飛三會春

恭惟

淨國院殿鑑阿天清道熙大居士

恩加四海

德被萬民

其嘉瑞也

出羽虫群鳥之孤鳳而恰

當累代名實

其威烈也

産猛虎三子之一彪而茲興越前島津

隨緣真如不變真

去粘解縛

觀照般若實相般若

離妄悟真

如上事且置向上更越格超宗一句子敬奉提起

金剛正體是非外火煙裡轉大法輪

鎖齋

西福寺祖林

壽山忽作鐵崑崙崑崙脫出無安三界樊

舜若多神合金鎖不通凡聖涅槃門

恭惟

淨國院殿鑑阿天清道熙大居士

崇賢美善

惟惠施恩

坐斷八功德水淨漚

沒諸天浴

入得大妙莊嚴世界

位無上尊

眞諦俗諦一喝喝散離相滅相一踢踢翻正與歷時野拙捧銀

鑰鎖金棺底手段如何辨別去 虚空背上立乾坤

奠茶

專修寺實雄

箇玻璃棧在南方無着文殊不覆藏

萬岳松風一鷗雪夜來和月洗肝腸

恭惟

淨國院殿鑑阿天清道熙大居士

漢閣麟趾

宋家鳳凰

懿哉凍餒飽爲和樂

嗟呼獄焰散作清涼

語燕啼鳥即是本分妙相

兩竹松風豈不自己商量

至這裡 君臣佐使 仰藥王於□□

父子孝儀 睹陶唐於羹牆

逆行也得順行也得

上醫醫國醫術以彰

畢竟甜苦未分先 靈驗在什麼處

上來者 尊靈無上成等正覺之三昧也覆

護后昆底之一句作麼生奉提撕白鷺

池變作醒翻味之漿

羹湯

我家本草絕餘論炮炙虛空鷲口吞

昨夜建溪分水味等閑吸盡一清源

恭惟

淨國院殿鑑阿天清道熙大居士

堯仁舜德 禹子湯孫

下視活寶誌谷神 四大元是假合

唐突老維摩示病 萬言豈如點存

不墮因果 窮決本根

苦者苦甜者甜 救濟人天痼疾

生不生滅不滅 調和祖師精魂

即今底□

連生雲母已殫盡風攪千林霜葉飄

茶

松尾寺快雄

寒泉湯鼎起松風玉碗盛來滋味濃

不生不滅真面目喫茶去也絕西東

恭惟

淨國院殿鑑阿天清道熙大居士

撿正法矢 矯智絃弓

掬法性水 攘讖蛇則機鋒不肖受

想行 甘真如茗 除睡魔則精神冷

笑色即空 愛其民也 周公執政

仰其聖也 孔子存忠 七十

餘之聲名藥有君臣奈不效 三千歲

之壽域枝連子孫至無窮

如上事姑置

半舛鑪內煮山川

尊靈遍界不藏底如何學揚去

下火

淨光明寺法阿廓心

堅固法身沒蹤跡

森然一樹覆封巖付與滿天活地霜

依舊山山霜葉紅

欲見法身無極体屋頭山色旣蒼蒼

湯

本立寺法忍

恭惟

不借醫王妙手煎即今火裡汲清泉

淨國院殿鑑阿天清道熙大居士

點來追薦靈方外一盞香湯一味禪

人天尊貴

法社金湯

恭惟

淨國院殿鑑阿天清道熙大居士

長合詠風賦比興雅頌於蓬萊闕下不謂

智勇兼備

忠義相連

觀夢幻泡影露

電於正覺路傍

手握天下之鈞軸

胸領塞外之威權

建寺度僧

誰道並無功德

擬之感麟翁仁

靈芝白木

念佛念法

總是為好商量

比之司馬公政

甘草黃連

七十三

夢蝴蝶於彷彿

無相丹砂點金點鐵頤神碧岩非散非

一生受用

寄蜉蝣於徇往

圓轉肉身而歸空身

法身自在

這界是那界

他鄉便故鄉

離俗諦而入真諦

聖諦廓然

此故 羣臣泣血

庶民斷腸

不恐泥梨獄

豈願兜率天

元來無去無來

說什麼喜怒哀樂

這箇且置只此場劑和將來底之清息子

畢竟非空非有

說什麼隱顯存亡

為大居士纒涉言宣

十方安養土

三界涅槃場

了了

一粒粟中藏世界

無禪可參祥

唯此一事

不要

穿鑿 不要舉揚 煌煌燿燿堂堂

雖然與麼風景別有吾家的的相承之一

偈奉呈獻 尊靈往詣樂邦送行伏垂

照鑒

六字之中本無生死

一稱之間即證無生

166 ○維延享龍舍強圍單闕陽月吾祖考

淨國院殿故正四位下左近衛中將薩隅日三國主兼領琉球

國、源公鑑阿天清道熙大居士、嬰疾病在牀蓐、寢食不安、

呵禁不祥、捧昌陽以雖欲延齡、病漸日篤、氣息奄奄、

嗚呼命乎隨化、竟同月朔戊午十寅丁卯遽然逝於本府大

磯之寢室也、生前曾有温故追遠之慮矣、松峰山淨光教

刹者、自大祖至五世代代布金之道場、成等正覺之佛閣、

血脈貫通之梵宮也、故豫命沒後在松峰蘭若輝 祖光、

乃應其旨移遺體於松峰下、此時嚴父繼豐致仕在東武、

東西遠路隔計音速難達、因不能捧代繼祭文、如今吾襲

封在國、不堪哀悼切迫之至、同二十五日壬午依梵儀掩

葬之、於是不肖孫源朝臣宗信兼嚴父志、恭備山煙水國

之奠、再拜稽首昭告於 尊靈龜幃其詞曰、

乾德貞亮 緝熙章明

布仁修禮 本立道生

守節能義 世傳令名

朝捧香油 暮備犧牲

恭敬三寶 祈四顯平

修飾宗廟 顧子孫榮

春蘭秋菊 孰弟孰兄

片言半語 理蜜旨正

開寬裕路 延天下英

效周室法 躬吐握情

嗚呼哀哉

受病之重 奈身之輕

七十有三 命葉易傾

識飛神颺 氣燈魂驚

何圖頃刻 催泉下行

厭離苦域 遊戲樂城

喪車難駐 諸聖送迎

嗟哭蒼昊 我淚縱橫

中心如頃 胸霧難晴

庶民泣血 群臣吞聲

街衢禁市

田野止耕

月六日恭備沼沚蘋蘩欽奉致奠於尊靈前其辭曰、

嗚呼哀哉

嗚呼哀哉

煎茶爐底

求藥蓬瀛

清和後胤

價聲遠傳

甌炊黃米

□烹嘉羹

闔國潤德

異域伏權

逆談順說

描弓不成

無貴無賤

歸寬仁圓

干囊干橐

足食足兵

有智有勇

序群臣賢

自己面目

月白風清

風化草偃

舉世永扇

溪毛沼沚

聊以云擘

嗚呼哀哉

頭頭物物

敢竭鄙誠

優遊靜坐

玉椶臺前

靈其會得

鑒此經營

吟花嘯月

柏姿嬋娟

金枝玉葉

家國康寧

心歸佛乘

呪誦真詮

代代爵祿

擁護長生

水鳥樹林

光明赫然

嗚呼哀哉

嗚呼哀哉

尚饗

念佛念法

覺了諸緣

167 ○維延享第四龍集丁卯小春比(マ)及 嚴君

淨國院殿故正四位下左近衛中將薩隅日三國主兼領琉球國

仰祝壽算

如同祖籤

源公鑑阿天清道熙大居士、不圖罹微疾、晨昏不安、良

椿樹花零

齡捨八千

醫拱手、禱爾無驗、吁天乎、同十冀丁卯終唱無聲三昧

醫術無妙

時運爲天

於魔府大磯之館矣、越同二十五日壬午奉闋維尊體於淨

從茲誰慕

空淚如泉

光明寺也、爰孽子藤原貴儔不堪血淚慟哭之至、同十一

斯夕昃夕

嗚呼哀哉

奈北邙煙

○維延享歲次強圍單闕陽月吾 嚴君故正四位下左近衛中將薩隅日三國主兼領琉球國

淨國院殿源公鑑阿天清道熙大居士、不圖染風恙身體不穩、

雖禱爾上下神祇無其靈驗、雖擣笹和漢良藥失其效驗、

同月十冀丁卯奄然唱無生三昧於本府大磯之寢室矣、越

同月二十五日壬午奉禮葬於淨光練若、仲冬初六壬辰當

中陰之日小子臣源忠紀不堪哀嘆之至、恭具山菓野炊之

微供、奉致奠於 尊靈幃下、其辭曰噫惟、

尊君

爲三國主

恒在室家

禮讓不亂

胡蝶夢還

幽冥闕麗

寸腸不全

淚雨綿綿

願鑿芳筵

尚饗

朱力平
島津備中貞儔獻之

以慈爲衣

樂只君子

善行不穢

周旋中矩

胸襟瀟灑

俄罹微疾

音容在目

上仰有頂

下臨無地

吞聲吞氣

時去時來

天之作藥

斯日何日

以悲爲裳

民俱瞻星

嘉言孔彰

至道難量

氣宇堂堂

去歸何鄉

使我徬徨

碧落蒼蒼

黃泉茫茫

隕淚淋漓

感物斷腸

人焉得擲

遇此悼傷

嗚呼哀哉

半熟黃粟

月滿屋梁

通貫十方

返照回光

變作清涼

檀文武場

厥德愈香

世稱賢良

七十三年

山堂靜夜

心法無形

興奪自在

鑊湯爐炭

三點芳茗 一碗水漿

不求分外 不屬陰陽

降臨寶閣 嚙此宣揚

嗚呼哀哉 尚饗

朱力キ
島津周防忠紀獻之

妍蚩好惡 居高靴卑

外專愛惠 內含仁慈

秀麗如蘭 馨香似芝

嗚呼哀哉

寓形宇內 眞成幾時

倉遑求巫 奔馳求醫

或詣佛陀 或祈神祇

大命有數 靈方無奇

世緣空盡 捨此何之

與棺速去 蹤跡難追

日居月諸 以哀仇離

無身可寄 自今特誰

嗚呼哀哉

哆哆和和 童子何知

切切喃喃 匍匐淚垂

深蒙摩頂 恩愛苟不虧

撫心太息 太息將何爲

轉凡入聖 毫釐無差

但受諸樂 蓋復奚疑

寶花薰發 隨處不萎

169 ○維時延享四年丁卯冬十月吾 邦君故正四位下左近衛中

將薩隅日三州太守兼領琉球國

淨國院殿源公鑑阿天清道熙大居士、罹沈痾、醫術無驗、

俄爾唱無聲悲風之曲於本府大磯之寢室矣、是故舉國哀

慟、草木色變、山岳氣潛鳥獸悲悽、鬼神號位、(位也)何况於

撫育恩愛之身乎、暮思朝想不遑感傷、同月二十五日壬

午隨梵儀奉禮葬淨光蘭若、乃仲冬壬辰當中陰之日、末子

臣源氏三次郎某不堪哀歎之至、恭備蘋蘩蕪藻之微供、

奉致祭於 尊靈香幃下、其辭曰、

允矣嚴君 有威容儀

云禮云樂 合矩合規

五常有道 萬般無私

繼絕興廢 補闕安危

整齊嚴肅 一以秉彝

集山野菓

採江濱鹵

借手僧伽

專致祭祀

一香一色

薄奠受斯

嗚呼哀哉

尚饗

木力
島津三次郎某獻之

170 ○維延享四丁卯冬十月吾 邦君故正四位下左近衛中將薩

隅日三國太守兼領琉球國

淨國院殿源公鑑阿天清道熙大居士、委任後多歲、頤神於磯

之燕寢、不圖離身之不例焉、同十日丁卯遽然驚曳杖之

歌、忽拱屬纊之手、越殯柩於淨光教寺、同二十五日壬午

依梵儀終葬事矣、今臨中陰之日、不肖孫臣源久門不堪

哀悼之至、敬備蘋蘩蕝藻之御供、奉致祭於 尊靈前、

其辭曰、

嗚呼哀哉

武威雷震

氣宇春融

天縱豪俊

間世英雄

令嚴化洽

嶺始克終

寬仁愛物

國皆肆忠

鴻德所及

草偃其風

祝髮退階

老容益隆

嗚呼哀哉

一罹微恙

日積月重

偏盡醫術

竟無其功

深禱神祇

靈驗竟空

俄爾告譯

誰得羅籠

壽齡有數

雖不可忤

胸字鬱鬱

淚眼濛濛

嗚呼哀哉

此日何日

仰西仰東

踟天踏地

心見慈容

悠悠泉路

無信可通

悲風滿野

天色蒼蒼

茲采蘋蘩

虔設御供

言縮有盡

情豈可窮

嗚呼哀哉

尚饗

木力
島津兵庫久門獻之

171 ○維延享四龍舍丁卯羊月吾 前賢府君

淨國院殿故正四位下左近衛中將薩隅日三國主兼領琉球

國、源公鑑阿天清道熙大居士、偶染抱疾之憂、遽沈難愈之想、禱祀而無能仁慈父之靈、醫藥而盡炎帝、既嘗之驗於虛天平命乎、終以奠數十莢之日、奄然歸于幽都消聲之域矣、乃洎同月念五奠壬午就于廳府淨光精舍、遵梵儀修安葬之盛禮、粵族裔臣藤原久甫仰昊天罔極不堪哭泣之哀、倡采邑必芻就于金蓮之臺、奉具山茗野蔬之奠、敢昭告之以文、其詞曰、

於惟我 尊君

熙熙維道

射處其正

赫赫維德

民懷其誠

分派天潢

執強幹楨

威空宇宙

名重連城

祐篤樹子

澤渥蒼生

一登桑門

蚤繙簪纓

體究吉祥

眼照圓明

國人所仰

邦家播榮

嗚呼哀哉

梁木其壞

圓夢兩楹

鬻藤厄迫

仙遊遽驚

長揖塵寰

頓脫纏縈

逝水難舍

過駒易行

陟岵陟屺

望迷雲程

山瘦水落

風悲鳥鳴

甘棠遺愛

松柏存貞

憂心忡忡

恨震八紘

嗚呼哀哉

白璧埋光

誰勝斯情

趣慙無路

孰忍永征

舊樓月冷

北邙霜清

紅楓泣血

淚雨盈盈

山河異觀

風木聲聲

爰假佛慈

將奠廟壑

靈願來格

鑑吾葵傾

招以沈水

陳以彩榮

嗚呼哀哉

尚饗

朱力牛

島津左衛門久甫獻之

172 ○恭惟吾 邦君故正四位下左近衛中將薩隅日三國主兼領

琉球國

淨國院殿源公鑑阿天清道熙大居士、躬光累代之襲爵德富

具瞻之令望五百年、山川草木添榮、既丁其退隱之幽圖

也、磯第内傾壺天乃月花異觀龜鶴獻壽人皆欲仰其期頤

不意、維皆延享四年冬十月十日丁卯實以斯日離其不諱、

同月二十五日壬午奉禮葬於淨光蘭若、乃臨中陰之日、

臣源久尚掬哀嘆之餘泣、命六和之淨侶、欽備沼沚潤毛

之微供、致祭於 紫金蓮位前、敢告之、以文曰、

嗚呼哀哉

亡針霧海

身乘夜船

失照心鏡

渴返魂煙

寬然大度

仁風可扇

嗚呼哀哉

尚饗

朱力*

島津大學久尚獻之

嗚呼哀哉

本文遠大

榮拔隨肩

穆穆舉止

赫赫威權

曰精曰一

以賢傳賢

五百年國

德光山川

將略以熟

文思然妍

粹然滿釀

誰測九淵

嗚呼哀哉

嗟兩楹夢

繫恨斯圓

物皆雖命

慘不忘情

天高氣宇

海濶心田

風範有目

無容可緣

仰何處懇

無路通天

俯何處問

無術至泉

173

○維延享四年龍舍強圍單闕初冬 嚴君故正四位下左近衛

中將薩隅日三國主兼領琉球國

淨國院殿源公鑑阿天清道熙大居士、不圖罹微疾而震良不

安、雖求咎於三寶盡精於巫醫、更無驗焉、呼嗟乎命乎

陽月十日丁卯竟離大故之變、故四境吞氣萬戶捶胸悵惆

無窮、乃至念五亥壬午就于淨光蓮舍、隨梵儀而設闍維

矣、粵不肖子臣藤原久亮不勝哀慟之至、命食邑杜多曇

秀寺主而倡六和必務數員丁中陰之日、謹捧蘋蘩沼沚之

微物、致祭於 尊靈幃下、其詞曰、

嗚呼哀哉

天然貴胤

鎮國大綱

德潤封内

聲震海疆

希世君子

武門棟梁

風標磊落

襟度汪洋

自吐握事

含蘭馨芳

莅下以嚴

教民以方

智勇兼備

恭儉溫良

仁蒙異域

洽洽恩光

參熟祖室

意氣不常

倭神砥柱

竺仙金湯

嗚呼哀哉

泰山日頽

哲人日喪

踰從心歲

故關百霜

西崦日落

無揮戈郎

今乘白業

忽歸大荒

民失依怙

貴賤號僮

騎鯨翩躚

跨鳳翱翔

茲要追之

迷方悲傷

今夕何夕

天降此殃

抱終天恨

傾懷失章

熟感愛厚

淚落歔歔

嗚呼哀哉

南針折銳

北斗失光

闔國懷惠

憶彼甘棠

月蕭蕭冷

夜寂寂長

愁不能寢

呪又欲狂

草木變衰

風拂空床

恍如承命

惚似侍旁

偶詣蓮社

徒仰如堂

賴覺皇力

趣安養鄉

痛滴丹脰

聊燒辨香

神其不昧

來格梵場

嗚呼哀哉

尚饗

朱力キ
島津圖書久亮獻之

174

○維延享四年星次丁卯吾 前邦君故通議大夫羽林中郎將
薩隅日三國主兼領琉球國

淨國院殿源公鑑阿天清道熙大居士、預嬰微疾嚴身不安、

冬十月亥敷十莖丁卯終歸于棲神之域、同月念五日壬午

奉闈維於淨光明寺矣、越世臣藤原久柄唯恨祇役于洛陽

弗從乎靈輒也、當七七之期不堪追慕慟哭之至、虔備伊

蒲供恭致奠於 尊靈幃下、其詞曰、

源氏華胄

武門棟梁

德播異域

緝周公道

敦齊桓風

懷心庭燎

投情吐握

夙建仁策

卒樹伯迹

驚曳杖歌

壽考不易

此行何之

斯去那處

庶民傾誠

群臣與嗟

雲愁悃慘

浮瀕易消

知身莫贖

思恩可報

穆穆精神

威震扶桑

能有溫良

能有剛強

有度左方

民化國康

亦囿空昌

發匡合祥

埋白璧光

駿命豈常

高山蒼蒼

流水茫茫

哀恨無疆

泣淚成行

風悲露傷

幻蹟難忘

嗚呼哀哉

率由舊章

陪事廟堂

遙遊大荒

濟濟微子

采蘋采蘩

求蔬求核

既盛既享

饗其昭鑑

招以馨香

于沼沚傍

于郊野岡

乃肆乃將

來格道場

嗚呼哀哉

本ノマ、
尚齋
宋ガキ
島津主殿久柄獻之

175

○維延享第四歲次強圉單闕我 尊君故正四位下左近衛中將薩隅日三國主兼領琉球國

淨國院殿鑑阿天清道熙大居士、不圖罹疾病、雖盡著茲醫

方療養、更無驗、小春十冀丁卯漠然捐館去、吁嗟長生

何樂、嗚咽淚溢面矣、同二十五日壬午奉葬藏於淨光蓮

社、爰仲冬乙未臨中陰之日、末裔臣藤氏久起不堪哀悼

之至、恭備蘋蘩蕝蕞之微供、奉致祭於 尊靈幃下、其

辭曰、嗚呼 尊君

皇矣厥德

充塞乾坤

丈夫自欲

棄偽取真

教衆用執政事

精氣猶好遠

虛近實

每人施惠愛恩

口裏夜夜誚具葉

手中日日

栽善根

嗚呼哀哉

地如改形

草木叢林

枯槁憔悴

天似失色

日月星辰光沈闇昏

七澤鎖

雲拽愁雨

四河入海無本源

放却萬事誰歎相殘

夢幻又泡影

斷送一生驚破期至

緩步已走奔

啼霜夜鳥

叫月哀猿

通三明六通

了幻於如幻窮聖域

實十如一實

悟法於無法入釋門

嗚呼哀哉

洒洒落落地

何處不稱尊

情思有餘其知諸

插花瓶裡

誠意堪感是獻焉

盛橘銀盆

以寸短之所志

抽微些之所屯

烏帽傾溪谷三冬分雪採香蓀聊雖非薄

謹供盤飧

嗚呼哀哉

尚饗

朱方平
島津藤九郎久起獻之

176

維延享第四歲舍丁卯陽月十日丁卯吾 邦君故正四位下
左近衛中將薩隅日三國主兼領琉球國

淨國院殿源公鑑阿天清道熙大居士不意易寶於退隱之莊大
磯之第、嗚呼斯歲何歲也乎、禱祀而無靈、斯日何日也
乎、夢著永矢功、三州徒抱春者、不相杵之哭、而乃於
淨光教寺梵儀之修葬既竣追薦之淨業光筵、粵臣藤原久
茂潛忝邦家之遠眷、實冒累世之襲封、厚恩至重、豈堪
彼蒼天哀嘆哉、虔備山珍溪冽之膳、祭以梵禮之玄模、
乃命采邑苾芻龍峰寺主、奉致俎豆之事於
金蓮之寶位、其詞曰、

嗚呼哀哉

伏憶其庸

仰念其公

純然天爵

潤其心胸

寬然量度

併吞雲夢

猶不帶芥

縱四海雄

莊以位下

德兼威豐

敬以事上

慣義與忠

嗚呼哀哉

武熟輜略

家教輝功

勤勞吐握

偃草風隆

化隣魯變

星流營中

曰依曰怙

吾誰適從

劍躍淵底

何處問蹤

萬石離恨

無術可融

於乎哀哉

陵谷忽變

吾心如烘

一朝千古

望迷西東

誠爲誰慟

淚河溶溶

敢陳俎豆

設伊蒲供

爐香柏子

椀潔松風

靈願垂照

至哀至哀

於乎哀哉

尚饗

宋力牛
島津筑後久茂獻之

177 ○維延享四年丁卯冬十月十日我 尊君故正四位下左近衛

中將薩隅日三州刺史兼領琉球國

淨國院殿鑑阿天清道熙大居士、動靜無常 尊體日枯槁、

神祇虛感應、醫術亡靈驗、於戲桑榆、暮景徒瞻仰耳、

於淨光精舍隨梵儀以闡維矣、家臣平氏久馮不堪慟哭之情、十一月九日恭備山茗蔬菜之微供、以設于奠 尊靈

帷下、且告以文、其詞曰、

嗚呼哀哉

文武明哲

忠孝真人

海國伏威

關塞潤仁

偉哉令德

壯哉精神

百揆維敘

五典克循

逐時講武

聞道修身

光啓周政

優得漢民

遠顯祖宗

長垂紫綸

不貴可法

令聞未泯

嗚呼哀哉

茲歲何歲

此辰那辰

赫赫威烈

祁祁摯紳

終如電激

又似霜新

一別多劫

九腸無拘

風雲長淒

草木空蕪

燕金失色

荆璧喪淳

嗚呼哀哉

一百浮世

結夢劫塵

七十餘霜

回魂幽隣

永值此悲

誰能恤臣

感腸碎斷

涕泗濕巾

速離埃纏

直脫迷湮

切竭丹悃

于採彼蘋

聊列籩豆

以供祭禋

伏冀靈爽

來格遊巡

嗚呼哀哉

尚饗

種子島藏人久馮獻之

178

○維延享四年龍集強圉單閼冬十月亥數十莢丁卯 嚴君

淨國院殿故通議大夫羽林中郎將薩隅日三國主兼領琉球國

源公鑑阿天清道熙大居士偶嬰沈痾弗豫盡醫術乎倭漢而

無其驗、雖禱爾乎上下亦虧其效、聿易實於麗府大礪之

寢室、吁命哉、同月冀謝十葉壬午就于淨光精舍、遵法

而修喪儀矣、粵當中陰之日、小臣平氏安之助某不勝哀

慟之情、恭備溪毛山髮奠、昭告 尊靈以文、厥詞曰、

於惟我 嚴君、

澤遺千乘

百城幹楨

仁愛施內

則國家榮

智勇及外

則異域平

氣天四夷

威震八紘

繼功禹聖

有此文明

嗚呼哀哉

忽驚靈軌

哲人永征

遙乘雲梯

趣蓮土清

仰望彌高

蒼天難行

俯觀彌遠

黃泉易驚

木葉飄零

草露歌傾

是何所為

盡慕空名

嗚呼哀哉

厭六塵去

在常樂京

音容莫覩

吾淚不晴

呼喚那答

月照旗旌

羅籠豈住

風隔鐘聲

恭薦菲薄

特呈哀情

神靈來格

鑑此丹誠

德流萬邦

關西豪英

嗚呼哀哉

尚饗

朱力^キ
小松安之助某獻之

179 吉貴公御譜中

吉貴之計達^ニ 台聽^ニ、同年十一月五日 上使小堀和泉守

政峯來^ニ弔于東都芝邸^一、

大樹家重公賜^ニ贈銀五十枚於宗信^一、且自^ニ

家治公

吉宗公^一亦蒙^ニ懇篤之 尊意^一矣、

180 吉貴公御譜中

正文在淨光明寺

覺

一米貳拾九石三斗五升五合五夕五才

一銀八百六拾六匁六分貳里^(厘力)

右^ホ末

淨國院様爲御佛餉料、年々淨光明寺^江被相渡之旨、主^(稱)

^(山久初)計殿^方被仰渡候間、此段申渡外、以上、

朱力^キ
延享四年 十二月二日

寺社奉行所^(印)

淨光明寺

181 吉貴公御譜中

延享五年戊辰二月二日、京師東福寺枝院即宗院座元龍芳、

航西海來^ニ于薩府^一^(寓大龍寺)、同月六日登^ニ淨光明寺^一、獻^ニ祭文

於淨國院殿之尊靈前^ニ燒香矣、同月十五日歸^ニ院^一、

182

○維延享四年龍集丁卯冬十月初十日、前薩隅日三州刺史

淨國院殿鑑阿天清道熙大居士、俄然寂于魔島故城、歷十

有餘日、達訃于洛城之東、沙門龍芳下情不堪悼惜之至、

忙齊香燭奔趣魔府、恭詣 靈幃之下、祭以文曰、嗚呼

偉哉、三州巨府

皇圖藩翰主張之者非仁何爲、守禦之者無勇何治賢哉、

尊靈尤加才丕、肅肅標格整整家規、外示硬直內抱仁慈、

惠用厚澤匡用明知、談安列郡坐視平夷、島嶼異不拓服

之、

芝蘭棠棣並秀、連枝俊良英士霧列星馳、家富國壯百工

順時、可謂是此、名德並熙宏、烈祖緒壽邦家基、然萬

人傑百一世奇、上天鐘美于此、今姿嗚呼鴻福不歸、歸

維宜盡隣閣應著彝中擲冠巾不爲名羈、祝髮更服傾誠牟

尼希無漏福、要般若期晚境安逸益堅操持易人所難盡、

情欲私非植德夙焉、能如斯嗚呼

尊靈世出世間終始無虧、眞烈丈夫豈不嗟咨山野、不肖

無辜瑕疵覆壽洪此年在于此、於吾祖門金城湯池、恩遇

之厚蒼海靡涯、嗚呼哀哉、

七十餘年黃梁半炊、聞訃千里恨旬餘遲、倒鞋束包忽忙

奔趨、迢遞露駒陰易移一炷香縷三點清漪聊備薄奠矣、

以蕪詞、嗚呼哀哉

尚饗

朱力牛
京都即宗院獻之

○同年春夏獻淨國院殿之遺物軸物一卷社殿具
炳筆于近衛右

大臣内前公、掛物一幅唐圖
師筆見贈于平松三位時行卿、

同一幅同上于石井少納言行忠朝臣、同一幅同上于交野左

頭時永朝臣、同一幅孫億
筆于阿部伊豫守正右、同一幅

孫子
昌筆于松平越中守定賢上、此外至一族親戚近臣等、

賜遺物、各有差錄別格、

○同年之夏少將宗信欲使淨國院殿鑑阿天清道熙大居士

之遺髮納于紀州高野山上、是故四月二十日遺髮自淨光

明寺内陣、安客殿正面、時島津柰久峯代繼豐燒

香、寅刻遺髮發淨光明寺、安養院法印堯盈・威光院

文詮護送之、若年寄島津仲久鄰、用人山澤十太夫盛

香其外近臣諸有司等附從之、至于市來龍雲禪寺而

宿、同二十一日宿于隈城稱名教寺、同二十四日駕二船

于向田渡頭、直下河流泊久見崎港、五月四日開帆

島津備中貴條・島津周防忠紀・島津
國實久親私自嚴府附從而至于茲還、海路風不便六月三日到攝州

大坂津口、同四日入土佐堀薩摩邸、堯盈因病化矣、

因任闕日州飯野端山寺祥瑞俄代之、同二十四日遺髮

出薩摩邸、翌二十五日午刻到于高野山蓮金院現住、
秀惠

乃安靈牌所爲勤行、同二十六日爲初夜後夜之勤

行、同二十七日請青巖寺檢校來于蓮金院修二五十

口之大曼荼羅供、此日遺髮納奧院而建靈塔、銘曰、

延寶三年乙卯九月十七日產於薩府

故通議大夫羽林中郎將

薩隅日三國主兼領琉球

國源公吉貴靈塔

淨國院殿鑑阿天清道熙大居士

襲嚴父之封爲祖考追薦

從四位下左近衛少將源

朝臣宗信建立焉

延享四年丁卯十月十日卒於薩府

186 ○奉爲

淨國院殿鑑阿天清道熙大居士追薦大曼荼羅供職衆請

185 ○奉寄進石燈籠兩基

紀州高野山

御導師

淨國院殿

尊前

寺務檢校執行法印大和尚位恭翁奉

延享五年戊辰六月日

前薩隅日三國主兼領琉球國
從四位上
左近衛中將源朝臣繼豐建

前左學頭無量壽院奉

前左學頭實性院奉

大聖院光顯奉

奉爲 淨國院殿鑑阿天清道熙大居士

菩提

御位牌證帖

東南院明土奉

寂靜院奉

心王院奉

普門院奉

高室院奉

總持院奉

西南院奉

親王院奉

大光明院奉

夫高野山者、諸佛來聚之道場而、大師入定之靈廟也、以所由深信之大檀主思 先君之得脫、追福之懇志置 錫金之靈牌尔、則已往每日之奠饌擬雲海而無闕、怕軌之誦咒、縣日月不怠、蓋依斯鴻福 尊靈過卜五智之居於法界宮裏賁、四曼之臺於安養界中記、以備後昆之龜鏡耳、

蓮金院印

延享五年六月廿七日

寶塔院奉

三寶院奉

五智院奉

大乘院奉

發光院奉

清淨心院奉

成福院散華

增長院奉

已上衲衆

遍照尊院奉

智莊嚴院奉

天德院奉

地藏院奉

慈眼院奉

大樂院奉

安樂院奉

寶龜院奉

增福院奉

心南院奉

南院奉

正智院奉

平等院奉

功德聚院奉

五坊奉

金剛三昧院奉

報恩院奉

源龍院奉

定光院奉

西禪院奉

日光院讚頭

引攝院讚頭

明王院奉

釋迦文院奉

理性院奉

寶蓮院奉

蓮金院奉

慈光院經頭

華王院奉

修禪院敬進

已上甲衆

右來廿七日定員於蓮金院道場可令參勤給之狀如件、

延享五戊辰年六月廿五日

行事

三時僧衆

乘藏院奉

雨寶院奉

亮王院奉

明眼院奉

殊勝院奉

阿光院奉

相應院奉

庫藏院奉

中藏院(24)

東禪院奉

藥師院奉

寶珠院奉

總陽院奉

阿彌陀院奉

智性院奉

月輪院奉

千藏院奉

林松院奉

大善院奉

萬福院奉

龍生院奉

鑲池院奉

清德院奉

勢觀院奉

南昌院奉

已上

延享五戊辰年六月廿二日

188

敬白請諷誦事

三寶衆僧達嚨一裹

蓋夫不二靈源曾絕生滅去來之波瀾、一如月殿常揚性淨圓明之光輝、雖然迷霧忽蔽義天失孤輪之影、妄風一鼓苦海漣動轉之浪、開霧指月之至教爲此而興返流、歸源之要津不可不求焉、恭惟

故通議大夫羽林中郎將薩隅日三國主兼領琉球國源公法諡號淨國院殿鑑阿天清道熙大居士、挺生稟岳瀆之精秀、德含辰象之暉、仁愛內教威武外嚴、紹累代之洪緒化行異邦、懷命世之英才、名蓋當時實惟人中瑚璉、又乃王室于城者也、所冀保遐齡於千載、施芳烈於百世、豈圖梁木一夜摧

於兩楹之夢、秋葉一朝散于初冬之風、嗚呼吳穹不福於善如何、靈祇奄殲斯人、雖訴九蒼無益、逝者不憑三寶、曷翊神魂於茲、謹歸大雄利物之教、欲報先君罔極之德、迺開法筵於此山、追資冥福於彼岸、刊貞石造立五大制底、建密壇供養兩部漫荼、所讚誦則十七清淨句、色香味觸之境、咸是菩薩位地、所屈請則五十龍象、衆梵唄歌詠之聲、莫非金剛言詞、時維六月序屬三伏綠樹陰濃自見、法然色相澗水響潔、宛聆怕說圓音、綵幡搖而薰風生、宜除衆生炎熱、香煙上而紫雲起、幾想諸天降臨、仰願五智法帝九識心王塵數眷屬海滴諸尊、還念本誓集會道場、知見懇誠尚饗維馨、以此勝業奉翊 尊靈、早拂三妄蓋障見一如、心月頓出五道迷津、達不二性海功德、餘薰慶溢家門、善根殘芳及幽顯、乃至十世四恩萬方六趣、同脫生死之塵鄉、共遊常樂之覺殿、因所請誦誦如件、敬白、

延享五年六月廿七日

護持大檀主從四位下左近衛少將源朝臣宗信敬白、

(本文ハ二五八村文書ト同文)

○吉貴之計至三琉球國、國王尚敬不堪三悲哀之至、然海

路遼遠以時往來故、今年之夏五使圓覺寺長老古轍及長老古泉等弔使玉川按司渡楫于薩府上、八月五日登淨光明寺一捧祭文、尚敬奉獻大乘妙典一部寫、大官香十把・賻銀三十枚于淨國院殿之尊靈前上、祭文記于後、

190 ○維延享五年五月緇素二員共奉主命、渺茫蒼海乘槎泛來、伏以前薩隅日三州太守

淨國院殿鑑阿天清道熙大居士正寢易簣訃音達中山國、尚敬懷雨泣之枕、恭遵前例禮典之規、特遣古轍等繕寫八軸妙典全部、謹備祭奠于淨光精藍、稽首禮拜、

其辭曰、

於戲天哉

淨國院殿

德紹唐虞

武伴黃湯

恩溢八荒

齡過七旬

竊稽竊量

壽宜天齊

詎想詎知

易寶歸神

龍髯難攀

醫術豈驗

於戲天哉

蒼梧晏駕

吉貴公御譜中

○今年改三元寬延七月十八日於東都傳
令八月十三日遷藏府

○寬延元年自二十月六日至二十日併五日、修淨國院殿小

祥忌之禊儀于淨光明寺、時日州佐土原城主島津加賀守

忠雅嫡男又四郎久柄遣使來于薩府、信宿私邸、十

月七日登淨光明寺、獻博銀三枚志同十兩柄久及祭文、

畢郢登霞

雙袖龍鐘

沒齒弗忘

空瞻鼎湖

悼同霜淒

於戲天哉

寂乎巨測

彌慕彌高

薄海傾心

謹備凡儀

惟天是監

舉國永號

疊沛異寵

永望橋山

哀切鮫淚

渺乎難問

允神允聖

萬古流芳

爰遵禮典

愚衷愚悃

尚饗

朱カキ
琉球國王尚敬獻之

忠雅獻レ之、
久柄不レ及見于左、

祭文

○維時寬延元龍集著雍執除玄冬十日上章作噩丁、故正四

位下左近衛中將薩隅日三國太守兼領琉球國

淨國院殿源公鑑阿天清道熙大居士小祥忌之辰、粵末系藤

原朝臣忠雅恭荷累世之渥恩、不勝羹墻之恩命、植福之

練若大安寺主默堂等、就淨光明寺、欽設一盆薄奠、以

奉祭 尊靈、詞曰、

嗚呼哀哉

源家貴胤

鎮領三國

累世積德

野無妖怪

左輔右弼

孫子枝葉

急流勇退

義拔山嶽

丈夫志氣

自非博覽

西藩良將

兼懷異方

其報以陽

朝繁袖祥

虎視龍驤

松茂栢長

聲飛扶桑

智融金剛

寬仁度量

焉能布揚

嗚呼哀哉

玄黃分後

命數相當

寒溫交謝

五常互藏

吁吾太守

爲法金湯

吁吾明府

拂世秕糠

致誠神社

傾信道場

從心幾過

身宮稍強

往歲罹病

晏寢仆牀

醫巫拱手

無術設張

想雙鶴吊

哭一鑑亡

海闕南針

闕失斗光

嗚呼哀哉

訃達東武

去歲斷腸

海雲千里

今年悲鄉

難窺顏色

不侍藥鑕

恩高華嶽

澤深大洋

予以何報

予以何康

予心非石

寐向月梁

予心非席

寤夢甘棠

逮斯期忌

炷半片香

潤毛石髮

唯獻意芳

神儀如在

昭鑑卑章

嗚呼哀哉

尚饗

朱力平
島津加賀守忠雅獻之

(表紙)

追 録 舊 記 雜 録 卷 九 十 七	繼 豐 公	自延享五年正月 至寛延元年十一月
	宗 信 公	

繼豐公御譜中

正文在文庫

爲若菜之御祝儀、鯛一折被獻之、遂披露_レ處一段之御
仕合_レ、恐_レ謹言、

〔_宋延享五年〕 正月七日 忠知判

松平大隅守殿 忠知
〔_宋存右裏〕 酒井雅樂頭

194 爲若菜之御祝儀、鯛一折被獻之、遂披露_レ處一段之御
仕合_レ、恐_レ謹言、

〔_宋延享五年〕 正月七日 涼朝判

松平大隅守殿 涼朝
〔_宋存右裏〕 秋元但馬守

宗信公御譜中
正文在文庫

爲若菜之御祝儀、鯛一折被獻之候、遂披露_レ處一段之御
仕合_レ、恐_レ謹言、

〔_宋延享五年戊辰〕 正月七日 酒井雅樂頭 忠知判

松平薩摩守殿

全上

爲若菜之御祝儀、鯛一折被獻之、遂披露_レ處一段之御
仕合_レ、恐_レ謹言、

〔_宋延享五年〕 正月七日 秋元但馬守 涼朝判

松平薩摩守殿

197 宗信公御譜中

正文在文庫

吉書

一神社佛閣修造興行事、

一可專勸農事、

一可徵納國々年貢事、

右任三箇條之旨、可有沙汰之狀如件、

延享五年正月十一日 宗信御判

198 繼豐公御譜中

正文在文庫

爲年頭之御祝儀、以使者御太刀一腰・御馬代黄金十兩被

獻之外、遂披露外之處一段之御仕合外、恐々謹言、

〔采〕 延享五年 正月十一日 忠知判

松平大隅守殿

忠知

〔采〕 右右裏

酒井雅樂頭

199 全上

爲年頭之御祝儀、以使者御太刀一腰・御馬代黄金十兩被

獻之外、遂披露外之處一段之御仕合外、恐々謹言、

〔采〕 延享五年 正月十一日 忠尚判

松平大隅守殿 忠尚

〔采〕 右右裏 西尾隱岐守

200 全上

爲年頭之御祝儀、以使者御太刀一腰・御馬代黄金十兩被

獻之外、遂披露外之處一段之御仕合外、恐々謹言、

〔采〕 延享五年 正月十一日 涼朝判

松平大隅守殿 涼朝

〔采〕 右右裏 秋元但馬守

201 宗信公御譜中

正文在文庫

爲年頭之御祝儀、以使者御太刀一腰・御馬代黄金十兩被

獻之外、遂披露外之處一段之御仕合候、恐々謹言、

〔采〕 延享五年 正月十一日 松平右近將監 武元判

宗信公御譜中
正文在文庫

全上

爲年頭之御祝儀、以使者御太刀一腰・御馬代黃金十兩被
獻之外、遂披露外處一段之御仕合外、恐々謹言、

〔宋〕「延享五年」
正月十一日

西尾隱岐守

忠尚判

松平薩摩守殿

爲年頭之御祝儀、以使者御太刀一腰・御馬代黃金十兩被
獻之外、遂披露外處一段之御仕合候、恐々謹言、

〔宋〕「延享五年」
正月十一日

秋元但馬守

涼朝判

松平薩摩守殿

松平薩摩守殿

本多伯耆守
正珍判

堀田相摸守
正亮判

酒井雅樂頭
忠知判

全上

御札令披見外、同氏上總入道卒去付而 上意之趣奉書相
達、難有由得其意外、依之爲御禮被差越使者外、紙面之
通及言上外、恐々謹言、

〔宋〕「延享五年」
正月十八日

西尾隱岐守

忠尚判

松平薩摩守殿

全上

御札令披見外、同氏上總入道卒去付而 上意之趣奉書相
達、難有由得其意外、依之爲御禮被差越使者外、紙面之
趣及言上外、恐々謹言、

〔宋〕「延享五年」
正月十八日

秋元但馬守

涼朝判

松平薩摩守殿

松平薩摩守殿

御札令披見外、同氏上總入道卒去付而 上意之趣相達、

〔島津吉賢〕

難有由得其意外、依之爲御禮被差越使者外、紙面之通各

申談及 上聞外、恐々謹言、

〔宋〕「延享五年」
正月十八日

酒井雅樂頭

忠知判

全上

御札令披見_レ、同氏上總入道卒去付_ル、以上使御香奠
被下置、其上從

三御所様、大隅守_江

御意之趣難有由得其意_レ、依之爲御禮被差越使者_レ、紙
面之通各申談及 上聞_レ、恐_レ謹言、

〔延享五年〕

正月十八日

酒井雅樂頭

忠知判

松平薩摩守殿

御札令披見_レ、同氏上總入道卒去付_ル、以上使御香奠
被下置、其上從

三御所様、大隅守_江 御意之趣、難有由得其意_レ、依之
爲御禮被差越使者_レ、紙面之通及言上_レ、恐_レ謹言、

〔延享五年〕

正月十八日

西尾隱岐守

忠尚判

松平薩摩守殿

全上

御札令披見_レ、

三御所様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤_レ、然者家督以
後初_レ歸國爲 御尋、以宿次奉書御肴拜領付、爲御禮被
差越使者_レ處、

御前_江被召出之拜領物有之、難有被存由得其意_レ、紙面
之趣各一覽之事_レ、恐_レ謹言、

〔延享五年〕

正月十九日

酒井雅樂頭

忠知判

松平薩摩守殿

全上

御札令披見_レ、同氏上總入道卒去付_ル、以上使御香奠
被下置、其上從

三御所様、大隅守_江

御意之趣難有由得其意_レ、依之爲御禮被差越使者_レ、紙
面趣及言上_レ、恐_レ謹言、

〔延享五年〕

正月十八日

秋元但馬守

涼朝判

松平薩摩守殿

全上

御札令披見_レ、

三御所様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤_レ、然考家督以後初_レ歸國爲 御尋、以宿次奉書御看拜領付、爲御禮被差越使者_レ處、

御前_レ被召出、拜領物有之、難有由得其意_レ、紙面之趣令承知_レ、恐_レ謹言、

〔延享五年〕

正月十九日

秋元但馬守

涼朝判

松平薩摩守殿

全上

御札令披見_レ、

三御所様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤_レ、然考家督以後初_レ歸國爲 御尋、以宿次奉書御看拜領付、爲御禮被差越使者_レ處

御前_レ被召出、拜領物有之、難有被存由得其意_レ、紙面之趣令承知_レ、恐_レ謹言、

〔延享五年〕

正月十九日

西尾隱岐守

忠尚判

松平薩摩守殿

正文礼文庫

御札令披見_レ、如承改年之慶賀珍重_レ、

三御所様益御機嫌能被成御座、年始御規式可相濟と目出度被存由得其意_レ、隨_レ御樽看被獻_レ之候、各申談遂披露候處一段之御仕合_レ、恐_レ謹言、

〔延享五年〕

二月六日

堀田相摸守

正亮判

松平薩摩守殿

全上

御札令披見_レ、如承改年之慶賀珍重_レ、

三御所様益御機嫌能被成御座、年始御規式可相濟と目出度被存由得其意_レ、隨_レ御樽看被獻_レ之_レ、遂披露_レ之處一段之御仕合_レ、恐_レ謹言、

〔延享五年〕

二月六日

秋元但馬守

涼朝判

松平薩摩守殿

全上

御札令披見_レ、如承改年之慶賀珍重_レ、

三御所様益御機嫌能被成御座、年始御規式可相濟と目出

度被存由得其意候、紙面之趣及言上り、恐々謹言、

〔朱〕
「延享五年」二月六日
西尾隠岐守
忠尚判

松平薩摩守殿

216
全御譜中

正文在文庫

爲年頭之慶賀芳札之趣欣然之至り、其表弥無吳儀御超歳
之由、弥重存り、恐々謹言、

〔朱〕
「延享五年」二月八日
水戸宰相
宗翰判

松平薩摩守殿

御報

217
宗信公御譜中

正文在文庫

なをく御ふミの通何もよろしく御めて度申上まい
らせり、めてたくかしく、

正月廿一日付にて御ふミ下されり、

三御所様益御機嫌よく御座なされ、御めて度覺しめしり
由、扱は宿次御奉書を以

公方様より御鷹の鶴御拜領被成、有かたくおほしめしり
由、御禮として御表へ御使御あげ被成りとの御事、御内

證よりも右の御禮御申上被成り由、御ふミのおもむきよ
ろしく申あげまいらせり、めてたくかしく、

〔朱〕
「延享五年」

松たいら
薩摩守様
御返事
人々御中

高瀬
清崎

218
全上

なをくめてたくかしく、

正月廿一日附にて御ふミ下されり、

三御所様御機嫌よく成らせられ、御めてたくおほし召り
由、扱は宿次御奉書を以、御鷹の鶴御拜領被成、有か
たく思召被成り由、御禮御表へ御使御上ケ被成りに付、
御内證方も右之御禮御申上被成りよし

大納言様へも御禮御申上被成り由、御ふミの趣何もよろ
しく申上まいらせられり、めてたくかしく、

〔朱〕
「延享五年」

豊岡

梅その

松しま

うら尾

松平

薩摩守様
御返事

人々御中

正文在文庫

たきつ
さえた

歳暮之、御内書可相渡り間、明日五半時 御城江家來可
被差出り、以上、

〔卷〕
「延享五年」 二月廿日

堀田相摸守

松平大隅守殿

正文在文庫

枝柿一箱被獻之り、遂披露り、恐々謹言、

〔卷〕
「延享五年」 三月五日

秋元但馬守

涼朝判

松平薩摩守殿

御札令披見り、

三御所様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤り、將又同氏大
隅守御鷹之鶴拜領之、難有由得其意り、依之爲御禮被差

越使者り、紙面之趣各申談及 上聞り、恐々謹言、

〔卷〕
「延享五年」

三月九日

松平右近將監

武元判

松平薩摩守殿

御札令披見り、

三御所様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤り、將又同氏大
隅守御鷹之鶴拜領之、難有由得其意り、依之爲御禮被
差越使者り、紙面之趣及言上り、恐々謹言、

〔卷〕
「延享五年」

三月九日

本多伯耆守

正珍判

松平薩摩守殿

正文在文庫

なをく御めて度何もよろしく申あけまいらせり、
めてたくかしく、

二月十九日付にて御ふミ下されり、

三御所様益御機嫌よく御座なされ、御めて度覺しめしり
由、扱は大奥へ 竹姫君様御登城之節、御見おくりとし

て村路御上被成り處に

公方様 大納言様へ 御目見仰付られ 上意いたゞき、

そのうへ

公方様より拜領物被^レ 仰付られ、冥加の至りありかた

おほし召り由、右の御禮御申上度との御事、御ふみの通

よろしく申上まいらせり、めてたくかしく、

〔延享五年〕

まつ平

薩摩守様

御返事
人々御中

高瀬

清崎

お

225 全上

御札令披見り、

公方様益御機嫌能被成御座、正月廿四日増上寺

御靈屋 御参詣之儀被承之、恐悦旨尤り、紙面之趣各申

談及 上聞り、恐々謹言、

〔延享五年〕

三月廿五日

松平右近將監

武元判

226

宗信公御譜中

正文在文庫

御札令披見り、

三御所様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤り、然者正月廿

一日

竹姫君様被爲

入り節、菊事

〔儀事女、竹節〕

御懇之蒙

上意、從

三御所様拜領物被 仰付、其上從

公方様、同氏大隅守に表拜領物有之、重疊難有由得其意

り、紙面之趣各一覽之事り、恐々謹言、

〔延享五年〕

三月廿五日

松平右近將監

武元判

224

宗信公御譜中

正文在文庫

御札令披見り、

公方様益御機嫌能被成御座、正月十日東叡山 御靈屋

御参詣之儀被承之、恐悦旨尤り、紙面之趣各申談及 上

聞り、恐々謹言、

〔延享五年〕

三月廿一日

松平右近將監

武元判

松平薩摩守殿

松平薩摩守殿

227 全上

御札令披見外、

三御所様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、然者正月廿

一日

竹姫君様被爲 入外節、菊事

御懇之蒙

上意、從

三御所様拜領物被 仰付、其上從

公方様、同氏大隅守に及拜領物有之、重疊難有由得其意

外、紙面趣令承知外、恐々謹言、

〔卷〕
「延享五年」

三月廿五日

西尾隱岐守

忠尚判

松平薩摩守殿

228 全上

今度

(家重委梅栄氏)

至心院様御中陰御法事御執行付而、以使者御香奠被獻之

外、於東叡山奉納之事候、右之趣及言上外、恐々謹言、

〔卷〕
「延享五年」

三月廿六日

堀田相摸守

正亮判

松平薩摩守殿

229 宗信公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

三御所様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、然者正月廿

一日大興に

竹姫君様被爲 入外節、菊事御懇之蒙

上意、從

三御所様拜領物被 仰付、且亦從

公方様、同氏大隅守拜領物有之、重疊難有由得其意外、

紙面之趣令承知候、恐々謹言、

〔卷〕
「延享五年」

四月三日

秋元但馬守

涼朝判

松平薩摩守殿

230 全上

御札令披見外、

三御所様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤候、將亦同氏大

隅守儀、舊臘以上使御鷹之鶴拜領、難有由得其意外、

依之爲御禮被差越使者外、紙面之趣令承知外、恐々謹言、

〔延享五年〕 四月四日 秋元但馬守 涼朝判

松平薩摩守殿

全上

御札令披見外、

三御所様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、將亦以宿次

奉書御鷹之鶴拜領之、難有由得其意外、依之爲御禮以北

郷權八御樽肴被獻之外、遂披露外處

御前に被召出、入念外段御喜色之御事外、恐々謹言、

〔延享五年〕 四月四日 秋元但馬守 涼朝判

松平薩摩守殿

232

全上

御札令披見外、

三御所様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、將亦以宿次

奉書御鷹之鶴拜領之、難有由得其意外、依之爲御禮北郷

權八被差越外、紙面之趣及言上外、恐々謹言、

〔延享五年〕 四月四日 西尾隱岐守 忠尚判

松平薩摩守殿

233

全上

御札令披見外、

三御所様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、將又以宿次

奉書御鷹之鶴拜領之、難有由得其意外、依之爲御禮以北

郷權八御樽肴被獻之外、遂披露外處、

御前に被出之、(石脱外)入念外段御喜色之御事外、恐々謹言、

〔延享五年〕 四月五日 松平右近將監 武元判

本多伯耆守 正珍判

堀田相摸守 正亮判

酒井雅樂頭 忠知判

松平薩摩守殿

234

宗信公御譜中

正文在文庫

御香具一箱并丸熨斗一箱被獻之外、遂披露外處一段之御

仕合外、恐々謹言、

〔延享五年〕 四月廿一日 本多伯耆守 正珍判

松平薩摩守殿

御香具一箱并丸鬘斗一箱被獻之、遂披露之處一段之御仕合、恐、謹言、

〔宋〕
「延享五年」 四月廿一日 秋元但馬守 涼朝判

松平薩摩守殿

御札令披見、

三御所様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤、然者二月廿五日

竹姫君様被爲 入、節、菊事從
大御所様御懇之蒙

上意、拜領物被 仰付之、且亦同氏大隅守拜領物有之、重疊難有由得其意、紙面之趣令承知、恐、謹言、

〔宋〕
「延享五年」 四月廿三日 秋元但馬守 涼朝判

松平薩摩守殿

正文在文庫

御札令披見、

三御所様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤、然者二月廿

五日西丸

竹姫君様被爲 入、節、菊事

大御所様御懇之蒙

上意、拜領物被 仰付、其上同氏大隅守に及拜領物有之、重疊難有由得其意、紙面趣各一覽之事、恐、謹言、

〔宋〕
「延享五年」 四月廿三日 本多伯耆守 正珍判

松平薩摩守殿

御札令披見、

三御所様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤、然者二月廿

五日西丸

竹姫君様被爲 入、節、菊事〔從脱カ〕

大御所様御懇之蒙

上意、拜領物被 仰付、其上同氏大隅守に及拜領物有之、重疊難有由得其意、紙面之趣令承知、恐、謹言、

〔宋〕
「延享五年」 四月廿三日 西尾隱岐守 忠尚判

松平薩摩守殿

239 宗信公御譜中

正文在彌勒院

知行目録

高百斛

清水姫城村之内

羽月鳥巢村之内

高原蒲牟田村之内

羽月大嶋村之内

羽月鳥巢村之内

末吉二之方村之内

清水姫城村之内

高原蒲牟田村之内

同所同村之内

同所同村之内

同所同村之内

同所同村之内

同所同村之内

羽月鳥巢村之内

同所大嶋村之内

同所同村之内

同所同村之内

名寄帳在別冊

右高雖爲前住淨妙院憲英法印自分新仕明之地、依願相加于先年之御寄附、高都合三百石、正八幡爲社領被寄附之條、至後年無違失可有取納者也、仍如件、

延享五年辰四月廿五日

平田掃部 正輔判

鎌田典膳 政昌判

樺山主計 久初判

嶋津大藏 久丘判

嶋津左衛門 久甫判

彌勒院

240 宗信公御譜中

正文在龍洞院

知行目録

高三拾貳石貳斗五升四合七才

志布志月野村之内

末吉南之郷村之内

志布志月野村之内

名寄帳在別册

右高雖爲前任淨妙院憲英法印自分新仕明之地、依願相加于先年之御寄附、高都合百五拾石被寄附于其寺之條、至後年無違失可有取納者也、仍如件、

延享五年辰四月廿五日

掃部正輔判

典膳政昌判

主計久初判

大藏久丘判

左衛門久甫判

龍洞院

全上

正文在憲英寺

知行目錄

高三拾石

鶴田鶴田村之内

同所同村之内

同所同村之内

志布志月野村之内

鶴田鶴田村之内

同所同村之内

名寄帳在別册

右高雖爲前任淨妙院憲英法印自分新仕明之地、依願被寄附于其寺之條、至後年無違失可有取納者也、仍如件、

延享五年辰四月廿五日

掃部正輔判

典膳政昌判

主計久初判

大藏久丘判

左衛門久甫判

憲英寺

全上

正文在小根占安樂寺

知行目錄

高三拾石

志布志月野村之内

清水姫城村之内

名寄帳在別冊

右高雖爲前住淨妙院憲英法印自分新仕明之地、依願被寄

附于其寺之條、到後年無違失可有取納者也、仍如件、

延享五年辰四月廿五日
掃部 正輔判

典膳 政昌判

主計 久初判

大藏 久丘判

左衛門 久甫判

小根占
安樂寺

243 宗信公御譜中

延享五年二月二十五日御部屋大榎家重公之妾、大納言家治公之御実母、後號幸心院殿 逝去

于營中、故奉_レ窺_二

三御所之安否、因賜_二奉書_一載_二于左方_一、

244 正文在文庫

御札令披見_レ、

〔至心卷〕御部屋様御逝去之段被承之、被絶言語由得其意_レ、依之

御機嫌以使者被相伺_レ、被爲替御儀無_レ之_レ間可御心易_レ、

紙面之趣各申談及 上聞_レ、恐_レ謹言、

〔采〕「延享五年」 四月廿七日 堀田相摸守 正亮判

松平薩摩守殿

245 全上

御札令披見_レ、

御部屋様御逝去之段被承之、被絶言語由得其意_レ、依之

御機嫌以使者被相伺_レ、御安全御儀_レ間、可御心易_レ、

紙面之趣及言上_レ、恐_レ謹言、

〔采〕「延享五年」 四月廿七日 秋元但馬守 涼朝判

松平薩摩守殿

246 全上

御札令披見外、

御部屋様御逝去之段被承之、被絶言語由得其意外、依之

大御所様御機嫌以使者被相伺之、被爲替御儀無之、間

可御心易外、紙面趣及言上外、恐々謹言、

〔朱〕 延享五年 四月廿七日

西尾隠岐守

忠尚判

松平薩摩守殿

247 繼豊公御譜中

正文在文庫

爲端午之祝儀、帷子單物到來歡覺候、委曲本多伯耆守可

述外也、

〔朱〕 延享五年 五月四日



松平大隅守殿

248 全上

爲端午之御祝儀、以使者御帷子單物被獻之外、遂披露外

處、一段之御仕合候、恐々謹言、

〔朱〕 延享五年 五月四日

秋元但馬守

涼朝判

松平大隅守殿

249 宗信公御譜中

正文在文庫

爲端午之祝儀、帷子單物到來歡覺外、委曲本多伯耆守可

述外也、

〔朱〕 延享五年 五月四日



薩摩少將殿

250 全上

爲端午之御祝儀、以使者御帷子單物被獻之外、遂披露外

處一段之御仕合外、恐々謹言、

〔朱〕 延享五年 五月四日

秋元但馬守

涼朝判

松平薩摩守殿

251 〔朱〕 雜抄中

高持成願御格式之事

一諸人持留地之願申出外節、取込拜借等有之人は者、御免不被仰付御法ニ外間、右躰之儀無之旨段々御格式之

次第、ケ條書を以顯出、其旨得御差圖外上御免被仰付

外、然處持留地御免被仰付外以後、取込拜借等仕外人

も有之外、新仕明持留地御免被仰付、郡方免證文相渡

外以後、取込拜借等仕外者、最初御免之儀外得者、

現高相求外等之譯も相替、仕明高之儀外間、高上御免

可被仰付旨、延享五年辰五月被相定外事、

外、恐々謹言、
〔朱〕延享五年 六月十九日
松平右近將監
武元判
宗信公御譜中
延寶三年乙卯九月十七日座於薩府

252 宗信公御譜中
正文在文庫

今度

〔家繼〕有章院様三十三回御忌御法事御執行付る、以使者御香奠

被獻之外、於増上寺奉納之事外、右之趣及言上外、恐々

謹言、

〔朱〕延享五年 六月十四日 本多伯耆守 正珍判

松平薩摩守殿

253 全上

御札令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座、四月廿日東叡山 御靈前

御參詣之儀被承之、恐悦旨尤外、紙面趣各申談及 上聞

255 白木御文書五番箱中

三時僧衆

乘藏院奉 雨寶院奉

堯王院奉 明眼院奉

孔 淨國院殿鑑阿天清道熙大居士

襲嚴父之封爲租考追薦

從四位下左近衛少將源

朝臣宗信建立焉

延享四年丁卯十月十日卒於薩府

〔朱〕有御建立ノ年月ナン、延享五年六月ニアリ

256 奉爲

淨國院殿鑑阿天清道熙大居士追薦大曼荼羅俱職衆請定

御導師

寺務檢校執行法印大和尚位恭翁奉

前左學頭無量壽院奉

殊勝院奉 阿光院奉

相應院奉 庫藏院奉

中藏院奉 東禮院奉

藥師院奉 寶珠院奉

總陽院奉 阿彌陀院奉

智性院奉 月輪院奉

千藏院奉 林松院奉

大善院奉 萬福院奉

龍生院奉 饒池院奉

清德院奉 勢觀院奉

南昌院奉 已上

延享五戊辰年六月廿二日

白紙二
三時勤行僧衆

蓮金院

前左學頭實性院奉

大聖院唯願

寂靜院奉

普門院奉

總持院奉

親王院奉

寶塔院奉

五智院奉

發光院奉

成福院散華

已上 納衆

遍照尊院奉

天德院奉

慈眼院奉

安樂院奉

增福院奉

南院奉

平等院奉

五坊奉

報恩院奉

東南院眼七

心王院奉

高室院奉

西南院奉

大光明院奉

三寶院奉

大乘院奉

清淨心院奉

增長院奉

智莊嚴院奉

地藏院奉

大樂院奉

寶龜院奉

心南院奉

正智院奉

功德聚院奉

金剛三昧院奉

原龍院奉

定光院奉

西禪院奉

日光院讚頭

引攝院讚頭

明王院奉

釋迦文院奉

理性院奉

寶蓮院奉

蓮金院奉

慈光院經頭

華王院奉

修禪院皆達

己上 甲衆

右來廿七日巳於蓮金院道場可令參勤給之狀如件、

延享五戊辰年六月廿五日

行事

右ノ如紙ニ
大曼奈羅供職衆請定

蓮金院

御位牌證帖

奉爲 淨國院殿鑑阿天清道熙大居士菩提

夫高野山者諸佛來聚之道場而、大師入定之靈幅也、以所由深信之大檀主思 先君之得脱、追福之懇志置鐫金之靈牌尔、則已往每日之奠饌擬雲海而無闕、怕軌之誦咒懸日月不怠、蓋依斯鴻福尊靈過卜五智之居於法界宮裏實、四曼之臺於安養界中記、以備後昆之龜鏡耳、

延享五年六月廿七日

蓮金院

宋
イシ

右ノ如紙ニ
御位牌支證

高野山
蓮金院

敬白請諷誦事

三寶衆僧達嚩一裏

蓋夫不二靈源曾絕生滅去來之波瀾、一如月殿常揚性淨圓明之光輝、雖然迷霧忽蔽義天失孤輪之影、妄風一鼓苦海湛動轉之浪、開霧指月之至教爲此而興返流、歸源之要津不可不求焉、恭惟

故通議大夫羽林中郎將薩隅日三國主兼領琉球國源公法諡號淨國院殿鑑阿天清道熙大居士、挺生稟岳瀆之精秀、德含辰象之呬、仁愛內敦威武外嚴、紹累代之洪緒、化行異邦、懷命世之英才、名蓋當時實惟人中瑚璉、又乃王室干城者也、所冀保遐齡於千載、施芳烈於百世、豈圖梁木一夜摧於兩楹之夢、秋葉一朝散于初冬之風、嗚呼吳穹不福於善如何、靈祇奄殲斯人、雖訴九蒼無益、逝者不憑三寶、曷翊神魂於茲、謹歸大雄利物之教、欲報先君罔極之德、廻開法筵於此山、追資冥福於彼岸、刊貞石造立五大制底、建密壇供養兩部漫荼、所讚誦則十七清淨句、色香味觸之境、咸是菩薩位地、所屈請則五十龍象、衆梵唄歌詠之聲、莫非金剛言詞、時維六月序屬三伏緣樹陰濃自見、法然色

今上

相潤水響潔、宛聆怕說圓音、綵幡搖而薰風生、宜除衆生
炎熱、香煙上而紫雲起、幾想諸天降臨、仰願五智法帝九
識心王塵數眷屬海滴諸尊、還念本誓集會道場、知見懇誠
尚饜維繫、以此勝業奉翊 尊靈、早拂三妄蓋障見一如、心
月頓出五道迷津、達不二性海功德、餘薰慶溢家門、善根
殘芳及幽顯、乃至十世四恩萬方六趣、同脫生死之塵鄉、
共遊常樂之覺殿、因所請諷誦如件、敬白、

延享五年六月廿七日

護持大檀主 從四位下左近衛少將源朝臣宗信敬白、

右ノ如紙ニ
諷誦文

拾七番トアリ

(本文書八一八八号文書ト同一ナリ)

續出公御譜中

奉寄進石燈籠兩基

紀州高野山

淨國院殿

尊前

延享五年戊辰六月日

前藤隅日三國主兼領琉球國
從四位上
左近衛中將源朝臣
繼豐建

宗信公御譜中

扣正文在右筆所

一筆致啓上候、就 御代替從琉球中山王以使者御祝儀申
上ノ段申聞候處、先規之通被 仰付、難有仕合奉存外、

宗信公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座、今度有章院様三十三回御忌

御法事、於増上寺御執行相濟外段被承之、恐悦旨尤外、

紙面之趣各申談及 上聞外、恐々謹言、

(奉)
「延享五年」

六月廿五日

松平右近將監

武元判

松平薩摩守殿

正文在文庫

端午之 御内書可相渡外聞、明日五半時 御城江家來可

被差出外、以上、

(奉)
「延享五年」

六月廿四日

本多伯耆守
(正參)

松平大隅守殿

繼豊公御譜中

正文在文庫

今朝饗節一箱被獻之外、遂披露外處一段之御仕合外、恐
々謹言、

〔延享五年〕

七月四日

忠知判

松平大隅守殿

〔在右裏〕

酒井雅樂頭

忠知

宜御禮申上度旨私迄申越外、右使者・從者迄今三日鹿兒

嶋來着仕、如例旅支度付五、日數六拾日餘手間取可申外

間、仕舞次第召連可致出足候、此等之段爲可申上呈使札

候、恐惶、

〔延享五年〕

七月三日

酒井雅樂頭様

堀田相摸守様

本多伯耆守様

松平右近將監様

全上

今朝饗節一箱被獻之外、遂披露外處一段之御仕合外、恐

々謹言、

〔延享五年〕

七月四日

涼朝判

松平大隅守殿

〔在右裏〕

秋元但馬守

涼朝

全上

今朝饗節一箱被獻之外、遂披露外處一段之御仕合外、恐

々謹言、

〔延享五年〕

七月四日

忠尚判

松平大隅守殿

〔在右裏〕

西尾隱岐守

忠尚

宗信公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、就酷暑之節

268

全上

御札令披見外、就酷暑之節

三御所様御機嫌以使者被相伺之外、益御安全御儀外間、

可御心易外、隨而琉球布一箱、砂糖漬天門冬一器・赤貝

松平薩摩守殿

〔延享五年〕
七月四日

西尾隱岐守

忠尚判

267

御札令披見外、就酷暑之節

三御所様御機嫌以使者被相伺之外、益御勇健御儀外間、

可御心易候、隨而琉球布一箱并砂糖漬天門冬一器・赤貝

塩辛一器・琉球泡盛酒二壺被獻之外、遂披露外處一段之

御仕合外、恐々謹言、

松平薩摩守殿

〔延享五年〕
七月四日

酒井雅樂頭

忠知判

270

宗信公御譜中

正文在文庫

爲生見玉之御祝儀、黄金十兩被獻之外、遂披露外處一段
之御仕合外、恐々謹言、

〔延享五年〕
七月六日

松平右近將監

武元判

本多伯耆守

正珍判

堀田相摸守

正亮判

酒井雅樂頭

忠知判

松平薩摩守殿

269

全御譜中

尾張中納言宗勝卿之令愛房姫權三病痾、今年七月五日婚
儀未_{十七}整卒_{十七}、葬于江都小石川傳通院、法諱冷池院殿、

〔延享五年〕
七月四日

秋元但馬守

涼朝判

松平薩摩守殿

(島津志國)
深固院殿之靈牌新納川邸、久保同上、以白銀各一枚、進納于淨光

明寺殿五世之靈牌且青蚨二百疋本立寺五世之靈塔島津要人

久直、津家久夫人、以白銀各一枚、進納于南林寺殿・興國寺殿及彭

窓庵主・妙國寺殿・隆盛院殿之靈牌久保同上、久保同上、同日・六

日以白銀各一枚、獻納于曾於郡霧島神社・國分宮內正

八幡宮、同日以白銀一枚、進納于吉田津友寺殿之

靈牌岡山藤次、國通同上、同日・六日・八日以白銀一枚、獻納于

額姪杖聞神社、以白銀各一枚、進納于加世田日新寺

殿靈牌(鹿兒島市)島津久保、島津主水、同日・七日・九

日十日以白銀各一枚、獻納于出水加紫久利神社・水引

八幡新田宮、進納于隈之城稱名寺殿靈牌・市來龍雲

寺殿靈牌・伊集院妙圓寺殿之靈牌(百世邸)柱太郎兵衛、久保同上

宗信公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

三御所樣益御機嫌能被成御座、今度朝鮮之信使御禮申上之御饗應被 仰付之、其上西丸に及登

城、御作法等相濟外段被承之、恐悅旨尤外、依之被差越使者外、紙面之趣各申談及 上聞外、恐々謹言、

全上

御札令披見外、

三御所樣益御機嫌能被成御座、今度朝鮮之信使御禮申上之御饗應被 仰付之、其上西丸に及登

城御作法等相濟外段被承之、恐悅旨尤外、依之被差越使者外、紙面之趣及言上外、恐々謹言、

(朱)「寛延元年」 八月三日 西尾隱岐守 忠尚判

全上

御札令披見外、

三御所樣益御機嫌能被成御座、今度朝鮮之信使御禮申上之御饗應有之、且西丸に及登 城御作法等相濟外段被承

之、恐悅旨尤外、依之被差越使者外、紙面趣及言上外、恐々謹言、

(朱)「寛延元年」 八月三日 秋元但馬守 涼朝判

松平薩摩守殿

(朱)「寛延元年」 八月三日 本多伯耆守 正珍判

松平薩摩守殿

松平薩摩守殿

279 繼豐公御譜中

寛延元年八月四日以^(房明)上使中山勘解由^(房明)賜御鷹所^(房明)攫之雲雀於繼豐、在病故阿部伊豫守正右代繼豐、到執政各第禮謝焉、

280 宗信公御譜中

正文在文庫

御札令披見、

三御所樣益御機嫌能被成御座、恐悅旨尤、然者就

御代替、從琉球中山王以使者御祝儀申上、段被申聞、處、

先規之通被 仰付、難有由其方迄御禮申達、旨得其意、

依之被差越使者、紙面趣各申談及 上聞、且又右使

者・從者迄去月三日其地着候、如例支度有之、仕廻次第

召連可有發足由令承知、恐、謹言、

〔朱〕八月四日 本多伯耆守 正珍判

松平薩摩守殿

281 全上

御札令披見、

三御所樣益御機嫌能被成御座、恐悅旨尤、然者就

御代替、從琉球中山王以使者御祝儀申上、段被申聞、處、

先規之通被 仰付、難有由其方迄御禮申達、旨得其意、

依之被差越使者、紙面之趣及言上候、且亦右使者・從

者迄去月三日其地着候、如例支度有之、仕廻次第召連可

有發足由令承知、恐、謹言、

〔朱〕八月四日 秋元但馬守 涼朝判

松平薩摩守殿

282 全上

御札令披見、

三御所樣益御機嫌能被成御座、恐悅旨尤、然者就

御代替、從琉球中山王以使者御祝儀申上、段被申聞、處、

先規之通被 仰付、難有由其方迄御禮申達、旨得其意、

依之被差越使者、紙面趣及言上、且亦右使者・從者

迄去月三日其地着候、如例支度有之、仕廻次第召連可有

發足由令承知、恐、謹言、

〔朱〕八月四日 西尾隱岐守 忠尚判

松平薩摩守殿

全上

爲八朔之御祝儀、以使者御太刀一腰・御馬代黃金十兩被
獻之外、遂披露外處一段之御仕合外、恐々謹言、

〔寛延元年〕

八月四日

松平右近將監

武元判

本多伯耆守

正珍判

堀田相摸守

正亮判

酒井雅樂頭

忠知判

松平薩摩守殿

全上

爲八朔之御祝儀、以使者御太刀一腰・御馬代黃金十兩被
獻之外、遂披露外處、一段之御仕合外、恐々謹言、

〔寛延元年〕

八月四日

秋元但馬守

涼朝判

松平薩摩守殿

扣寫在文庫

蓮金院之事爲嶋津家宿坊、中納言家久代令興隆、寺領被
寄附畢、任先判之旨、今度少將宗信被遣證書之間、御祈
禱・先祖之日牌・寺内修造等無怠慢可被沙汰候、仍狀如
件、

寛延元年八月廿二日

平田掃部

正輔判

鎌田典膳

政昌判

嶋津矢柄

久富判

樺山主計

久初判

嶋津左衛門

久甫判

高野山

蓮金院

宗信襲封後、寛延元年八月二十七日諭國中^(卷本)之僧侶^(本)、一
道加^(通ノ誤カ)花押^(カ)令^(カ)寺社奉行領^(カ)之、同年十月十六日小林中太

兵衛政一・義岡左平太久中^(鹿兒島市)一々寫^(カ)書^(カ)之、每^(カ)一^(カ)道^(カ)以^(カ)三^(カ)副^(カ)

書^(カ)南泉院^(鹿兒島市)・福昌寺^(鹿兒島市)・大乘院^(鹿兒島市)・淨光明寺^(鹿兒島市)・大龍寺^(國分市)・彌勒院

〔全上〕

(志布志) 及寶滿寺(日向國)・神徳院(野田)・山内寺(國分市)・正興寺(志布志)・大慈寺(伊集院)・
(野田) 感應寺(鹿兒島市)・不斷光院(鹿兒島市)・正建寺(出水市)・幸善寺(鹿兒島市)・壽國寺(日向國)・本永寺(日向國)・
(給良) 遠壽寺(國分市)・願成寺(國分市)・正國寺各徵二府城二頒二與之二、

正文在寺社奉行所

(島津宗信)

(花押 No.1)

國中之僧侶・道學如法堅固可相勸旨

御先代以御書付、寺院江被

仰聞置候、至當代猶以不致忘却修學勤行、無亂宗門之法

式、道儀不衰樣可心掛旨、諸宗之門首江可申渡也、

寛延元年八月廿七日

(朱)
〔在包紙〕

御袖判

寺社奉行所江

宗信公御譜中

正文在飯限山蓮光院

薩摩・大隅・日州諸縣郡年行事職之儀、聖護院御門跡以

御許容被仰付、御書物拜戴之上者、大峯修行無怠慢、當

家之祈禱可抽誠精者也、仍狀如件、

宗信公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

三御所樣御機嫌被相伺之外、益御安全御儀外間可御心易外、隨而干鯨殘魚一箱被獻之外、各申談遂披露外處一段

之御仕合外、恐々謹言、

(朱)
「寛延元年」

九月六日

堀田相摸守

正亮判

松平薩摩守殿

全上

御札令披見外、

三御所樣御機嫌被相伺之外、益御勇健御儀外間、可御心易外、隨而干鯨殘魚一箱被獻之外、遂披露外處一段之御仕合外、恐々謹言、

(朱)
「寛延元年」

九月六日

秋元但馬守

涼朝判

松平薩摩守殿

291 全上

御札令披見外、

三御所様御機嫌被相伺之外、益御安全御儀外間可御心易
外、紙面之趣及言上外、恐々謹言、

〔寛延元年〕 九月六日 西尾隠岐守 忠尚判

松平薩摩守殿

292 全上

正文在琉球國國司

爲年首之佳儀被差渡使簡、殊別錄之表贈給之、入念外段
令祝着外、猶期後喜之時外、恐惶不宣、

〔寛延元年〕 九月六日 少將宗信御判

謹上 中山王

293 全上

〔島津吉賢〕

淨國院殿卒去付而、玉川按司・圓覺寺被差渡之、紙面之
趣入念儀外、爲謝禮如此外、恐惶不宣、

〔寛延元年〕 九月六日 少將宗信御判

謹上 中山王

294 全上

芳簡令披見外、

公方様就 御代替、以使者御祝儀申上外儀相伺外處、先
規之通被 仰出、難有被存之段紙面之趣江府江申上外、
恐惶不宣、

〔寛延元年〕 九月六日 少將宗信御判

謹上 中山王

295 全上

芳簡令披見外、去歲御鷹之鶴致拜領外爲祝儀、被差渡森
山親方、殊太刀一腰・馬代白銀百兩并目錄之通被相贈之、
入念外之段、令祝着外、恐惶不宣、

〔寛延元年〕 九月六日 少將宗信御判

謹上 中山王

296 全上

芳札令披見外、

去歲御看致拜領外爲祝儀、以森山親方太刀一腰・馬代白
銀百兩并別錄之表被相贈之、入念外之段欣然之至外、恐

謹上 中山王

銀百兩并別錄之表被相贈之、入念外之段欣然之至外、恐

惶不宣、

〔宋〕「寛延元年」 九月六日 少將宗信御判

謹上 中山王

297 全上

芳翰令披見外、

御代替爲御祝儀、具志川王子被差上外付外、太刀一腰・

馬代白銀百兩并別錄之通贈給之、欣然之至外、恐惶不宣、

〔宋〕「寛延元年」 九月六日 少將宗信御判

謹上 中山王

298 継豊公御譜中

正文在文庫

爲重陽之祝儀、小袖一重到來歡覺候、委曲松平右近將監

可述外也、

〔宋〕「寛延元年」 九月七日



松平大隅守殿

299 全上

爲重陽之御祝儀、以使者御小袖一重被獻之外、遂披露外處、一段之御仕合外、恐々謹言、

〔宋〕「寛延元年」 九月七日 秋元但馬守 涼朝判

松平大隅守殿

300 宗信公御譜中

正文在抱眞院

獻上

御刀 一腰主水首 正清

右奉寄進者也、仍狀如件、

寛延元辰九月七日 少將宗信御判

301 全上

正文在抱眞院

覺

御刀一腰主水首 正清 長一尺六寸七分

一御劍二重金

一御白鞘

一御袋今織房付緒

右今度

全上

爲重陽之御祝儀、以使者御小袖一重被獻之外、遂披露外之處一段之御仕合外、恐々謹言、

爲重陽之祝儀、小袖一重到來歡覺候、委曲松平右近將監可述外也、

(朱)

「寛延元年」

九月七日

家重公
墨印

薩摩少將殿

全上

正文在文庫

別當

抱眞院

寛延元年九月七日

嶋津矢柄

久富判

樺山主計

久初判

嶋津左衛門

久甫判

(朱) 「寛延元年」

九月七日

秋元但馬守

涼朝判

松平薩摩守殿

宗信公御譜中

扣正文在右筆所

一筆致啓上候、

三御所様益御機嫌能被成御座、恐悦奉存外、然者爲私參勤今日國元致發足、從琉球中山王差上外使者召連申外、

右之旨爲可申上呈飛札外、恐惶、

(朱)

「寛延元年」

九月九日

御本丸

酒井雅樂頭様

堀田相摸守様

本多伯耆守様

松平右近將監様

大御所様御方

西尾隠岐守様

大納言様右同

秋元但馬守様

人々

人々

人々

宗信公御譜中

嚮是

大樹家重公嗣職、因延享二年乙丑閏十二月四日嚴父繼豐循先躅、欲率琉球慶賀使來于東都上、雖然繼豐羅惹留滯于東都、是故嗣嫡宗信請代之而率琉使向來以辰年來于東都於執政酒井雅樂頭忠知上焉、蒙台許厥后宗信延享三年繼續家統、是故今夏中山王尚敬使下慶賀正使具志川王子及副使與那原親方先來于薩府上、今茲寬延元年戊辰九月九日宗信爲述職發薩城朝于東都、時率琉使正副及從者九十八人、且一門島津兵庫久門、番頭格入來院石見定勝、家老鎌田典膳政昌、側用人本田孫右衛門親房、近習役澁谷喜三左衛門貫通・二階堂林左衛門行通・福山平太夫安都等處從之監琉使、家老平田掃部正輔、用人有川幸右衛門貞利、近習役堀堀右衛門貞起等副之、同十一日著向田假館、同十四日琉使及琉人監官并諸有司到于薩西久見崎港駕船、

306 宗信公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

三御所樣益御機嫌能被成御座、恐悅旨尤候、將又今度年

號改元之儀被承之、玆重由得其意外、紙面之趣各申談及上聞候、恐謹言、

〔寛延元年〕 九月十五日 堀田相摸守 正亮判

松平薩摩守殿

307 宗信公御譜中

同年九月十五日宗信後于琉使而駕船、同十七日衆船出港、時北風烈吹不得航、宗信乘船亦同、故宗信上于陸止宿于久見崎、再出港航西海、

308 全上

正文在文庫

御札令披見外、

三御所樣益御機嫌能被成御座、恐悅旨尤外、將亦今度年號改元之儀被承之、玆重由得其意外、紙面之趣及言上候、恐謹言、

〔寛延元年〕 九月十五日 秋元但馬守 涼朝判

松平薩摩守殿

309 全上

311

全上

御札令披見外、

三御所様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、將又同氏大

松平薩摩守殿

(米) 一覽延元年

十月二日

松平右近將監
武元判

310

宗信公御譜中
正文在文庫

御札令披見外、

三御所様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、將又同氏大
隅守儀、以

松平薩摩守殿

(米) 一覽延元年

九月十五日

西尾隱岐守
忠尚判

御札令披見外、

三御所様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、將又今度年
號改元之儀被承之、玆重由得其意外、紙面之趣及言上外、
恐々謹言、

313

宗信公御譜中
正文在文庫

御札令披見外、

三御所様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、將又爲參勤
國許發足、從琉球中山王差上候使者被連之由、紙面之趣

松平薩摩守殿

(米) 一覽延元年

十月二日

秋元但馬守
涼朝判

312

全上

御札令披見外、

三御所様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、將又同氏大
隅守儀先頃御鷹之雲雀拜領之、難有由得其意外、依之爲
御禮被差越使者外、紙面之趣令承知外、恐々謹言、

松平薩摩守殿

(米) 一覽延元年

十月二日

西尾隱岐守
忠尚判

隅守儀、以

上使御鷹之雲雀拜領之、難有由得其意外、依之爲御禮被
差越使者外、紙面之趣令承知外、恐々謹言、

各一覽之事外、恐々謹言、

〔寛延元年〕十月六日

松平薩摩守殿

松平右近將監
武元判

314 全上

御札令披見外、

三御所様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、將又爲參勤
去月九日國許發足、從琉球中山王差上外使者被召連之由
得其意外、紙面之趣令承知外、恐々謹言、

〔寛延元年〕十月六日

松平薩摩守殿

秋元但馬守
涼朝判

315 全上

御札令披見外、

三御所様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤候、將又爲參勤
國許發足、從琉球中山王差上外使者被連之由、紙面之趣
令承知候、恐々謹言、

〔寛延元年〕十月六日

西尾隱岐守
忠尚判

松平薩摩守殿

316 緒豊公御譜中

正文在納戸方

御腰物一腰 延寿作

但御拵書在別紙

右

吉宗公御隱居以後延享二年十月十九日、以

上使加納遠江守様

繼豊公御拜領之、御納戸方被渡置之條、聊無緩疎可納

置者也、仍如件、

寛延元年十月十三日

嶋津矢柄
久富判

樺山主計
久初判

嶋津左衛門
久甫判

御納戸奉行

317

宗信公御譜中

正文在納戸方

御腰物一腰和州則長

但御拾遺石別紙

右

吉宗公御隱居以後延享二年十月十九日、以

上使加納遠江守様 宗信公御拜領之、御納戸方江被渡置

之條、聊無緩疎可納置者也、仍如件、

寛延元年十月十三日

鳴津矢柄

久富判

榊山主計

久初判

鳴津左衛門

久山判

御納戸奉行

318

宗信公御譜中

正文在南泉院

此度 御袖判を以被 仰出趣、別紙寫相渡外條謹而被奉

承知、配下中江及可被申聞外、面々法式之儀者、緩疎有

之間咽外得共、間々形躰迄之而、規則を取失、取名利

輩及有之由外、宗門開祖之遺戒を深切存

思召相叶、勤行不懈、道儀興隆外様連々可被致接得外、

以上、

寛延元年辰十月十六日

小林中太兵衛

政一判

義岡左平太

久中判

南泉院

319

継豊公御譜中

正文在文庫

重陽之 御内書可相渡外間、明日五半時 御城江家來可

被差出外、以上、

(朱) 「寛延元年」

十月廿日

松平右近將監

松平大隅守殿

320

宗信公御譜中

扣正文在右筆所

一筆致啓上候、今度琉球人其地江召連罷越、滞留中自然

居宅近所出火之節、琉球人爲退場、高輪・品川・大井三

ヶ所之屋鋪江遣外儀、且亦右三ヶ所江難遣節、愛宕下青

松寺江爲立退外様仕度旨申上外處、伺之通被仰渡、忝仕

合奉存外、此段爲可申上如斯御座候、恐惶、

(朱) 「寛延元年」

閏十月三日

松平右近將監様
人、

321 宗信公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

三御所様御機嫌被相伺之外、益御安全御儀外間、可御心
易外、隨而小熬海鼠一箱被獻外、各申談遂披露外處一段
之御仕合外、恐々謹言、

(卷) 十一月六日

本多伯耆守
正珍判

松平薩摩守殿

322 全上

御札令披見外、

三御所様御機嫌被相伺之外、益御勇健御儀外間、可御心
易外、隨而熬海鼠一箱被獻之外、遂披露外處一段之御仕
合外、恐々謹言、

(卷) 十一月六日

秋元但馬守
涼朝判

松平薩摩守殿

323 全上

御札令披見外、

三御所様御機嫌被相伺之外、益御安全御儀外間、可御心
易外、紙面之趣及言上候、恐々謹言、

(卷) 十一月六日

西尾隱岐守
忠尚判

松平薩摩守殿

324 全御譜中

至三同年十一月八日、著三船于播州坂越、

325 正文在文庫

御札令披見外、

三御所様益御機嫌能被成御座、恐悦旨无外、將又琉球中
山王使者召連、長州赤間關迄着船之由得其意候、紙面趣
各一覽之事外、恐々謹言、

(卷) 十一月九日

本多伯耆守
正珍判

松平薩摩守殿

326 全上

御札令披見外、

三御所様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤^レ、將又琉球中山王使者召連、長州赤間關迄着船之由得其意^レ、紙面之趣令承知^レ、恐^レ謹言、

〔寛延元年〕十一月九日

秋元但馬守 涼朝判 松平薩摩守殿

327 全上

御札令披見^レ、

三御所様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤^レ、將又琉球中山王使者召連、長州赤間關迄着船之由得其意候、紙面之趣令承知^レ、恐^レ謹言、

〔寛延元年〕十一月九日

西尾隲岐守 忠尚判 松平薩摩守殿

328 全上

御札令披見^レ、

公方様益御機嫌能被成御座、十月廿四日、東叡山〔家重侍、大久保氏〕深徳院様御靈前 御參詣之儀被承之、恐悦旨尤^レ、紙面之趣各申談及

上聞候、恐^レ謹言、

〔寛延元年〕十一月九日

本多伯耆守 正珍判 松平薩摩守殿

329 宗信公御譜中

同年十一月十四日自^二坂越^一執^二陸路^一到^二尼ヶ崎^一、駕^二船^一與^二琉使船^一相會著^二于大坂港^一、是故兼日奉^二台命^一、龜井隲岐守茲胤・松平周防守康福・松浦肥前守誠信自^二港出^一河船三艘、^二迎^レ流接^二待琉使^一、且賜^二小艇四十艘^一、^{〔享保三年賜^二三十五艘^一、今般依^レ、蒲田^二加五艘^一、委^二見^二于後^一〕}運^二輸琉使之旅具^一、琉使之船從^二宗信乘船之後^一、戲下諸有司亦掉^二小艇^一、各出^レ令警^二衛琉使之船^一指^二揮之^一、其法尤嚴也、且見^レ除^二涉^一河之大小船^一總如^二先規^一矣、宗信著^二大坂假館^一、休止三日

琉使及琉人乘船先^二于宗信^一、同十四日船入^二大坂港^一從^二先駕^一、止宿于島津加賀守忠雅假館、

○同年十一月十八日宗信率^二琉使及從者^一、發^二大坂假館^一、

迎^二河流^一、其夜泊^二牧方^一、^{〔夜〕}翌十九日著^二城州伏見假館^一、

茲日侯伯諸有司出^二諸船^一迎^レ流、施^レ令警^二衛琉使船^一同^二于前條^一、宗信休^二止假館^一二日、

330 宗信公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

三御所様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、將又琉球中

山王使者召連、去十四日大坂着船外由得其意外、紙面趣

各一覽之事外、恐々謹言、

(朱)

「寛延九年」十一月廿一日

松平右近將監

武元判

松平薩摩守殿

331

全上

御札令披見外、

三御所様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、將又琉球中

山王使者召連、去十四日大坂着船外由得其意外、紙面之

趣令承知外、恐々謹言、

(朱)

「寛延元年」十一月廿一日

秋元但馬守

涼朝判

松平薩摩守殿

332

全上

御札令披見外、

三御所様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、將又琉球中

山王使者召連、去十四日大坂着船外由得其意外、紙面之

趣令承知候、恐々謹言、

(朱)

「寛延元年」十一月廿一日

西尾隠岐守

忠尚判

松平薩摩守殿

333

宗信公御譜中

同年十一月二十二日率三琉使出三伏見假館、經三歷江州

濃州東海驛路、是故賜三傳馬百匹・擔夫六百二十四員、

享保三年賜二百五十員、然今殿所レ獻三三御所、品物多可出故譜而増二加百七十四員一、

宗信公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

三御所様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、隨る蜜柑二箱・炙鮎一箱被獻之外、各申談遂披露外處一段之御仕合外、恐々謹言、

(采) 「寛延元年」 十二月二日

松平薩摩守殿

堀田相摸守

正亮判

(表紙)

繼 豐 公

自寛延元年十二月
至同 二年 六月

宗 信 公

追 舊 記 雜 録 卷九十八

御札令披見外、

三御所様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、隨る蜜柑二箱・炙鮎一箱被獻之外、遂披露外之處一段之御仕合外、恐々謹言、

(采) 「寛延元年」 十二月二日

松平薩摩守殿

秋元但馬守
涼朝判

繼豐公御譜中

正文在文庫

今朝錫一箱被獻之外、遂披露候處一段之御仕合外、恐々謹言、

(采) 「寛延元年」 十二月四日

正亮判

松平大隅守殿

正亮

(采) 「在右裏」
堀田相摸守

全上

今朝錫一箱被獻之外、遂披露外處一段之御仕合外、恐々謹言、

(采) 「寛延元年」 十二月四日

忠尚判

松平大隅守殿

忠尚

〔在右裏〕
西尾隱岐守

全上

今朝鯛一箱被獻之、遂披露_ハ處一段之御仕合_ハ、恐_ク謹言、

〔朱〕
「寛延元年」
十二月四日
涼朝判

松平大隅守殿

涼朝

〔朱〕
〔在裏〕
秋元但馬守

宗信公御譜中

正文在文庫

御札令披見_ハ、就寒中

三御所様御機嫌以使者被相伺之、益御安全御儀_ハ間可御心易_ハ、隨_テ琉球袖十端并饜節一箱被獻之、各申談

遂披露_ハ處一段之御仕合_ハ、恐_ク謹言、

〔朱〕
「寛延元年」
十二月四日
堀田相摸守
正亮判

松平薩摩守殿

御札令披見_ハ、就寒中

三御所様御機嫌以使者被相伺之、益御勇健御儀_ハ間可御心易_ハ、隨_テ琉球袖十端并饜節一箱被獻之、遂披露_ハ處一段之御仕合_ハ、恐_ク謹言、

〔朱〕
「寛延元年」
十二月四日
秋元但馬守
涼朝判

松平薩摩守殿

全上

御札令披見_ハ、就寒中

三御所様御機嫌以使者被相伺之、益御安全御儀_ハ間可御心易_ハ、隨_テ琉球袖十端并饜節一箱被獻之、遂披露_ハ處一段之御仕合_ハ、恐_ク謹言、

〔朱〕
「寛延元年」
十二月四日
西尾隱岐守
忠尚判

松平薩摩守殿

全上

御札令披見_ハ、

三御所様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤_ハ、將又琉球中山王使者召連、去月廿九日三州岡崎驛迄被相越_ハ之由得其意_ハ、紙面趣令承知_ハ、恐_ク謹言、

〔寛延元年〕 十二月五日

松平薩摩守殿

秋元但馬守
涼朝判

全上

御札令披見外、

三御所様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、將又琉球中

山王使者、去月廿九日參州岡崎驛迄被召連外由得其意外、

紙面之趣令承知外、恐々謹言、

〔朱〕
「寛延元年」 十二月五日

松平薩摩守殿

西尾隱岐守
忠尚判

全上

御札令披見外、

三御所様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、將又琉球中

山王使者召連、去月廿九日三州岡崎驛迄被相越外由得其

意外、紙面之趣各一覽之事外、恐々謹言、

〔朱〕
「寛延元年」 十二月七日

松平薩摩守殿

松平右近將監
武元判

同年十二月七日、以^二上使櫻井監物^一、賜^二御鷹所^一捉之
鶴於繼豐、在^レ病故、水野肥前守忠見代^二繼豐^一、到^二執政
各第一禮謝焉、

同年十二月十一日、奉^二琉使及從者^一著^二于東都芝邸^一、
宗信即日及^レ晚直詣^二執政堀田相摸守正亮之第^一、奉^レ窺^二
將軍家之安否^一、是非爲^二後例^一也、厥后詣^二

吉宗公之執政西尾隱岐守忠直、
家治公之執政秋元但馬守涼朝之第一、奉^レ窺^二安否^一、

○同月十二日 上使執政本多伯耆守正珍來^二于芝邸^一、勞^二
遠來^一、乃詣^二執政各之第一、奉^レ申^二謝之^一、且茲日宗信
應^二執政之教諭^一、登^レ營、於^二黑書院^一拜^二謁^一
家重公、奉^レ申^二謝述職^一、因獻^二上御太刀一腰・白銀五
十枚・白縮緬二十卷・御馬二匹^一、
公、御太刀一腰・白銀五十枚于^二

吉宗公、御太刀一腰・白銀五十枚・御馬一匹于^二
家治公、且獻^二進一門島津兵庫久門、御太刀一腰・御
馬代白銀一枚・紗綾五卷于^二
家重公、御太刀一腰・御馬代白銀一枚于^二

全上

扣正文在右筆所

(卷)

「折紙中奉書寸尺此通り、長九寸五部、横貳寸八部 貳枚」

折紙寸尺此通調、大白付へ被差遣外、長九寸五部、横貳寸八部

薩摩國一圓 本國薩摩

大隅守嫡子

高六拾萬五千石餘

大隅國一圓

從四位上 中將松平薩摩守

日向國之内

生國武藏

居城薩州鹿兒島

外拾貳萬三千七百石

琉球國

辰二十二

家治公上時久内有意、不得等、然捧獻物拜謝、家老鎌田典膳政昌獻下進御太刀

一腰・御馬代白銀一枚・紗綾二卷于

家重公、御太刀一腰・御馬代白銀一枚于

家治公、奉拜調 台顔、稻葉丹後守正由奏達之、

是因先規也、畢而下營、

○同年十二月十三日、應執政之奉書、宗信登

營、於白書院緣類、執政各聯坐、就中堀田相摸守正

亮降台命、敍仔從四位上中將、乃奉禮謝之、

且登西城、就奏者水井信濃守直良、奉申謝之、

直詣執政及若年寄各位之第一、奉申謝之、

○同年十二月十三日、大目附河野豐前守通喬爲上使

松平薩摩守殿

來芝第一、貳廩米二千俵、是因率琉使來于江都之先觸也、乃詣執政各之第一、奉申謝之、

347 正文在文庫

御用之儀外間、明日四時可有登

城外、以上、

(卷) 十二月十二日

松平右近將監(武元)

本多伯耆守(正參)

堀田相摸守(正參)

酒井雅樂頭(忠恭)

(01)

〔享保十四酉年、次第見合として左之通、今十六日御官位被

仰出外付、兩御丸明細帳相直外間、書改貳枚可差出旨、大御

目附上田周防守様〔義隆〕堀方右衛門〔貞敏〕江被仰聞外由にて、相調可申

旨、中務殿被仰付外付、少將御任官之節書出外、紙之寸尺

まで、其通ニ十二月十六日差出外と有之、

一寛延二年巳正月十六日、大目附分限帳改方能勢〔頼忠〕因權守様〔方孝〕御

留守居岩下佐次右衛門持參、旧臘十三日、御官位御昇進ニ

外故、御年付辰年ニいたし外、旧臘被差出答外得共、此方御

取込之時節故、年明被差出外事、

(02)

〔朱〕
一覺

御明細書二通

但旧臘御官位ニ付

大目附能勢因權守様
御用人 人見軍記

右へ持參仕差出外處、御城ニ被成御座外間、御退出之節可申

上由、右書付請取置申外、私相勤申外首尾申上外、以上、

正月十二日 岩下佐次右衛門

〔朱〕
一寫正文在右筆所

去年御暇之節被差出外當分養子願書、致返進外、以上、

〔朱〕
一寛延元年

十二月十二日

堀田相摸守

松平薩摩守様

350
〔朱〕
一全上

扣正文在右筆所

去年御暇被下、歸國仕外節差上置外當分養子願書、被返

下之、請取申外、恐惶、

〔朱〕
一寛延元年

十二月十二日

堀田相摸守様

脇付なし

351
〔朱〕
一全上

正文在文庫

上卿轉法輪大納言

寛延元年十二月十三日 宣旨

從四位下源宗信朝臣

宜敍從四位上

藏人左少辨藤原說道奉

〔朱〕
一作口裏
一宣案

352
〔朱〕
一全上

正文在文庫

從四位下源朝臣宗信

右可從四位上

中務、表節兵欄、宣勤羽衛、精誠無懈、夙夜在公、宜申

榮級、用旌寵章、可依前件、主者施行、

寬延元年十二月十三日

二品行中務卿職仁親王宣

正四位下行中務大輔臣安倍朝臣泰孝奉

從四位下行中務少輔臣藤原朝臣國榮行

正二位行權大納言兼右近衛大將臣(大炊御門經秀)

正二位行權大納言臣(三實顯)

正二位行權大納言臣(兼潔)

正二位行權大納言臣(中榮親)

正二位行權大納言臣(九榮親)

正二位行權大納言兼左近衛大將臣(尚實)

從二位行權大納言臣(方里小路種房)

從二位行權大納言臣(清閑寺秀定)

從二位行權大納言臣(柳光綱)

從二位行權大納言兼皇太后宮大夫臣(松宗長)

從二位行權中納言臣(飛鳥雅香)

從二位行權中納言兼太宰權帥臣(兼胤)

正三位行權中納言兼皇太后宮權大夫臣(庭重熙)

正三位行權中納言臣(日規長)

正三位行權中納言臣(鄭規長)

正三位行權中納言兼左兵衛督臣(勅修寺顯道)

正三位行權中納言臣(正三積)

正三位行權中納言兼左衛門督臣(中通枝)

權中納言從三位兼行左近衛權中將臣

權中納言從三位臣賴要等言

制書如右、請奉

制、附外施行、謹言、

寬延元年十二月十三日(宋イ)

制可

月日辰時從五位下行大外記兼掃部頭造酒正

中原朝臣師充

右中辨益房

太政大臣從一位朝臣

攝政從一位朝臣

左大臣闕

右大臣正二位朝臣

内大臣正二位朝臣

二品行兵部卿貞建親王

兵部權大輔正五位下季豐

正四位上行右大辨俊逸

告從四位上源朝臣宗信奉

制書如右、符到奉行、

從五位上行兵部少輔兼皇太后宮少進泰兄



大錄

少錄

少錄

寛延元年十二月十三日

353

〔正文在文庫〕

上卿 大炊御門右大將

寛延元年十二月十三日 宣旨

左近衛權少將源宗信朝臣

宣轉任左近衛權中將

藏人左中辨藤原資興奉

〔在口裏〕

宣案

354

〔全上〕

〔正文在文庫〕

左近衛權少將源朝臣宗信

正二位行權大納言兼右近衛大將藤原朝臣經秀宣、奉

敕、件人宣令轉任左近衛中將者、

寛延元年十二月十三日大外記兼掃部頭造酒正中原朝臣

師充奉

355

〔正文在文庫〕

松平薩摩守

左中將

上卿

大炊御門右大將

同

職事

日野西左中辨

從四位上

上卿

轉法輪大納言

同

職事

万里小路左少辨

正文在文庫」

猶以直垂可有着用外、

御本丸相濟西丸江及召連可被罷出外、以上、

明十五日四時、中山王使者召連、可有登 城外、以上、

〔寛延元年〕 十二月十四日

松平右近將監

本多伯耆守

堀田相摸守

酒井雅樂頭

松平薩摩守殿

○同年十二月十五日應_二執政之奉書_一、宗信著_二直垂_一繁藤冠 冠付士

著布衣、先_二琉使具志川王子_一登_レ營、王子亦同登_レ營、

平田掃部正輔其外近習役・留守居等屬_二從于宗信_一登_レ營、

營、宗信奉_レ拜_二謁

家重公、鳥居伊賀守忠胤奏_二達之_一、此時率_二今度琉球

使者_一、遠路大儀蒙_二尊言_一、執政松平右近將監武元

挨_二移之_一、則退席、且具志川捧_二備中山王之獻物多品_一、

勤_二使職_一、奉_レ禮_二拜 台顏_一、稻葉正由奏_二達之_一、

正文在文庫」

猶以直垂可有着用外、 御本丸相濟、西丸江及召連

可被罷出外、以上、

明十八日、琉球人音樂被 仰付之、且亦御暇可被下外條、

四時召連可有登 城外、以上、

〔寛延元年〕

十二月十七日

松平右近將監

本多伯耆守

堀田相摸守

松平薩摩守殿

酒井雅樂頭

359 (宋) 一全御譜中

同年同月十八日、宗信應執政之奉書、著直垂、携具志川及樂童子數輩登營、於大廣間、樂童子奏音樂、奉備將軍家

家治公之台覽、畢而執政松平右近將監武元・西尾隱岐守忠直・秋元但馬守涼朝、若年寄堀田加賀守正陳・小堀和泉守政峯・三浦志摩守義次・戸田淡路守氏房席順聯坐、此時松平武元進

將軍家之膝前、召具志川、賜歸國之告、蒙懇命、且至中山王及具志川、副使與那原・樂童子・從者而各賜數品有差、宗信乃憑武元奉禮謝之、出營、且宗信率疏使、登西城、執政西尾忠直・秋元

涼朝出席見傳、台命於宗信、賜中山王及疏使以下數品各有差、奉申謝之退出
此度疏使大抵因正徳之先例也、雖然、不賜樂品、宗信於營中帝座間、賜二吸物・菓子・尊酒、執政各出席而接待、疏使亦於二殿下間下段、賜二吸物・菓子・尊酒、執政各出席而

360 (宋) 一扣正文在家老座

接待、從者於二御之間、賜二菓子・吸物、尊酒、家臣若於二殿下間、賜二菓子・

一十二月十五日中山王使者登

城之道筋、芝御屋敷より増上寺表門前、夫より通り町に出、芝口橋より御堀端通り幸橋御門に入、櫻田御屋敷に立寄、夫より松平丹後守様御屋鋪脇、松平大膳大夫様御屋鋪脇前通、日比谷御門、やよふす河岸、辰之口、三浦志摩守様御屋鋪前、大手御門登城、但往來道樂いたし外、

一芝御屋敷より大手迄、所々に御徒目付衆・御徒衆、町内者町與力・同心警固、御大名方御屋敷前者士并足輕被差出之外、但御徒目付・御徒衆・與力熨斗目、

一中山王并使者献上物、登城前日御城に差出置外、一太守様御直垂御着用、使者方先達外御登城、殿上之間御下段、從使者御座上御着座、

一具志川王子御玄喚階之上迄至時、大御目付河野豊前守様・能勢因幡守様御出迎御案内、殿上之間御下段に着座、副使者同所次之間座上大廣間之方に向着座、從者

老同所御下段之方（貞起）向三行列居、下官之輩ハ御玄喚前庭上ニ群居、

但正使ハ屋轎ニ乗、副使ハ乗物、從者老騎馬、大手橋之先ニ下馬、正使ハ下乗橋詰ニ屋輜（久經）方下乗、

副使者下乘外百人組張番所前にて致下乗、正使ハ相續罷登り外、大手腰掛ニ老薄縁を被敷、旗鋒持等其外役人并此御方方被相付外面ニ下馬、残り人數一所ニ被差置外、

一具志川王子御玄喚迄涼傘を指せ、牌を持せ、跟伴等不殘御玄喚前（長志）に罷通外、腰掛ニ薄縁を被敷被差置外、具志川衣類及御玄喚前迄爲持候、

一輦ハ下乗橋と御番所之間ニ被差置外、副使乗物老御番所東之脇差置候、

一平田掃部布衣着用、先達外（正懸）

御城に罷登、御奏者番衆・大御目付衆に得御差圖、使者參掛外節、御玄關に迎致差引、御用人相良彌（長志）一兵衛、御留守居布衣着用ニ相付居外、

一中山王書翰、河野豊前守様・能勢因幡守様殿上之間次ハ御出合、掌翰史より豊前守様御受取り節、具志川揖外、

一琉球人（貞起）に被相付外伊勢兵部・島津右平太其外御役々布衣着用、琉人に相添殿上之間御敷居際御板縁に罷居外、

一御太刀持・御刀持布衣着用、殿上之間御板縁ニ罷上り外、

一出御前、豊前守様・因幡守様具志川王子御案内、御禮席爲御見、御差圖被成外、其時通詞貳人、掃部相付申外、左外、松之間御板縁に具志川并通詞貳人、掃部被差置外、

一大廣間 出御御直垂、

一太守様御次御襖之外際南之方（貞起）に御向御着座、

一具志川王子殿上之間より大廣間に大御目付豊前守様・因幡守様御案内、二之間諸大夫御譜代御大名之前西之方（貞起）に向着座、

一太守様御下段御敷居之内ニ有

御目見、御奏者牧野（明成）因幡守様御披露、御中段迄被召之、今度琉球之使者遠路召連太儀ニ被 思召外段上意有之、御老中松平右近將監様御取合有之、御次ニ

御退座、于時右近將監様より具志川 御前に可差出之旨 御説之由 太守様に被仰達、其段具志川に被仰聞御請申上、其趣右近將監様に 太守様方被仰達外、

但具志川御禮之内者 太守様御禮之外ニ御扣、

一 中山王献上物并具志川自分献上物、 出御以前より南

之板縁東西より 御目通ニ順々並置、献上之御馬ハ御

禮當日牽せ之、諏訪部文右衛門様御支配御馬乘貳人被

受取之、具志川御禮之節庭上ニ牽出、文右衛門様御差

添、

但献上之御馬者琉人相付、口付も琉人ニ有、此御方

御馬方并御馬乗相添、使者方先達有罷登り、中御

門外腰掛前ニ有被請取之外、文右衛門様素袍、口

付白張着、

一 中山王献上之御太刀目錄、御奏者稻葉丹後守様御持出、

御中段方二疊目ニ被差置、中山王と御披露、具志川御

下段より四疊目ニ有奉九拜、退去仕外、

一 右近將監様御次ニ御出、具志川儀遠境太儀被 思召旨

上意之段

太守様被仰達、其段具志川被仰聞外、

一 具志川重有出席、自分之御禮於御板縁奉三拜、御奏者

井上遠江守様御披露、終有退去、大御目付豊前守様・

因幡守様御案内有、殿上之間御下段に同列ニ着座、

太守様殿上之間最前之席に御退去、

一 掃部布衣着用、於御板縁奉拜

台顔、御太刀・銀馬代・御卷物二献上、御奏者鳥居伊

賀守様御披露、

一 右終有酒井雅樂頭様・堀田相摸守様・本多伯耆守様・

松平右近將監様殿上之間に御越、具志川に御向御會釋

有之御引入、其後大御目付豊前守様・因幡守様御差圖

ニ有具志川退出、右御兩人御玄喚階之上迄御送、

一 太守様具志川より先達有 御退出、直ニ 西御丸に

御登 城、

但前以御差圖有之、御本丸ニ有長御袴ニ御召替、御

供廻りハ支度替ニ不及、琉人 御本丸御禮相濟、

内櫻田御門より 御既前通 西御丸大手より登

城、

一 太守様 御本丸より直 西御丸に御登 城、殿上之間

下段座上ニ御着座、

一 具志川御玄喚階之上ニ到時、大御目付河野豊前守様・

能勢因幡守様御出迎御案内、殿上之間下段ニ着座、副

使者同所次之間座上ニ着座、從者同所御下段之方ニ

向三行列居、下官之族者御玄喚前庭上ニ群居、

但具志川 御本丸下乗ニ有屋轎ニ乗、副使者乗物、

從者者内櫻田御門外より騎馬ニ有、正使下乘橋際

ニ有下輜、副使者大手御門外腰掛二本目柱通ニ有

下乘、從者ニ有 西御丸大手ニ有下馬、正使に相

付罷登り、旗針持等其外役人并此御方被相付り

面々、一所ニ下馬并御玄關前に被差置り、

一 具志川御玄關迄涼傘指せ、牌を持せ、跟伴不殘衣類持

去御玄關前に罷通り、

一 平田掃部(正輔)、御用人相良彌一兵衛、御留守居 御本丸よ

り琉人先達有罷登、諸事致差引り、

一 中山王書翰、大御目付豊前守様・因幡守様御受取被成

り次第 御本丸同前、

一 伊勢兵部・嶋津右平太其外相付り役々布衣着用ニ有

御本丸之通、殿上之間御敷居際御板縁に罷居り、

一 大廣間 出御前 太守様御次御襖之外際ニ御向御着

座、

一 具志川殿上之間より大廣間は、大御目付豊前守様・因

幡守様御案内ニ有、二之間譯大夫・御普代大名前、西

ニ向着座、

一 御太刀持・御刀持

御本丸同前罷上り、殿上之間御板

縁に罷居り、

一 具志川并副使に御禮席爲御見候事、御奏者番御取計

御本丸同斷、

一 太守様御下段御敷居之内ニ有

御目見、御奏者番松平豊後守様御披露、御下段上より

四疊目迄被 召出之、今度琉球之使者遠路召連太儀被

思召り段 上意有之、御老中松平右近將監様御取合有

之、御次ニ

御退座、于時右近將監様を具志川

御前に可被差出旨 御詔之段、御次にて 太守様は被

仰達、其段具志川に被仰聞り、

但 具志川御禮内 太守様御襖之外ニ御打、

一 中山王より所獻之品々

出御前より南之板縁東西より

御目通順々ニ被並置、具志川自分之獻上物及同事被並

置之、

但 獻上之御馬者、諏訪部三之助様御支配之御馬飛貳

人ニ有被受取之、具志川御禮之節、庭上ニ牽出之、

一 獻上之御太刀目録、御奏者番青山因幡守様御持出、御

下段之上より三疊目被備之、中山王と御披露、具志川

出席、御下段下より二疊目ニ奉九拜退去、

一 右近將監様より、具志川儀遠路相越太儀被 思召旨

上意之段、於御次

太守様ハ被仰達、其段具志川ハ被仰聞、御請申上、其

趣右近將監様ハ

太守様より被仰達ハ、

一 具志川重ハ出席、自分之御禮於御板縁奉三拜、御奏者

番大岡越前守様御披露、終ハ退座、豊前守様・因幡守

様御案内、殿上之間ハ同列下段ニ着座、

太守様ハ殿上之間ハ御退座、

一 掃部布衣着用、於御板縁奉拜

台顔、御太刀目録御奏者番内藤大和守様御披露相濟、

退去、

一 大御所様ハ中山王并使者方献上之次第

一 中山王より所獻之品々、先達ハ大廣間二之間板縁、西

之方より東ハ被並置之、具志川自分之献上物者、同所

三之間板縁東ハ退ハ被置之、

出 献上之御馬、諏訪部八十郎様御支配之御馬米貳人

被受取之、具志川御禮之節庭上ニ牽出之、八十郎

様御差添、

一 具志川殿上之間より大廣間ハ大御目付豊前守様・因幡

守様御案内、

太守様ハ相^(忠)、具志川大廣間二之間敷居之内南之方二

疊目到^(忠)、御老中西尾隠岐守様ハ向三拜、于時御太刀

目録御奏者番太田攝津守様御持出、同所南中之柱際ニ

ハ中山王と御披露、御太刀目録下ニ不置、畢ハ具志川

杉戸之外ハ退、

一 具志川重ハ出席、自分之御禮三之間上之敷居方二疊目

下南之方ニ三拜、御奏者番酒井山城守様南柱際ニハ

御披露、畢ハ殿上之間ハ退座、

一 殿上之間ハ西尾隠岐守様・秋元但馬守様御越、具志川

ハ御會釋有之、則御退座、其後豊前守様・因幡守様御

差圖ニハ具志川退出、右御兩人御玄喚階之上迄御送、

從者者先達ハ退出、

一 太守様疏人より先達ハ 御退出、御老中様方ハ御廻勤、

一 明十八日、琉球人音楽被仰付、且又御暇可被下ハ條、

四時召連可有登 城外、尤直垂可爲着用ハ、 御本丸

相濟

西御丸ハ及可被召連旨、前日御老中様御連名之以御奉

書被仰渡ハ、

一同十八日琉球人登 城之節御取扱、十五日同斷、

伊道筋同斷、

一琉球人老芝御屋敷、十八日曉櫻田御屋敷に被遣置、時刻見合登 城、退出之節表道筋同斷、

一太守様御直垂御着用、先達を御登 城、十五日之通殿上之間に御着座、

一掃部・御用人相良彌一兵衛・御留守居布衣着用、先達を 御城に罷登り、諸事十五日之通、

一當日琉球人に被相付り御家老を初御役々布衣着用、十五日之通相詰り、

一御太刀・御刀持布衣着用、十五日之通相詰、

一樂器入り櫃、中之口より坊主衆持之、柳之間に被相通之り、

一具志川王子御玄喚迄參掛り節、豊前守様・因幡守様御出迎十五日之通、其外同斷、

一柳之間御屏風構にあり、上之間に副使・樂正・樂師・樂童子被召通、樂器をしらへり付、手傳り御家老・御用人・御留守居及被差通り、火鉢并手水之湯被仰付り、

樂器御中門之廊下に寄置り節、手傳り右御役々及、御廊下に罷通り、

一出御以前より 太守様大廣間御下段上より五疊目東之

方に 御着座、具志川老御縁御敷居之際東之方に抵候、

副使・樂人老御板縁列居、

一出御前、豊前守様・因幡守様御案内にあり、御中門之廊

下に具志川・樂人等又老御家老其外御役々被差置り、左のり、正使・副使・通詞・樂人等、大廣間に豊前守

様・因幡守様御案内、御奏者番衆御出會、琉球人着座之席御見せ被成り 太守様及其席に被成御座、掃部儀及被召連り、

一具志川御板縁東之方に着座、副使ハ西之方、具志川と筋向より少下に着座、樂正老東之方樂師之脇着座、

但副使着座之事、享保之節亦

太守様より御直に於 御城、仙石丹波守様に被仰

達着座致候、此節老成年勤務之次第前以書出り付、分の副使着座之事伺に不及、

一樂師樂器を持出、御縁に並置之退去、續り樂童子樂器之前列居、其後樂師列居、樂正老具志川より下に抵り、

一大廣間

公方様

大納言様 出御、御簾被卷置、具志川其外一同に平伏、

御奏者番御板絃ニ御詰、樂正ニ被向、樂可初旨御美圖有之、音樂畢而疏人殿上之間に退去、終る

太守様 御着座より直ニ御述(マツ)ニ出、御禮被仰上(マツ)處ニ、

御老中右近將監様御取合有之、御次ニ御退去、溜詰御普代御大名衆御退出後、殿上之間に

太守様御退去、

但 音樂、金城之曲且 御望有之、不得者、 台命之曲

等奏ル事、不得共、享保之節、右兩樂之目錄前以被

差出之、 御望之不及沙汰、金城之曲奏シ、終る

台命之曲奏、付、此節前以樂目錄被差出、付節、

台命者御望無之、不得者、奏ルニ不及哉之旨御尋有

之、不得共、右之段申出、金城・台命共ニ續、奏、付

事、

一入御之後、大廣間二之間御老中様御列座、

太守様二之間南之方に御着座、其後具志川を豊前守様・

因幡守様御案内ニ、殿上之間、具志川大廣間三之間

御敷居際西に向着座、御老中様に御禮申上、御老中

様、御會釋有之、具志川御敷居之内に出席之節

太守様二之間中央迄御出席、此時御代替ニ付遠路使者

差上

御喜悅被 思召、中山王に白銀・綿被遣之由 上意之趣、右近將監様御傳達 太守様御禮、具志川及御禮

仕、

白銀五百枚

綿五百把

中山王

右被遣物、最前より大廣間御下段被並置之、御襖障子

明置之、具志川に爲御見被成、豊前守様・因幡守様御

差圖有之、四之間に具志川退去、

白銀貳百枚

御時服十

具志川王子に

右西之御縁より御進物番衆御持出、大廣間三之間上よ

り一疊隔中通り東之方に被並置之、豊前守様・因幡守

様御案内ニ、具志川二之間中央迄出席、于時白銀・

御時服被下旨、右近將監様被仰達、一禮仕三之間に

退座、簪拜戴之、畢、豊前守様・因幡守様御差圖ニ、

四之間に退座、被下物御車寄之方に御進物番衆被引之、

白銀三百枚

從者惣中

御時服三宛

樂人共

御時服者席に不出、

右白銀西之御縁より御進物番衆御持出、三之間東之方

御敷居際被置之、此時具志川二之間中央迄出座、白銀從者惣中被下之、且今日樂相勤付、樂人に御時服被下旨、具志川は右近將監様より被仰達、具志川御禮終る四之間に退座、白銀之臺御車寄之方に被引之、具

志川殿上之間に退去、豊前守様・因幡守様御案内、

太守様より御老中様に御一禮被遊、殿上之間に御退去、

御下段御着座、其下に具志川着座、通詞並掌翰史御上

段之方に向、衝立際祇候、鎌田典膳(政司)・掃部、通詞之脇

に罷在外、大御目附衆御兩人御目錄を御持出、具志川

に御渡被成、具志川受取之、掌翰史持下ル、引次中

山王に御返翰、右御兩人様方具志川に御渡、掌翰史罷

出請取之、次之間相下、退出之節衣服紗に包、肩に懸

付、

御城に被差出外御家來名書、前以右近將監様に書

出被置、其通十五日登城外得共、十八日老最前

名書不被差出人を、繰替被差出外得共、御留守居

に吟味申付外上、御届不及外、

一 太守様帝鑑之間に御菓子・御吸物・御酒御給り、御

老中様方御出御挨拶有之、

一 具志川王子に殿上之間下段に、御菓子・御吸物・御

酒被下之、御老中様方御出御挨拶有之、

但 兩番之内御宮仕、

一 從者に柳之間に御菓子・御吸物・御酒被下之、

但 黒くわ宮仕、

一 登城之御家老・御用人・御近習役・御留守居・御刀

番に老、蘇鐵之間に御菓子・御吸物・御酒被下之、

但 宮仕黒くわ、

一 御玄關腰掛并於下馬腰掛、下官に強飯被下之、

一 右相濟具志川、豊前守様・因幡守様御案内に退出、

副使・從者續る退出、十五日同斷、

一 拜領物者御玄關迄御徒衆被持運、御留守居付受取之、

一 太守様具志川より先達る御退出被遊 西之御丸に御

上り、御支度長御袴、

一 具志川於御本丸御殿相濟、西之御丸に登城、道

筋十五日同斷、

一 具志川王子御玄關階之上に到時、豊前守様・因幡守様

御出迎御案内、殿上之間下段に着座、從者同前次之間

に列居、下官之族者御玄關前庭上に群居、

一 太守様御本丸方琉人方先達る御下り、殿上之間御座

上に御着座、

但長御袴ニ御支度替、御供廻者御登、城之節之通ニ

布衣・素袍着、右之段者前以右近將監様ヲ御差

圖有之、

一大廣間二之間(念)西尾隱岐守様・秋元但馬守様・松平右

近將監様・堀田加賀守様・小堀和泉守様・三浦志摩守(武元)
(正應)
(政崇)
(義次)

様・戸田淡路守様北之方御襖障子際ニ付、東之方(氏房)ニ順

々ニ御列座、于時、太守様御先達右之席(原)ニ南之方(源)ニ御

着座、其後豐前守様・因幡守様御案内ニ(原)、殿上之間

ニ具志川大廣間三之間御敷居際西ニ向着座、對御老中

様御禮仕(原)節御會釋有之、具志川御敷居内ニ出座之節、

太守様(原)ニ隨(原)ひ二之間中央迄罷出、此時

御代替付遠路使者指上、御喜悅被

思召(原)外、中山王(原)ニ白銀・御時服被遣之由、

大御所様

大納言様 上意之趣、隱岐守様・但馬守様より御傳達、

太守様御一禮被遊、具志川(原)ニ御禮仕、

大御所様(原)

白銀三百枚

御時服二十

大納言様(原)

同斷 同人(原)ニ

右被遣物、最前(原)大廣間御下段ニ被並置之、御襖・障

子明置之、具志川(原)ニ御見せ、舉(原)ル豐前守様・因幡守様

御差圖有之、四之間(原)ニ具志川退去、

大御所様(原)

綿百把 具志川王子(原)ニ

大納言様(原)

同斷 同人(原)ニ

右、西之御縁より御進物番衆御持出、大廣間三之間上

ニ一疊隔中通り臺を並、東西(原)ニ長ク被置之、豐前守様・

因幡守様御案内二之間中央迄出座、于時

大御所様

大納言様より被下旨、隱岐守様・但馬守様(原)ヲ御傳、一

禮仕三之間(原)ニ退ク、齋拜戴畢(原)、豐前守様・因幡守様

御差圖有之、四之間(原)ニ退ク、被下物御進物番衆被引之、

具志川殿上之間(原)ニ退去、御案内豐前守様・因幡守様、

一太守様御老中様方(原)ニ御一禮被遊、殿上之間(原)ニ 御退座、

一殿上之間(原)ニ、中山王(原)ニ被遣物、御目錄并隱岐守様・

但馬守様より之御返翰、豐前守様・因幡守様御持參、

具志川(原)ニ御渡被成(原)付、具志川受取之、掌翰史(原)ニ相渡、

御次ニ着服紗ニ包肩ニ懸ル、

一 太守様御退去、直ニ御老中様方ニ御廻勤、

一 具志川退出、豊前守様・因幡守様御玄喚階之上迄御見

送、

一 具志川十二月廿八日江戸罷立付、道筋、御徒目付衆・

御徒衆段々被差出、不込合様被仰付、町内老町與力・

同心被出之警固被仰付、諸事來艘之節同斷、

一 道中御傳馬百疋・人足四百五十人内百五十人此節増・御

家中雇傳馬八十疋・人足八十人被出之、

一 道中筋并伏見より大坂川口迄之次第、來艘之節之通、

一 大坂より薩州迄之海上、來艘之節之通、

一 嶋蕉布

五十端

一 薄蕉布

五十端

一 縮緬

五十卷

一 太平布

百疋

一 久米綿

百把

一 青貝大卓

二脚

一 堆錦硯屏

一對

一 青貝籠飯

一對

一 羅紗青黒

二十間

一 泡盛酒

十壺

公方様に

中山王に

361 (米) 一宗信公御譜中

寫止文在家老座に

一 御太刀

一 腰

一 壽帶香

十箱

一 御馬

一 疋

一 大官香

十把

一 壽帶香

三十箱

一 太平布

二十疋

一 香餅

二箱

一 島蕉布

二十端

一 龍涎香

百袋

一 泡盛酒

二壺

一 畦芭蕉布

五十端

公方様に

具志川王子に

一 御馬

一 疋宛

一 太平布

二十疋

一 壽帶香

二十箱宛

一 嶋芭蕉布

二十端宛

一 香餅

二箱宛

一 泡盛酒

二壺宛

一 龍涎香

五十袋宛

大御所様

一 太平布

五十疋宛

大納言様

一 畦芭蕉布

三十端宛

右獻上物

具志川王子方

一 嶋織芭蕉布

三十端宛

右獻上物

一 薄芭蕉布

三十端宛

一 久米綿

五十把宛

公方様方

一 縮緬

三十卷宛

白銀五百枚

一 羅紗

十間宛

綿 五百把

中山王江

一 青貝大卓

二脚宛

公方様方

一 堆錦硯屏

一對宛

白銀貳百枚

一 青貝籠飯

一對宛

御時服十

具志川王子江

大御所様

中山王方

公方様方

白銀三百枚

一 壽帶香

十箱宛

從者惣中江

一 官香

十把宛

公方様方

御時服三宛

樂人共

大御所様方

白銀三百枚

御時服

中山王江

大納言様方

同斷

同人江

大御所様方

綿百把

具志川王子江

大納言様方

同斷

同人江

右拜領物

継豊公御譜中

寫正文在文庫

隅州様江御鷹之鶴御拜領之御内沙汰有之付、先例を

以御手當被仰付置_レ處、去ル七日 上使以櫻井監物様(依勝)

御鷹之鶴被遊御拜領_レ、御名代水野肥前守様前(忠見)以被仰

達置 上使御出之節、御門地幅外迄御出迎御案内、大

御書院中段之頭江 上使御着座 上意之旨肥前守様御

承知、鶴御頂相濟、御勝手江持入 上意之趣御休息之

間ニ御承知、鶴御頂戴被遊 上使江肥前守様方御請

御禮被仰上_レ 上使江御熨斗・御茶・御多葉粉盆迄

を差上、御料理者御斷ニ、御立之節及最前之通被成

御送、其外御取持之次第先例之通御座_レ、

一 則日御老中様方江爲御禮

御名代肥前守様御廻、若御年寄様方江者、御番頭高橋

七郎右衛門御使者、御側衆江者表方以御使者被仰達_レ、

一 上使之御方江御禮、御太刀・金馬代先例之通、則日以

御使者被進_レ、

一 右付 太守様於御中途御承知之上

三 御所様江御使札を以被遊御勤_レ付、爰元御馬廻之内

取仕立御使者ニ、御書被差出御勤相濟申_レ、

一 公方様 大御所様江隅州様より御内證御勤、則日御文

を以御禮、

大納言様江之御禮者

繼豐公御譜中

嚮_レ是、繼豐因_二病痾、訟_レ公而致仕、然不能_二登_レ營
 拜謝、病痾尚未_レ瘳、雖_レ重_二數日_一經_二驛路_一、希使_レ繼豐
 來歲二月發_二江府_一到_二薩國温泉之地_一、浴_レ之殆半歲而應
 得_二愈快_一乎、是所_レ祈也、宗信筆_レ之稟_二官府_一矣、今茲

公方樣御文之内ニ被相込被仰上相濟_レ、

太守樣御内證御勤之儀、先例之通御承知之上、

公方樣_レ計御文を以御禮被仰上相濟申_レ、

一右御拜領ニ付_レ者、先例之通

姫君樣 隅州樣_レ、太守樣より御祝詞被仰進_レ、

一右付_レ御役人者當日御祝儀申上_レ、詰中之諸士者、追

而御帳付御祝儀申上_レ、

右之通御鷹之鶴御拜領被遊、恐悅奉存_レ、此段申越_レ

條、御女中樣_レ可被申上_レ、以上、

〔寛延元年〕十二月廿一日

嶋津右平太(久懸)

伊勢兵部(貞起)

嶋津左衛門殿(久惠)

樺山主計殿(久惣)

嶋津矢柄殿(久喜)

寛延元年十二月二十八日侯伯禮拜之後、微_二宗信於白書

院_一、執政列居、堀田相摸守正亮演_二台命_一、繼豐致仕之

後始賜_レ告、因_レ茲

將軍家重公賜_二道服_一三領於繼豐_二

老君吉宗公

嗣君家治公亦各賜_二道服_一二領於繼豐_二也、宗信奉_レ拜_二謝_一之

而退去、詳見_二于後及翌年之譜_一、

全上

扣正文在右筆所

同氏大隅守儀多年病氣有之、去_レ年願之通首尾能隱居被

仰付、難有仕合奉存_レ、何とそ快氣を得登_二城仕_一、御禮

申上度御座_レ得共、長_レ之病氣今以同扁故、其儀難相叶

、就夫國本江病氣相應之溫泉及御座_レ得者、罷越致入

湯、得と保養爲仕度御座_レ、依之湯治爲養生、國元江之

御暇申上度奉存_レ、願之通弥御暇被下儀御座_レハ、來

年二月中御當地出足仕、道中氣分次第緩_レ罷通、於國本

半年程及入湯仕、致養生_レ様爲仕度御座_レ、此段奉願候、

以上、

〔寛延元年〕

十二月廿三日

松平薩摩守

365 (宗)
「宗信公御譜中」

正文在西田寺」

知行目錄

高貳拾六石八斗壹升壹合五夕六才

志布志月野村之内・末吉諏訪方村之内

外

高四石九斗三升四合三夕七才

寺地成返高故相除

名寄帳在別冊

右高雖爲前住淨妙院憲英法印自分新仕明之地、依願被寄

附于其寺之條、到後年無違失可令取納者也、仍如件、

寛延元年十二月廿五日

(爲津) 鳴 久富判
久富判

(釋山) 樺 久初判
久初判

(爲津) 嶋 久甫判
久甫判

西田寺

366 繼豊公御譜中

正文在文庫

爲歳暮之祝儀、小袖一重到來歡覺候、委曲堀田相摸守可

述外也、

(宗) 「寛延元年」十二月廿七日

家重公
墨印

松平大隅守殿

367 全上

爲歳暮之御祝儀、以使者御小袖一重被獻之外、遂披露外處一段之御仕合外、恐々謹言、

(宗) 「寛延元年」十二月廿七日 秋元但馬守 涼朝判

松平大隅守殿

368 宗信公御譜中

同年十二月二十七日、宗信述職之禮畢而、應執政堀田相

摸守正亮之教、獻上龍蹄二匹于

家重公、同一匹于

家治公上、是循先規故也、

369 正文在文庫

御馬二足被獻之外、遂披露外處一段之御仕合外、恐々謹言、

〔采〕
「寛延元年」
十二月廿七日
正亮判

松平薩摩守殿
正亮

〔采〕
〔在右裏〕
堀田相摸守

370
全上

御馬一疋被獻之外、遂披露外處一段之御仕合外、恐々謹

言、

〔采〕
「寛延元年」
十二月廿七日
涼朝判

松平薩摩守殿
涼朝

〔采〕
〔在右裏〕
秋元但馬守

371
宗信公御譜中

正文在文庫

明廿八日五時登 城、官位之御禮可被申上外、以上、

十二月廿七日
松平右近將監

本多伯耆守

堀田相摸守

松平薩摩守殿

酒井雅樂頭

372
全御譜中

同年十二月廿八日應_二執政之奉書_一、宗信登_レ營、獻_二上

御太刀一腰・御馬代黃金一枚・縹緗十卷_一、拜_二謁

家重公_一、奉_レ禮_二謝_一敘任之忝_一、且獻_二上御太刀一腰・御馬

代黃金一枚于_二

吉宗公_一、同品于_中

家治公_一、奉_レ申_二謝前件_一矣、繼豐以_二使者佐久間源太夫盛

邦_一、獻_二縹緗五卷・干鯛一筐・昆布一筐・芳酒雙樽于_二

吉宗公_一、干鯛一筐・昆布一筐・芳酒雙樽于_中

家治公_一、前條畢而於_二白書院緣類_一、執政各聯座、就_レ中

堀田相摸守正亮傳_二台命_一曰、繼豐有_レ訟_二因_二舊痾_一歸_レ國

而温湯治養之事_上、允_二容之_一、是故

家重公賜_二道服三領於繼豐_一、且於_二西城_一、

吉宗公

家治公賜_二道服四領_一、奉_レ申_二謝之_一、宗信則日代_二繼豐_一、

詣_二執政各位之第_一奉_レ禮_二謝之_一、委載_二繼豐之譜中_一、

同年十二月十三日、宗信敘_二從四位上_一、任_二左近衛中將_一、以故同月二十八日、宗信登_レ營、奉_レ謝_レ之、同日繼豊亦以_二使者佐久間源太夫盛邦_一、獻_上縮緬五卷・干鯛一箱・御樽一荷於

大樹家重公、干鯛一箱・昆布一箱・御樽一荷於

老君吉宗公、同品於

嗣君家治公_上、奉_レ謝焉、

正文在文庫

爲歲暮之祝儀、小袖一重到來歡覺_レ、委曲堀田相摸守可述_レ也、

(卷) 〔寛延元年〕 十二月廿七日



薩摩

中將殿

爲歲暮之御祝儀、以使者御小袖一重被獻_レ之、遂披露_レ

之處一段之御仕合_レ、恐_レ謹言、

(卷) 〔寛延元年〕 十二月廿七日 秋元但馬守 涼朝判

松平薩摩守殿

正文在琉球國國司

今度

公方様御代替之爲御祝儀、具志川王子被差_上、召連致參府_レ處、其國不失舊規、到遠境奉祝之段、御感悅有_レ之、御會釋等段_レ結構被_レ仰付_レ間、難有奉存、國中之政務猶正道可被申付儀尤_レ、委曲家老共可相達_レ、恐惶不宣、

(卷) 〔寛延元年〕 十二月廿七日 中將宗信御判

謹上 中山王

正文在右筆所

(黒田縁爲) 筑前守様_上 薩摩守より御答

御同氏修理太夫殿_上、妹菊縁組願書之儀、御目見相濟_レ以後差出_レ様、先年御互_ニ致承知置_レ處、此節 御目

見相濟_レ付、拙者在府中又老其元様御參勤之節、願可差出哉、御内談之上可被相究_レ由、委曲被仰聞致承知_レ、來年御參府之節、御願被差出方ニ御座有度_レ、乍然御目見以後願書差出_レ様ニト之儀ニ付_レハ、御參勤迄御延引之筋ニ思召_レハ、當在府中可願出_レ、何れとも御相談次第可致_レ、此段以使者申達_レ、以上、

〔寛延元年〕
十二月廿八日

慈豊公御譜中

扣正文在家老座

隅州様御下向御暇御願書、別紙之通酒井雅樂頭様_レ御間柄之譯を以、兵部_レ被仰付御内談被仰進趣有之候處、御願書御文章思召寄無_レ、乍然御用番堀田相摸守様ニ_レ候、其上御間柄ニ_レ間、被入御内見_レ上被差出方可然旨、被仰進、相摸守様_レ又々兵部ニ_レ御内談被仰進、何ぞ思召寄_レ無_レ之_レ付、舊臘廿三日、御用御賴久世忠右衛門様ニ_レ、相摸守様_レ御願書被差出_レ處、同廿八日

太守様御登 城御禮過御用有之御殘居被成_レ様、前晚神尾伊賀守様_方御留守居_レ御切紙到來、其段達

貴聞、廿八日御禮以後、於御白書院御老中様御列座、相摸守様より

隅州様御病身ニ_レ付、御國元_レ御湯治御暇、御願之通被仰付_レ旨被仰渡、從

公方様 隅州様_レ御羽織三御拜領被遊、直西御丸_レ御登 城、於御白書院西尾隱岐守様・秋元但馬守様御出席、御暇御給被遊_レニ_レ付

大御所様 大納言様より御羽織二宛御拜領被遊_レ、

一則日、爲御禮御老中様_レ

隅州様御名代 太守様御廻、御自分様御禮表直被仰上候、若御年寄様_レ 御兩殿様より御使者兵部、御側衆_レ隅州様_方表方御使者 太守様より物頭御使者を以被

仰達_レ 一則日、

公方様 大納言様_レ御兩殿様_方御内證御勤女使被差上_レ 筈_レ處、村路當病付、御文を以御禮被仰上

大御所様_レ表、御兩殿様より御文を以被仰上_レ、

一右ニ_レ付 太守様より、京都諸司代・大坂 御城代_レ若御書を以御勤、京・大坂町奉行・伏見御奉行其外於彼

地兼_レ御通融之御方々様_レ若、京・大坂御留守居御使

者を以御しらせ、今日便申越ハ様御使番ハ申渡ハ、於其許、御隣國御しらせ之儀、先例を以可被致首尾ハ、一右ニ付 御兩殿様ハ、當日御役人限御祝儀申上、御家老致對面ハ、

右之通御暇御給被遊御拜領物恐悦御同意奉存ハ、此段申越候條、御女中様方ハ可被申上ハ、別紙一通差越申ハ、以上、

〔寛延二年〕 正月二日

鎌田典膳〔政〕
嶋津右兵太〔久〕
伊勢兵部〔貞〕

嶋津左衛門殿〔久〕
樺山主計殿〔久〕
嶋津矢柄殿〔久〕

繼豊公御譜中

正文在文庫

爲若菜之御祝儀、鯛一折被獻之候、遂披露ハ處一段之御仕合ハ、恐ク謹言、

〔寛延二年〕 正月七日

武元判

380 全上

松平大隅守殿〔朱〕
武元

松平右近將監〔朱〕

爲若菜之御祝儀、鯛一折被獻之候、遂披露ハ處一段之御仕合ハ、恐ク謹言、

〔寛延二年〕 正月七日 涼朝判

松平大隅守殿〔朱〕
涼朝

秋元但馬守〔朱〕

381 宗信公御譜中

正文在文庫

爲若菜之御祝儀、鯛一折被獻之候、遂披露ハ處一段之御仕合ハ、恐ク謹言、

〔寛延二年〕 正月七日 武元判

松平薩摩守殿〔朱〕
武元

382

全上

爲若菜之御祝儀、鯛一折被獻之候、遂披露_レ處一段之御仕合_レ、恐_レ謹言、

〔卷〕
「寛延二年」

正月七日

涼朝判

〔朱〕
「在右裏」

松平右近將監

383

宗信公御譜中

正文在文庫

吉書

一神社佛閣修造與行事、

一可專勸農事、

一可徵納國々年貢事、

右任三箇條之旨、可有沙汰之狀如件、

寛延二年正月十一日

宗信御判

384

繼豊公御譜中

正文在文庫

爲年頭之御祝儀、以使者御太刀一腰・御馬代黃金十兩被獻之_レ、遂披露_レ處一段之御仕合_レ、恐_レ謹言、

〔卷〕
「寛延二年」

正月十五日

武元判

松平大隅守殿

武元

〔朱〕
「在右裏」

松平右近將監

385

全上

爲年頭之御祝儀、以使者御太刀一腰・御馬代黃金十兩被獻之_レ、遂披露_レ處一段之御仕合_レ、恐_レ謹言、

〔卷〕
「寛延二年」

正月十五日

涼朝判

松平大隅守殿

涼朝

〔朱〕
「在右裏」

秋元但馬守

386

全上

爲年頭之御祝儀、以使者御太刀一腰・御馬代黃金十兩被

繼豊公御譜中

扣正文在右筆所

獻之外、遂披露外處一段之御仕合外、恐々謹言、

(朱)「寛延二年」

正月十五日

忠尚判

松平大隅守殿

忠尚

(朱)「在右裏」

西尾隱岐守

同氏大隅守儀、多年病氣有之、今以快氣不仕、其上手振居判難仕、別力不自由罷成外、依之不苦儀御座外者、公義向勤之節、向後用印判申度奉願外、何分ニ委御差圖被成可被下外、以上、

(朱)「寛延二年」

正月十六日

(鳥津宗信)
御名

(朱)「御付紙」

印判可被用外、

右御願書、寛延二年巳正月十六日、御留守居野村大右衛門を以、御用番松平右近將監様江被差出外付、御用人岩田九郎兵衛を以差上外處、御受取置被成外、

一正月廿五日、御達被成儀有之外間、御留守居一人可罷出旨、

右近將監様御用人より切紙到來、佐久間源太夫罷出外處、御願書ニ御付紙被成、右御用人を以御渡被成外由、源太夫首尾中上候趣を以記之、

一右御用人より 總州様御願書被差出外年号月日、且又御願之通相濟於御國元

總州様御承知之上御飛札被差越被差出外年号月日、御用ニ而外間、書付可被差出旨申聞外付、正月廿六日朝左之通書調、右近將監様江持參」

(鳥津吉貴)
松平上總介手振

公義向勤之節居判難仕用印判申度旨願書差出外由、享保十二年未四月廿六日、右願之通被仰渡候ニ付於國元上總介承知之上以飛札御禮申上外由、同年未七月五日、差出申外、

右之通御座外、

(朱)「寛延二年」

正月

(朱)「右之通書付相調、右近將監様江正月廿六日朝持參、御用人岩

田九郎兵衛江相渡、此節

隅州様御印判、御願之通被 仰出^レ付^レ而者、御禮御勤當時
 御參府之故如何可被成哉之旨、右御用人江相尋^レ外處、御用番
 様江御使者御口上勤可被成旨、被仰聞候、
 御兩殿様共ニ御口上勤ニ相濟申候間、外之御老中様江御勤
 不及候段、右同人を以原太夫承知仕^レ付、原太夫御使者ニ而
 御禮被仰達^レ外事

宗信公御譜中

扣正文在右筆所

琉球中山王使者具志川王子使贊官渡嘉敷親雲上儀、旅中
 より煩^レ外處、養生不相叶、尾州於宮驛、今月十一日之夜
 中、病死仕候付、同所禪宗海國寺に十二日葬^レ外由、申越
 外、此段申上候、以上、

〔寛延二年〕 正月十八日 (島津宗信) 御名

〔^采〕右之通、正月十七日之夜飛脚到來申來^レ付、十八日之朝御用
 番様江御留守居若下佐次右衛門を以、被差出^レ外事

宗信公御譜中

扣正文在右筆所

覺

私事持病膝ニ痛所有之、近年暑氣中猶以痛強難儀仕候、
 四月御暇被下、六月末七月ニ掛暑中遙々難致旅行、就中
 駕籠之内別る難儀仕^レ外、依之三月參勤交替奉願、暑氣前
 以國元江致到着^レ様仕度^レ外、相成儀^レ外者、何卒三月參勤
 交替被仰付被下度奉^レ外、此段奉願^レ外、以上、
 〔^采〕寛延二年〕 正月廿二日 御名
 〔^采〕御付紙
 可爲願之通候

〔^采〕右御願、堀田相摸守様御内談之上、右下書被入御披見^レ外處、
 重立^レ外御願^レ外得共
 總州様先年御交替御願書之
 公例^采有之事^采外得者、御願書被差出可然と被思召^レ外、下書思
 召寄之處^采無之旨、御取次御用人^采野村大右衛門致承知、寛
 延二年正月廿二日、御用番松平右近將監様^采被差出^レ外處、同
 廿四日右近將監様^采大右衛門被召呼、右之通御付紙^采而被
 仰渡^レ外

繼豊公御譜中

繼豊致仕之後去歲始賜^レ告、以故寛延二年二月四日、發^レ
 駕江都芝邸、一門島津兵庫久門^采實繼豊、家老伊勢兵部貞

起、用人宮之原甚五兵衛通興、近習役鎌田六郎大夫政方、三原濱右衛門經居等扈從之、取驛路東海、同月二十

五日著伏見、同月二十八日發伏見著大坂、三月六日發大坂、取驛路山陽・西海、四月二十三日到著薩

府、直入四配之館、即日使島津主水久命赴江都、六月朔日久命登營、於白書院、奉調

將軍家重公

嗣君家治公、獻上縮緬五卷・二種・雙樽於

家重公、二種・雙樽於

大御所吉宗公、同品於

家治公、奉謝賜告到薩國之辱上、久命亦獻上御太

刀一腰・馬代銀一枚・紗綾二卷於

家重公、御太刀一腰・馬代銀一枚於

家治公、奉拜謁、同月四日執政堀田相摸守正亮召久

命於中、授奉書、且賜久命以紗綾二卷、同日

家治公執政秋元但馬守涼朝招久命、授奉書、翌五日

吉宗公執政西尾隱岐守忠直亦招久命、授奉書也、

一筆令啓達外、弥無吳儀御旅行外哉、承度存外、依之如此外、恐々謹言、

〔寛延二年〕二月四日 尾張中將 宗陸判

松平大隅守殿

御宿所

全上

正文在文庫

なをく何もよろしく申あけまいらせ外、めてたく

かしく、

御文下され外、

三御所様ますく御機嫌よく御座なされ外御事御めて度

思召被成外よし、扱は御手まへ様御事、今日御當地御立

被成外ニ付、御機嫌伺御申上被成外、かしく、なを御機

嫌よく成らせられ外御文のやう、よろしく申上まいらせ

外、めてたくかしく、

〔寛延二年〕

カ

豊をか

梅その

浦尾

たきつ

松平

大隅守様

御返事
人々御中

小 枝

全上

なをく何もくよろしく申上まいらせり、めてた
くかしく、

御文下されり、

三御所様ますく御安全に御座成らせられり御事、御目
出度おほしめしり由、扱は御手前様こん日御當地御立被
成りよし、夫に付御機嫌御伺ひなされり御文之通り、よ
ろしく申あげまいらせり、めてたくかしく、

〔寛延二年〕

松平

大隅守様 御返事

人、御中

高 瀬

清 崎

〆

宗信公御譜中

扣正文在右筆所

筑前守様(黒田總高)

薩摩守より御答(島津重豪)

弥御堅固御在國被成珍重存り、然者御同氏修理大夫殿に
妹菊縁組願書差出り儀付、舊臘御内談之趣有之、御返答
申達置り處、此節又々御使者を以被仰聞之段、委細致承

宗信公御譜中

扣正文在右筆所

知り、此方何そ差支無御座、御同意存り間、弥思食之通
此度願書差出り様可致り、此段以使者申達り、以上、

〔寛延二年〕 二月十三日

右縁組奉願候、以上、

松平薩摩守取次(島津宗信妹、惣)
松平薩摩守妹(黒田總高)
筑前守嫡子(重政)
松平修理大夫に

松平薩摩守取次

小笠原縫殿助(神正)

松平筑前守取次

久世忠右衛門

宗信公御譜中

去載十二月二十八日、有_レ訟_二老父繼豐歸_レ國温湯治養之事
幕府_一、蒙_二允容_一、今茲寛延二年己巳二月四日、繼豐發_二
江府芝邸_一、歷_二東海・美濃・九州驛路_一、四月二十三日歸_二
薩府_一、入_二四配館_一、事繁故詳_二繼豐之譜中_一、

宗信公御譜中

去歲寬延元年十二月二十八日、琉使具志川王子其外從者等發_二東都芝邸_一、經_二歷東海及美濃路_一著_二于大坂假亭_一、今年正月二十四日開_二帆坂港_一、寬延二年三月十二日著_二船于薩西向田_一、翌十三日到_二著于薩府_一、家老平田勲負正輔、用人戶田傳五郎成庸、相良彌一兵衛長主、近習役北郷八右衛門資矩其外諸有司等護_二送之_一、正輔爲_二總監_一、即日王子及從者等登_二府城_一奉_二申_一謝之_二還_二琉館_一、同年四月五日、王子其外從者等賜_レ暇、開_二帆于薩府前濱_一、海路無_レ恙歸_二琉球國_一、

宗信公御譜中

嚮_レ是同年二月二十一日、欲_レ婚_二媾宗信之妹菊姬於筑前國福岡城主松平筑前守繼高之嗣嫡修理大夫重政_一、同年三月十六日應_二執政之奉書_一、宗信、黒田河内守長邦亦同代_二松平繼高_一登_レ營、於_二白書院終類_一、執政各聯座、就_二中堀田相摸守正亮傳_一台命_一、具同蒙_二允容_一、宗信乃奉_二申_一謝之_一、即日登_二西城_一、賜_二奏者衆朽木土佐守玄綱_一、奉_二申_一謝前件_一退去、直詣_二執政各位之第_一、且遣_二家老使者於若御年寄之第_一、

奉_レ申_二謝之_一、

全上

扣正文在右筆所

近衛左大臣殿今度就御下向、御逗留中御旅亭に兩三度程御見舞申度外、此段相伺申外、以上、

(志) (朱)可爲勝手次第候一
「寬延二年」二月廿七日 (島津宗信) 御名

宗信公御譜中

扣正文在右筆所

元祖忠久於攝州住吉誕生、翌朝近衛基通公御社參_二之_一、頼朝卿御子之由被聞召、忠久を御収護被成、京都に御歸御撫育被成外段、舊記に相見得申候、右由緒有之、先祖代々近衛家に通融仕來外、
(島津綱俊)
一 曾祖父薩摩守娘近衛家久公に嫁娶_二之_一外處早世、其後祖父上總入道娘再縁有之_レ得共、是又早世_二之_一御座外、一 寶永六年丑五月、近衛家久公御下向之節、上總入道家督之内伺之上招請仕、御旅亭に御見廻申外、一 享保三年戌九月、家久御下向之節、父大隅守部屋栖之内、窺之上御旅亭に御見舞申外、以上、

〔卷〕
「寛延二年」二月

402 宗信公御譜中

扣正文在右筆所

此節私國許江之御暇被下置外ハ、御禮申上外節、御當地留守ニ差置外家老之者、先例之通

御目見被仰付被下度奉存外、名書相添差出申外、宜御沙汰奉頼候、以上、

〔卷〕
「寛延二年」三月二日 御名

403 今上

扣正文在右筆所

留守差置候家老之者

御目見被 仰付外節自分獻上

公方様江

御太刀 一腰

縮緬 之内 二卷

紗綾 一枚

御馬代銀

大納言様江

御太刀 一腰

御馬代銀 一枚

右之通獻上仕來候、

〔卷〕
「寛延二年」三月

404 今上

扣正文在右筆所

留守差置外家老之者

御目見被 仰付外節自分獻上

大納言様江

御太刀 一腰

御馬代銀 一枚

右之通獻上仕來候、

〔卷〕
「寛延二年」三月

405 宗信公御譜中

正文在文庫

猶以若病氣外老名代可被差出外、以上、

御用之儀外間明六日四時可有登

城外、以上、

(宋) 〔寛延二年〕三月五日

松平右近將監

本多伯耆守

堀田相摸守

松平薩摩守殿

406 全上

扣正文在右筆所

今日薩摩守被爲 召外處、持病差發登 城難成、爲名代

私登 城仕外處、御息女薩摩守江縁組被仰付之旨被 仰

渡、申聞外處、難有仕合奉存外、右御禮私を以申上候、

以上、

(宋) 〔寛延二年〕三月六日

(定所) 松平隠岐守

(宋) 〔右尾張中納言様江御口上之趣〕

407 全上

扣正文在右筆所

今日薩摩守被爲 召外處、持病差發登 城難成、爲名代

私登 城仕外處、尾張中納言殿御息女薩摩守江縁組被

(徳川宗勝女、高知姫)

仰付外旨、被 仰渡、難有仕合奉存外、右之御禮私を以

申上外、以上、

(宋) 〔寛延二年〕三月六日

(宋) 〔右、御名代隠岐守様御禮廻之節之御口上〕

408 宗信公御請中

響是、寛延二年己巳二月十五日、豫爲縁談、欲仇儂

尾陽侯黃門宗勝卿之翁主嘉知於宗信、宗勝卿上書之

幕府、受同年三月五日執政之奉書於宗信、翌六日松平

隠岐守定喬代登、營宗信有恙、不御登營宗喬於白書院縁頼、執政

各聯座、就中堀田相摸守正亮傳

台命於定喬蒙允容、宗勝卿亦見蒙容、奉禮謝

退席、定喬代宗信、詣執政各位之第、見奉申謝、

到若御年寄之第、遣家老使者、宗信奉申謝之

殿後宗信、御人、漸是故、難縁也

409 全上

扣正文在右筆所

今日尾張中納言殿御息女、私縁組被 仰付、難有仕合

奉存外、依之

公方様 大御所様 大納言様江献上物仕、御禮申上度外、

且亦同氏大隅守於中途承知仕外上、献上物仕、御禮爲申上度外、妹菊より御禮之儀、如何相勤可申哉、何分ニテ御差圖被成可被下候、以上、

(宋)「寛延二年」三月六日 (島津宗信) 御名

(宋)「御付紙

公方様江二種・一荷 薩摩守より

大納言様江一種・一荷

公方様江一種・一荷 大隅守より

大納言様江一種」

全

扨正文在右筆所

右相添

一延享三年寅十一月、薩摩守家督之御禮申上外節、妹菊より及爲御禮、伺之上女使を以御内證より左之通献上仕外、

公方様江

二種・一荷

大御所様

大納言様江

一種・一荷

一同年十二月、薩摩守少將任官之御禮申上外節

三御所様江伺之上妹菊方献上物右同斷、

一舊臘、中將官位之御禮申上外節

三御所様江伺之上妹菊より献上物右同斷、

以上

(宋)「寛延二年」三月

全上

扨正文在右筆所

先年薩摩守縁組被 仰付外節、奉伺外上、左之通献上

仕御禮申上候、

公方様江

二種一荷

大納言様江

一種一荷

公方様江

一種一荷

大納言様江

一種

(宋)「寛延二年」三月

(島津宗信) 大隅守より

(島津宗信) 薩摩守方

全上

扣正文在右筆所

先年薩摩守縁組被 仰付外節、奉伺外上、左之通獻上

仕御禮申上候、

公方様は

二種一荷

大納言様は

一種一荷

公方様は

一種一荷

大納言様は

一種

大隅守より

薩摩守方

〔巻〕「寛延二年」三月

宗信公御譜中

扣正文在右筆所

元文五年申四月、薩摩守縁組被 仰出候節、爲御禮妹菊

より献上物不仕り、以上、

〔巻〕「寛延二年」三月

御名書に、尤日付誤氣之

全上

正文在文庫

猶以爲御禮今日不及登 城外、以上、

明日蹴鞠被遊

上覽外付、可致見物旨被 仰出外條、長袴着用、四時以

前可有登 城外、以上、

〔巻〕「寛延二年」三月十一日

松平右近將監

本多伯耆守

堀田相摸守

松平薩摩守殿

宗信公御譜中

正文在文庫

明十五日五半時登 城、御暇之御禮可被申上外、以上、

〔巻〕「寛延二年」三月十四日

本多伯耆守

堀田相摸守

松平薩摩守殿

正文在文庫

家來一人

御目見被 仰付外間、召連可被罷出外、

417 正文在文庫

猶以若病氣外者、名代可被差出外、以上、

御用之儀外間、明日四時可有登 城外、以上、

〔卷〕

〔寛延二年〕三月十五日 松平右近將監

本多伯耆守

堀田相摸守

松平薩摩守殿

418 今上御譜中

同二年己巳三月十三日、執政本多伯耆守正珍爲上

使來芝第、宗信賜歸國告、循先蹤賜縹緗三十

卷・白銀三十枚矣、同日

吉宗公爲上使執政西尾隱岐守忠尚亦來芝第、賜

縹緗二卷矣、

家治公 上使執政秋元但馬守涼朝來芝邸、賜紗綾二

卷、各奉申謝之、

○同月十五日應執政之奉書、宗信登營、奉禮謝

賜歸國之告、拜謁

家重公、時蒙懇篤之 尊言賜龍蹄一匹、且江府芝

邸留守勤之家老、循先規、島津矢柄久富獻御太刀一

腰・御馬代白銀一枚・紗綾二卷奉拜謁

將軍家不詳、且獻御太刀一腰・御馬代白銀一枚於

家治公、退營、

419 継豊公御譜中

寛延二年三月十六日、宗信蒙下以繼豊女菊可令仇儼

松平修理太夫重政台命、是依兼日訟也、繼豊在薩

國聞之、呈使札於執政、獻酒肴、拜謝焉、委載于

宗信之譜也、

420 宗信公御譜中

正文在文庫

今朝以使者御樽肴被獻之外、遂披露外處一段之御仕合外、

恐謹言、

〔卷〕 三月十八日 正亮判

〔在口裏〕

松平薩摩守殿

正亮

〔在右裏〕

堀田相摸守

今朝以使者御樽肴被獻之外、遂披露外處一段之御仕合外、
恐く謹言、

〔寛延二年〕三月十八日 涼朝判

〔卷〕
〔在口裏〕
松平薩摩守殿 涼朝

〔卷〕
〔在右裏〕
秋元但馬守

扣正文在右筆所

私儀今度御暇被下置、國許に罷越り、未男子無御座外付、
在國中若不慮之儀及御座外ハ、國元に差置り私弟嶋津
兵庫當年貳拾壹歳罷成り此者、養子被 仰付、跡職相續
仕外様奉願候、以上、

寛延二巳三月十八日 松平薩摩守判

堀田相摸守殿

本多伯耆守殿

松平右近將監殿

〔卷〕
〔右御書附、三月十八日堀田相摸守様御對答ニ御持參被遊り由、

扣正文在右筆所

隅州様江 太守様より御口上

弥御機嫌能可被遊御旅行、日出度御儀被 思召り、

太守様益御機嫌能、今日御當地御發駕被遊り、此段被

仰進り、以上、

〔卷〕
〔寛延二年〕三月廿二日

同年三月二十二日、宗信發東都芝邸、家老鎌田典膳政
昌・番頭格入來院石見定勝、用人有川幸右衛門貞利、近
習役二階堂林左衛門行通・福山平太夫安都・澁谷喜三左
衛門貫通等屬從矣、歷東海驛伊勢路四月七日著伏見
假亭、同月十日下河、即日著大坂假亭休息、同十四
日出大坂著兵庫、同十七日到播之坂越、直駕船、
五月二日著豊之大里、同四日出大里、同十四日著薩
西出水假館、同十八日入薩府壘城、使番頭島津市大夫
久隆豫命謝恩使故即日登府城直舍宗信之命而赴中

東都^上、取^二路於九州^一、五月二十九日著^二黑崎、直駕^一、船、六月六日著^二坂港^{（坂懸）}、同月七日遊^二河、八日著^二伏見驛^一、自^レ夫經^二美濃路・東海之驛路^一、同月二十日著^二東都芝邸^一、同月二十六日候^二執政^用堀田相摸守正亮之第^一、呈^二上書翰及連署^一勤^レ使者、且候^二

吉宗公之執政西尾隱岐守忠尚之第^一、呈^二上書簡及格書^一同^レ上、候^二

家治公執政秋元但馬守涼朝之第^一、呈^二上書簡及格書^一同^レ上、且到^二若御年寄之第^一、呈^二上書簡^一同^レ前、七月朔日

應^二執政奉書之教^一、留守居佐久間源太夫盛邦爲^二久隆之教導^一、捧^二宗信之獻物疏蕉布二十端^一・三種^二荷^一登^レ營、於^二白書院^一、奉^レ拜^二謁^一

家重公^一、奉^レ申^二謝宗信歸^レ國之恩篤、金森兵部少輔賴錦奏^二達之^一、久隆亦親自獻^二上御太刀一腰、御馬代白銀一枚、紗綾二卷^一、再奉^レ拜^二謁^一 台顏、金森頼錦奏^二達之^一、且

登^二

西城^一、獻^二上宗信之獻物三種二荷于

吉宗公、同品于
家治公^一、同月三日久隆應^レ教登^レ營、執政^用番本多伯耆守

正珍出^二席于檜間^一、手自見^レ附^レ與所^レ授^二宗信之奉書於久

隆^上、拜^二戴紗綾二卷^一、酒井山城守忠休執^二達之^一、同日徵^二秋元涼朝之第^一、賜^二宗信之奉書見^レ附^二與之^一、同四日徵^二西尾忠尚之第^一、賜^二宗信之奉書見^レ附^二與之^一、東都使价勤務畢而、七月十九日出^二芝邸^一、同二十九日著^二伏見、即下^レ河、其夜著^二大坂旅亭^一、八月朔日出^二大坂^一、歷^二中國・九州路^一、時間^二宗信在^レ國病痾大漸^一、故驛路匆忙、八月十五日歸^二薩府^一復命、

425 繼豊公御譜中
正文在文庫

今度

（家重告可）
至心院様一回御忌御法事御執行付^レ而、以使^レ御香奠被獻

外、於東叡山奉納之事外、右之趣及言上外、恐^レ謹言、

（朱）
「寛延二年」 三月廿六日 秋元但馬守 涼朝判

松平大隅守殿

426 全御譜中

夫四配宅地者廢城之便殿也、而先考退休之後亦間處^レ之、然嚮既毀焉、繼豊致仕之後、今茲始賜^レ告將^レ歸^レ國、是以豫使^レ國老樺山主計久初總^二裁土木之事^一築^レ殿於四配宅

地、自去秋至今春一舉功矣、

全上

扣正文在家老座

御下屋敷御作事、末々未相濟不申得共、御座廻者

(卷一) 本文被申越經致承知候、以上

大形致成就、近日敷付を及仕管御座外、依之荒神供御

祈禱二夜三日、來月二日より野村彌太郎相勤、御門地

鎮鎮宅御祈禱、同月六日大乘院相勤、御門開同加持御

通初之御祈禱、同七日二夜三日彌太郎相勤申答外、

御移徙同月十一日吉日に付 御名代に御移徙之御祝

御手當申渡置外、略被仰付外御移徙に候得者、御三獻

迄差上申事御座外、御名代并相話外御役々支度之儀及、

紙色迄を不相用旨申出外、右兩度之 御名代、大殿被

相勤外様、申達置外、

一 平田平六御祈禱、同月十二日より二夜一晝相勤申答御

座外、

一 御作事御用係之面々に御移徙當日被成御祝、御酒・吸

物又者取看に酒迄を被下儀者、先例相しらへ、

當分之御格を以申渡外様可仕外、御目錄等被下候儀付

る者、しらへ方相濟不申儀有之候間、

太守様被遊 御下向、奉伺外様可仕外、

右申越候間、御序を以可被遊 貴聞外、尤

太守様御方に及、右首尾別紙を以申上外、以上、

(朱)「寛延二年」

(朱)「四月十八日」

(朱)「上」

三月廿九日 樺山主計

(朱)「下」

伊勢兵部殿

宗信公御譜中

扣正文在右筆所

一 筆致啓上候、

三 御所様益御機嫌能被成御座、恐悦奉存外、然者先月六

日、同氏薩摩守御用之儀御座候間、登

城可仕旨、被仰渡外處、病氣有之、名代松平隠岐守致登

城外處、尾張中納言殿御息女薩摩守に縁組被仰付外由申

越、承知仕、於私難有仕合奉存外、右御禮爲可申上呈使

札外、御序之刻

御前可然様御執成所仰候、恐惶、

(朱)「寛延二年」

四月二日

西尾隠岐守様

人、

継豊公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

全上

扣正文在右筆所

一筆致啓上候、

三御所様益御機嫌能被成御座、恐悦奉存外、然者今度松

平修理太夫以私妹縁組願之通被 仰出、難有仕合奉存外、

依之以使札目錄之通獻上仕候、御序之刻

御前可然様御執成所仰候、恐惶、

四月四日

御本丸

堀田相摸守様

本多伯耆守様

松平右近將監様

大御所様御方

西尾隠岐守様

大納言様御方

秋元但馬守様

人々

人々

人々

大納言様益御機嫌能被成御座、去月十日東叡山

至心院様 御靈前御參詣之段被承之、恐悦旨尤外、紙面

之趣及言上外、恐々謹言、

(奉)「寛延二年」

四月十三日

秋元但馬守

涼朝判

松平大隅守

全上

扣正文在家老座

先達申越置外通 御下屋鋪御門、御名代ニ御通初

(奉)「本文政承知通 御耳候、別紙相置候、以上」

今月九日相濟、同十一日御名代ニ御、御移徙之御祝首

尾能相濟申外、右付外未

(奉)「太守様御方等、此所御名除被進物と書調」

太守様御女中様方より被進物并御一門・御子様方・大

(被進物)等

御目附以上御役々其外方進上物別紙之通外、當日於御

近習番所、御用懸之御家老并御祝儀參上之大御目附以

上御役々ニ未、吸物・差味ニ御酒被下、右同席ニ御

御側御用人・首尾懸之表御用人・御近習役・御納戸奉

行・御小納戸役外、吸物ニ御酒被下、於御使者之間

御普請奉行・御目附江右同斷被下、於御番人詰所首尾

懸之御徒目附・御家老座筆者・御普請方檢者・同筆者・

惣大工江取看ニ御酒被下外、隅州様御方御側廻・

御側醫師に表、於御近習番所、取看ニ御酒被下り、

一御移徒相濟り付、於 御本丸

御兩殿様江御役人限、御祝儀申上、大御目附以上御役

々者、今日便書狀を以御祝儀申上り、諸事無滞御祝相

濟奉恐悦り、別紙相添此段申越り條、可被達

貴聞り、以上、

〔寛延二年〕
四月十五日 樺山主計

〔宋〕
〔關州様御中途〕

〔宋〕
〔下〕伊勢兵部殿

〔宋〕
〔太守様御中途〕

鎌田典膳 銘、

434

〔宋〕
「太守様御中途より之返答

本文達 貴聞り處、御移徒御祝首尾能相濟、目出度被思

召り、右御悦被 仰進り間、各江申越 關州様・お嘉久

様達 御聽り様 御意り條、可被申上り、私より表 御

二方様江以書狀御祝儀申上り、以上、

四月廿九日

鎌田典膳

樺山主計殿

〔註本文書ハ四三二村文書ノ行間朱書ナリ〕

435 宗信公御語中

正文在文庫

御札令披見り、

三御所様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤り、然者妹縁組

願之通被 仰付之、難有由得其意候、依之以使者御樽肴

被獻之り、各申談遂披露り處、一段之御仕合り、恐々謹

言、

〔宋〕
〔寛延二年〕
四月十九日 松平右近將監 武元判

松平薩摩守殿

436

全上

御札令披見り、

三御所様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤候、然者妹縁組

願之通被 仰付、難有由得其意り、依之以使者御樽肴被

獻之り、遂披露り處、一段之御仕合り、恐々謹言、

〔宋〕
〔寛延二年〕
四月十九日 秋元但馬守 涼朝判

松平薩摩守殿

437

全上

正文在文庫

宗信公御譜中

正文在文庫

松平筑前守より、此度修理大夫縁組被 仰出外ニ付、筑

(朱)

「在口裏」

仰寬延二
四 廿二

御いまの御局へ

まいらせ外

あ

絳豊公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

三御所様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、將又尾張中納言殿御息女、同氏薩摩守に縁組被 仰付之、難有由得其意外、依之爲御禮以使者御樽着被獻之外、各申談遂披露外處、一段之御仕合候、恐々謹言、

宗信公御譜中

正文在文庫

さつまの中將より、今度昇しんの御禮として、わうこん百兩・御絹三十疋進上おはしまし、披露申て外へハ、おもしろく思しめし外よし、よく心得て申せとて外、御心え外てつたへられ外へくり、かしく、

(朱)
「寛延二年」

四月十九日

西尾陸岐守

忠尚判

松平薩摩守殿

前守并妻より

竹姫君様に差上物仕外付る、此以後御機嫌相伺、且又御祝儀等之節差上仕度旨、將又修理太夫事、今度竹姫君様に差上物仕拜領物仕外付る、此以後御機嫌伺御祝儀等之節差、御廣敷迄参上可仕哉之旨、且又竹姫君様に差上物仕外付る、此以後御機嫌相伺且御祝儀等之節、同氏筑前守ニ准し、差上物差可仕哉と、相伺外ニ付、可爲伺之通旨申渡外間、可被相談外、尤差上物之品員數等之儀者、間柄之儀外間申合外様、可被致外、

(朱)
「寛延二年」 四月

(朱)
「在口裏」

松平薩摩守に

〔寛延二年〕 四月廿七日 松平右近將監 武元判

松平大隅守殿

441 全上

御札令披見外、

三御所様益御機嫌能成御座、恐悦旨尤外、將又尾張中

納言殿御息女、同氏薩摩守に縁組被 仰付之、難有由得

其意外、依之爲御禮被差越使者外、紙面趣及言上外、恐

く謹言、

〔寛延二年〕 四月廿七日

松平大隅守殿

西尾隠岐守 忠尚判

442 全上

御札令披見外、

三御所様益御機嫌能成御座、恐悦旨尤外、然者尾張中

納言殿御息女、同氏薩摩守に縁組被 仰付之、難有由得

其意外、依之爲御禮以使者干鯛一箱被獻之外、遂披露外

處、一段之御仕合外、恐く謹言、

〔寛延二年〕 四月廿七日

秋元但馬守 涼朝判

松平大隅守殿

443 継豊公御譜中 正文在文庫

なをく御表方御禮御申あけ被成外へ共、猶御申上

被成外よし、何もよろしく申上まいらせ外、めてた

くかしく、

四月二日附て御ふミ下され外、

三御所様益御機嫌よく成らせられ、御めてたく思召被成

外由、しかれ者先月六日、御同氏薩摩守殿御用の儀御座

外間御登 城可被成旨、仰渡され外處、御病氣ニ付松平

〔定書〕 隠岐守殿御登 城被成外處、尾張中納言様御姫さま御事、

薩摩守殿へ御縁組仰出され外御事、御手前様におゐて有

かたき御事に思召被成外よし、右の御禮御申上なされ外

御ふミの趣、よろしく申あけまいらせ外、めてたくか

く、

〔寛延二年〕

6

豊岡

梅その

松しま

松平

大隅守様

御返事 人々御中

全上

なをく御表より御禮御申上被成りへとも、猶御申上被成りとの御事、よろしく申上まいらせり、めてたくかしく、

うら尾

たきつ

さえた

四月二日附にて御ふみ下されり、

三御所様益御機嫌よく成らせられり、御めてたく思召被成り由、しかれ先月六日、御同氏薩摩守殿御用の儀御座り間御登 城可被成旨、仰渡されり處、御病氣ニ付、御名代松平隠岐守殿御事御登 城被成り處に

尾張中納言様御姫さま御事、薩摩守殿へ御縁組仰出されり御事、御手前様ニおゐて有かたく思召被成り由、右の御禮

大納言様へ御申上被成り御ふみの趣、よろしく申あけまいらせり、めてたくかしく、

〔寛延二年〕

豊岡

b

全上

なをく何もよろしく申上まいらせり、めてたくか

梅その
松しま
うら尾
たきつ
さえた

松平

大隅守様

御返事
人々御中

445 爲端午之祝儀、竹子單物到來歡覺候、委曲本多伯耆守可述り也、

〔寛延二年〕

五月二日

松平大隅守殿

松平大隅守殿

全上

爲端午之御祝儀、以使者御咄子單物被獻之り、遂披露り處、一段之御仕合り、恐々謹言、

〔寛延二年〕

五月二日

松平大隅守殿

秋元但馬守
涼朝判

しく、

四月七日付にて御文下されり、

三御所様ますく御機嫌よく御さなされ、御目出度思召

りよし、扱ハ先月廿二日、御同氏薩摩守殿御事、此地御

立被成りニ付

上使梅そのにて

公方様より

竹姫君様へ御目録の通進しられ、忝思召りよしにて、御

禮御申上被成り御文のやう、よろしく申上まいらせり、

めてたくかしく、

〔卷〕
「寛延二年」

方

豊をか

梅その

松しま

浦尾

たきつ

さえた

449
宗信公御譜中
正文在文庫

爲端午之祝儀、帽子單物到來歡覺候、委曲本多伯耆守可
述り也、

〔卷〕
「寛延二年」

五月二日

家重公
印

薩摩

中將殿

しく、

四月七日付にて御文下されり、

三御所様ますく御機嫌能御座成らせられり御事、御目

出度おほしめし被成り由、扱は先月廿二日、御同氏薩摩

守殿御事、此御地御立被成りニ付

竹姫君様へ御目録之通りしんしられ、有かたくおほしめ

しり由、右の御禮御申上被成り通り、よろしく申上まい

らせり、めてたくかしく、

〔卷〕
「寛延二年」

方

高瀬

清崎

松平

大隅守様

御返事
人々御中

全上

なをく何もよろしく申上まいらせり、めてたくか

450

今一

爲端午之御祝儀、以使者御帽子單物被獻之外、遂披露外處

一段之御仕合外、恐々謹言、

〔朱〕「寛延二年」五月二日

秋元但馬守 涼朝判

松平薩摩守殿

451

繼豐公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

三御所様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤候、然老娘縁組

願之通被 仰出、難有由得其意外、依之爲御禮以使者御

樽肴被獻之外、各申談遂披露外處一段之御仕合外、恐々

謹言、

〔朱〕「寛延二年」

五月廿二日

本多伯耆守 正珍判

松平大隅守殿

452

今一

御札令披見外、

三御所様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、將又娘縁組

願之通被 仰出之、難有由得其意外、依之爲御禮以使者

干鯛一箱被獻之外、遂披露外之處一段之御仕合外、恐々

謹言、

〔朱〕「寛延二年」

五月廿二日

秋元但馬守 涼朝判

松平大隅守殿

453

今上

御札令披見外、

三御所様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、然老娘縁組

願之通被 仰付、難有由得其意外、依之爲御禮以使者干

鯛一箱被獻之外、遂披露外處一段之御仕合外、恐々謹言、

〔朱〕「寛延二年」

五月廿二日

西尾院岐守 忠尚判

松平大隅守殿

454

繼豐公御譜中

御札令披見外、

三御所様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、將又今度被

下御暇、其上御羽織頂戴之、從

大御所様 大納言様拜領物有之、重疊難有由得其意外、

國許就到着爲御禮、以鳴津主水御樽着被獻之外、遂披露
外處入念候段御喜色之御事外、恐々謹言、

〔寛延二年〕六月三日 西尾隱岐守 忠尚判

松平大隅守殿

456 今上

御札令披見外、

三御所様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、將亦今度被
下御暇、其上御羽織頂戴之、從

大御所様 大納言様拜領物有之、重疊難有由得其意外、

國元就到着爲御禮、以鳴津主水縮緬五卷并御樽着被獻之
外、遂披露外處

御前に被召出之、入念外段御喜色之御事外、恐々謹言、

〔寛延二年〕六月四日 松平右近將監 武元判

本多伯耆守

正珍判

堀田相摸守

正亮判

松平大隅守殿

御札令披見外、

三御所様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、將亦今度被
下御暇、其上御羽織頂戴之、從

大御所様 大納言様拜領物有之、重疊難有由得其意外、

國許就到着爲御禮、以鳴津主水御樽着被獻之外、遂披露
外處

御前に被召出之、入念外段御喜色之御事外、恐々謹言、

〔寛延二年〕六月四日 秋元但馬守 涼朝判

松平大隅守殿

477 今上

御札令披見外、就酷暑之節

三御所様御機嫌被相伺之候、益御安全御儀外間可御心易
外、隨而麩節一箱被獻之外、各申談遂披露外處一段之御
仕合外、恐々謹言、

〔寛延二年〕六月十一日 堀田相摸守 正亮判

松平大隅守殿

458 今上

御札令披見外、就酷暑之節

460

宗信公御譜中
正文在文庫

御札令披見外、就酷暑之節

三御所様御機嫌以使者被相伺之外、益御勇健御儀外之間
可御心易外、隨而琉球布一箱并砂糖漬天門冬一器・赤貝

459

全上

御札令披見外、就酷暑之節

三御所様御機嫌被相伺之外、益御安全御儀外間可御心易
候、隨而鏝節一箱被獻之外、遂披露外處一段之御仕合外、
恐々謹言、

〔寛延二年〕六月十一日

松平大隅守殿

西尾隠岐守

忠尚判

462

全上

御札令披見外、就酷暑之節

三御所様御機嫌以使者被相伺之外、益御安全御儀外間可
御心易外、隨而琉球布一箱并砂糖漬天門冬一器・赤貝塩
辛一器・琉球泡盛酒二壺被獻之外、遂披露外處一段之御

461

全上

御札令披見外、就酷暑之節

三御所様御機嫌以使者被相伺之外、益御勇健御儀外間可
御心易外、隨而琉球布一箱并砂糖漬天門冬一器・赤貝塩
辛一器・泡盛酒二壺被獻之外、遂披露外處一段之御仕合
外、恐々謹言、

〔寛延二年〕六月十一日

松平薩摩守殿

秋元但馬守

涼朝判

三御所様御機嫌被相伺之外、益御安全御儀外間可御心易
外、隨而鏝節一箱被獻之外、遂披露外處一段之御仕合外、
恐々謹言、

〔寛延二年〕六月十一日

松平大隅守殿

秋元但馬守

涼朝判

塩辛一器・琉球泡盛酒二壺被獻之外、各申談遂披露外處
一段之御仕合外、恐々謹言、

〔寛延二年〕六月十一日

松平薩摩守殿

堀田相摸守

正亮判

仕合外、恐々謹言、

〔寛延二年〕六月十一日

西尾隠岐守

忠尚判

松平薩摩守殿

全上

なをく何もよろしく申上まいらせり、めてたくかしく、

五月十一日付にて御文下されり、

三御所様益御機嫌よく御座被成らせられり御事、御めて

たくおほしめしり由、さては

竹姫君様より 菊姫方の御縁組の御禮 仰上られり

付、御祝あそはし

大御所様よりも、御肴一折御文にてしんしられり御事、

御承知被成、御手前様におゐて、有難おほしめし被成り

由、右の御禮御申上なされり通、よろしく申あけまいら

せり、めてたくかしく、

〔寛延二年〕

松平

薩摩守様

御返事

人々御中

高瀬

清崎

全上

返く何もよろしく申上まいらせり、めてたくかしく、

五月十一日付にて御ふみ下されり、

三御所様益御機嫌よく御座なされ、御めてたく覺しめしり由、さては

竹姫君様より 菊姫御方御縁くみの御禮 仰上られり

付、御祝あそはし

大納言様より御ふみにて御さかな

ヨメス

られり御

事、御てまへ様ニ置ありかたく覺しめしり由、御ふみの

趣、よろしく申上まいらせり、めてたくかしく、

〔寛延二年〕

松平

薩摩守様

御返事

人々御中

豊岡

梅その

松しま

うら尾

瀧津

さゑた

全上

御札令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座、四月廿日東叡山

御靈前 御參詣之儀被承之、恐悦旨尤外、紙面之趣各申

談、及 上聞外、恐々謹言、

〔朱〕

〔寛延二年〕

松平薩摩守殿

堀田相摸守

正亮判

〔朱〕

〔寛延二年〕

松平大隅守殿

松平右近將監

武元判

468

宗信公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、其許御無吳之由玆重外、我等道中無恙歸

國之事外、仍御念入外段欣然之至存外、恐々謹言、

〔朱〕

〔寛延二年〕

薩摩中將殿

尾張中納言

宗勝判

466

繼豊公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、今度首尾好御暇、路次無恙其元到着之由

玆重外、依之御念入外段、欣然之至存外、恐々謹言、

〔朱〕

〔寛延二年〕

松平大隅守殿

尾張中納言

宗勝判

469

繼豊公御譜中

繼豊欲下到薩國温泉之地、半歲之間浴治久病、故去歲宗

信訟之而賜告也、今春發江都、四月下旬到薩國、

然以下長途倦勞加宿病、且中暑熱、不能浴温泉治

病、憶向參府之期、宿病猶未愈、以故今茲寛延二年

六月二十一日、宗信又預訟之執政、以蒙繼豊屈來歲

夏在國療養之 恩許也、詳開于後矣、執政回章在

宗信之譜中、

467

全上

御札令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座、四月廿日東叡山

御靈前 御參詣之儀被承之、恐悦旨尤外、紙面之趣各申

談及 上聞候、恐々謹言、

扣正文在右筆所 〔卷〕此御案文宗信公御譜中ニ其有之

一筆致啓上候、

三御所様益御機嫌能被成御座、恐悅奉存外、然者同氏大隅守儀、多年病氣付於國許半年程及罷在、致入湯養生爲仕度旨、奉願外處、願之通被下御暇、當春其御地發足仕、四月下旬國許到着仕候得共、數年之病身故長途之草臥有之、其上暑氣中り入湯難成外之處、到當冬外得者、發足時節罷成候得共、右之仕合入湯仕外儀成兼、難儀仕外、此御別而不相勝外付、只今之通ニ而者當分入湯及難致御座外間、可罷成儀御座外者迎之儀、來夏迄罷在、得と致養生參府仕外様爲仕度、奉願外、何分及可然様御差圖被成可被下外、右之段爲可申上、呈仕札候、恐惶、

〔卷〕「寛延二年」

六月廿一日

松平薩摩守

〔卷〕「御名判」

堀田相摸守様

本多伯耆守様

松平右近將監様

人々

正文在文庫

御札令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座、四月晦日増上寺

御靈屋 御參詣之儀被承之、恐悅旨尤候、紙面之趣各申

談及 上聞候、恐々謹言、

〔卷〕「寛延二年」

六月廿六日

堀田相摸守

正亮判

松平大隅守殿

472 緞豊公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

三御所様益御機嫌能被成御座、恐悅旨尤外、將又爲端午

之御祝儀、時服并御肴拜領之、難有由得其意候、紙面之

趣各申談及 上聞外、恐々謹言、

〔卷〕「寛延二年」

六月廿八日

堀田相摸守

正亮判

松平大隅守殿

473

全上

御札令披見外、

三御所様益御機嫌能被成御座、恐悅旨尤外、將亦爲端午

之御祝儀、時服并御肴拜領之、難有由得其意、紙面之趣及言上、恐々謹言、

〔寛延二年〕六月廿八日 秋元但馬守 涼朝判

松平大隅守殿

474 全上

御札令披見、

三御所様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤、將又從

公方様爲端午御祝儀、時服并御肴拜領之、難有由得其意

候、紙面之趣及言上、恐々謹言、

〔寛延二年〕六月廿八日 西尾隠岐守 忠尚判

松平大隅守殿

475 全上

一筆令啓達、弥御無吳哉承度、將亦今度御同氏薩

摩守殿、海陸無恙其元到着之由珍重存、依之如此、

恐々謹言、

〔寛延二年〕六月廿八日 尾張中納言 宗勝判

松平大隅守殿

御宿所

476 宗信公御譜中

正文在文庫

御札令披見、

公方様益御機嫌能被成御座、四月晦日増上寺

御靈屋 御參詣之儀被承之、恐悦旨尤候、紙面之趣各申

談及上 聞候、恐々謹言、

〔寛延二年〕六月廿六日 堀田相摸守 正亮判

松平薩摩守殿

477 全上

扣正文在右筆所

私儀此程より浮腫御座付、段々保養仕得共、驗氣不

相見得、長々同篇なる罷在、此段申上候、以上、

〔寛延二年〕六月廿八日 松平薩摩守

〔朱〕右御書付、御留守居岩下佐次右衛門を以、御用番松平右近將

監様江七月廿三日朝被差出、被受取置事